

勝峰晋風
吉木燦郎　校訂

芭蕉俳諧史

東京　浩文社

芭蕉略傳

松尾芭蕉は正保元年伊賀國上野に生る。父は松尾與左衞門といふ。其の子、二男四女あり。嫡子、儀左衞門命清、後に半左衞門といふ。二男、半七郎宗房、童名金作、これ芭蕉なり。明暦の比、上野城代藤堂新七郎良精の嫡子、主計良忠の近侍として、出でゝ仕ふ。時に九歳。」

主君良忠は、和歌を冷泉家に、俳諧を北村季吟に學び俳名蟬吟と號す。

寛文六年四月蟬吟歿す。芭蕉、蟬吟に奉任すること十五年、その愛寵と感化に浴して思忘るゝ能はず、悲しみ遣る能はず、其のなき主の遺髪を首にかけて、高野山に登りをさめしより、頻りに此の世を敢果なみ、身を遁れんの心せちなりければ、暇を乞ふと雖も、さる文武の才あるを惜しみて許さねば、同じ秋の末なりけむ、主の館に宿直しける夜、門の傍なる松を越え出て、我が住める家の隣りなる、城孫太夫が門の柱に、短冊にかいて發句を記し、行方知れずとなりぬ。實に芭蕉生涯の大轉機に

して、年二十三なりき。

雲とへだつ友かや雁の生わかれ

家を遁れし後、京都に季吟を訪る。東山近傍に居をトして、釣月軒或は泊船堂宗房と名乘り俳諧修業に心を費す。某々等二人の知人と共に。西の方太宰府まで遊歴したるも、此比にやあらむ、されど恐くは衣食の途に窮してにや、いつか故鄕に歸れり。

寛文十二年九月、江戶に下る。當時芭蕉二十九歲にして、季吟の門下卜尺及び鯉屋杉風の許に身を寄せ水道工事の帳面附などなして糊口の糧と爲しゐたりしが、元よりかゝる俗務風流の士のよく堪へ得ざる處、後放擲して、一定の住所もなく、本鄕或は本所邊を漂泊しつゝありしが、天和元年、上京後十年にして、漸く深川六間堀にその居を占めぬ。此庵は鯉屋杉風が建てゝ贈りし、六疊と八疊の小屋なりしが、門人曾良近傍に住みて薪水の勞をとり、杉風以下の門流代る〳〵米壚を贈る。

米買に雪の袋や投頭巾

水油なくて寢る夜や窓の月

淸貧の狀察すべし。又、庵に芭蕉を植ゑて、自ら芭蕉庵と稱したるは、卜居の翌年天和二年の事なりき。

芭蕉庵に居をトする以前、漂泊の間にも夢寢に俳諧を忘れず、刻苦勵精、遂に延寶八年の一句に、正風の礎を築きぬ。杉風、卜尺、螺舍（其角）、嵐亭、治助（嵐雪）等名風又雲の如く膝下に集まり來りて敎へを乞ひ、頓に名聲興り來りぬ。

枯枝に烏とまりけり秋の暮

されど芭蕉安住の地を得し喜びは短かゝりき。天和二年の冬芭蕉庵燒失して、芭蕉僅に身を以て免る。此火災は、芭蕉をして、如火宅の悟を得せしめ、一所不住の決心を堅めしめぬ。俳風更にこゝに一轉せり。

燒け出されたる芭蕉は甲州に赴きて、杉風の姉又は佛頂の弟子六祖五平などを賴りてゐたりしが、翌年其角素堂等五十餘人の盡力にして、秋冬の間に芭蕉庵建設せらる。これより以前五月の比ほひ芭蕉既に江戶に歸りゐたりしが、漂泊の思ひ止まず、その後十數年芭蕉庵改築せらるゝこと前後四度に及びたれど、芭蕉の此處に足を留めたるは、多くは病中か、暫時の休息の時に過ざりき。

天和四年は貞享元年なり。此年の八月上方に旅立つ。翌二年の夏江戶に歸るまで伊賀伊勢を始めとして濃尾地方、近江、山城、大和を遊歷して、至る所に正風を皷吹せり。

貞享三年は養痾に暮れぬ。四年十月再び西に向つて、一笠一杖の漂泊の旅に上る。西紀伊より播磨を踏み、歸途は木曾より善光寺を經て、翌元祿元年に歸る。

元祿二年、更に曾良を伴つて、奥羽の大行脚に上る。陸奥より出羽へ越え、越後より金澤敦賀を過ぎ、伊勢に出で、伊賀に歸り、四年の冬江戸芭蕉庵に人となる。

江戸に歸りてより、暫く門を閉して漫に人に會はず、瞑想苦心、俳諧愈々神に入らんとす。

閉居二年の後、元祿七年五月、西國より長崎の風物を賞さばやと、又西に向へり。これ最後の行脚にして、伊賀を經て京都に暫く滯在し、再び伊賀の老兄の宅を訪ひ、九月奈良を經て浪花に出で、こゝの地にて宿痾の痢病起り、病臥の枕に就き、惟然、支考、去來、木節、丈草、正秀、其角等が懇到なる看護もその甲斐なく、九月十二日、遂に道修町花屋仁左衛門の離座敷にて、眠るが如く矚曠に就けり。遺骸は門弟に守られ、琵琶湖南義仲寺の境内に葬らる。行年五十二。

この下にかくねむるらん雪佛　　嵐雪

校訂者識

目次

俳諧篇

紀行篇

俳諧篇

春之部

歳旦 初春

春たつや新年ふくべ米五升

幾霜に心はせをの松かざり

誰が婿ぞ歯朶に餅負ふうしの年

伊勢が實家にも來たり千代の春

寛文延寶天和年中

我年を棚へあけてや若えびす

手や人にとられていつも若えびす

發句なりはせを桃青宿の春

庭訓の往來誰か文庫より今朝の春

於春々大なる哉春と云々

元朝感あり

餅を夢に折結ぶ歯朶の草枕

嵐雪が送りたる正月小袖を着たれば

誰やらが姿に似たり今朝の春

歯朶の葉もなきにもちひの鏡かな

かびたんもつくはゝせけり君が春

元日や田毎の日こそ戀しけれ

空の名殘りをしまんと舊友の來りて酒與じけるに元日の晝まで寢て曉見はづして

二日にもぬかりはせじな花の春

もて來つる是ぞ年玉こゝろ玉
惠方から曳やことしの牛の玉

初　春

春立ちてまだ九日の野山かな
人も見ぬ春や鏡のうらの梅
年々や猿にきせたる猿の面
蒟蒻にけふは賣かつ若菜かな

三日口を閉て正月四日

大津繪の筆のはじめは何佛
一年に一度摘るゝ薺かな
四方に打薺もしどろもどろかな

湖水のほとりに春を迎へて

誰人か薦着ていますはなの春

蓬萊に聞かはや伊勢の初便
三日月は正月ばかり誠にて
去年はやそこにすされよ次郎月
元日やおもへばさびし秋の暮

梅

常のはなし遁れにけりな梅の花
この梅に牛も初音を啼つべし

淺草の庵にて

留守に來て梅さへよその垣根かな
梅咲てよろこぶ鳥のけしきかな

梅に尾長鳥の畫讃

此花のあるじ顏なり尾長鳥

伊賀のある方にて
旅がらす古巣は梅に成にけり

梅　林
梅白しきのふや鶴の盗れし
梅柳さぞ若衆かな女かな
さかりなる梅にすて引風もがな
梅咲や臼の挽木のよき出り

竹内一枝軒にて
世に匂へ梅花一のみそさゞゐ
あこくその心はしらずうめの春

山　家
手鼻かむ音さへうめの匂ひかな
香に匂へウニほる岡の梅の花

門人何がしみちのくに下るを馬のはなむけして
わするなよ藪の中なるうめのはな

網代民部雪堂に會
梅の木に猶やどり木や梅の花

子良館の後に梅ありといへば
御子良子の一もとゆかし梅のはな

園女亭
暖簾の奥ものゆかし北の梅

餞三乙州東武行一
梅若菜鞠子の宿のとろゝ汁
山里は万歳遲しうめのはな

里の子等梅折のこせ牛の鞭

元　夜

春もやゝけしきとゝのふ月と梅

かぞへ來ぬやしき〳〵の梅柳

上野侍亭月待　元祿四年

月待や梅かたげ行く小山伏

杵折の讃

此槌のむかし椿かうめの木か

去來のもとへなき人の事など云遣すとて

蒟蒻のさし味もすこし梅の花

梅の香にのつと日の出る山路かな

一歳夢のごとくにて猶俤たちさらぬ歎の程思ひやる斗に候

梅が香に昔の一字あはれなり

古郷の梅や浪花の二年越

梅折て椿に迷ふたもとかな

うめがかやしらゝ落くぼ京太郎

紅梅や見ぬ戀作る玉簾

まちかねて隣の梅を折にゆく

鶯

掃除して來ぬ日は庭に鶯の

在原寺にて

うぐひすを魂にねふるか嬌柳

鶯にほろりと笹の氷かな

鶯の岡で鳴日はうす着かな

安倍川に名のみして

水上はうぐひす啼て水淺し

鶯の笹落したる椿かな

鶯や柳のうしろ藪の前

相國寺にて

うぐひすに感ある竹のはやし哉

鶯や餅に糞する椽の先

霞

季吟勧進帳巻頭

和哥の跡とふや出雲の八重霞

奈良に出る道のほど

春なれや名もなき山のうすがすみ

此繪かきたる人は楢倉何がし外記とて十三歳なるよし筆のはこびの美しかりければざれ句書待る

霞やら花の雲やら煙やら

大比枝やしを引すてし一がすみ

陽炎　糸遊

陽炎や柴胡の原の薄ぐもり

元祿二仲春嗒山旅宿にて

陽炎の我肩にたつ紙子かな

花の顏にはれてうれしや朧月
艶なるやつこ花見るや誰か哥の樣
世にさかる花にも念佛申けり

水口にて二十年を經て古友にあふ

命ふたつ中に活たる櫻かな

三聖人の圖

月花のこれやまことの主達

大津尙日亭にて湖水眺望

辛崎の松は花より朧にて
先しるや宣竹か竹に花の雪
姥櫻咲や老後のおもひ出
すへたのしひよくの中は花に鳥

伊賀新大佛之記

丈六にかげろふ高し石の上
枯芝やゝかげろふの一二寸
入かゝる日もいと遊の名殘かな
糸遊にむすひつきたるけぶり哉

花櫻

阿蘭陀も花に來にけり馬に鞍

愛二酒聖一貧二錢神一

花にうき世我酒白く飯黑し
奈良七重八堂伽藍八重ざくら

雨ふりければ

草履の尻折て歸らん山ざくら

糸ざくらこや歸るさの足もつれ

花の山袈裟落されな坊主達

山ざくら瓦ふくもの先ヅ二ツ

山　家

櫻の木の花にかまわぬすかたかな

箸の先に花咲せけり櫻海苔

觀音の甍見やりつ花ぐもり

三月廿日卽興

花咲て七日鶴見る麓かな

うち山や外樣しらずの花ざかり

松風を花にかんじて居たるかな

花は賤の目にも見へけり鬼薊

小初瀨や花に暮行はんん袋

小夜の中山より彼大井川を
見わたして

日暮れば落花に雪の大井川

裏表名をつけかへる山ざくら

山の名を得てちるをこそ櫻なれ

物皆自得

花に遊ぶ虻なくらひそ友すゞめ

鶯の巣も見らるゝ花の葉こし哉

草　庵

花の雲鐘は上野か淺草か

さびしさや花のあたりのあすならふ

貞享五年二月十七日神路山
を出るとて西行の淚をした

ひ増賀の信をかなしむ

何の木の花とはしらず匂ひかな

伊賀上野藥師寺月次初會

初ざくら折りしもけふはよき日なり

夏近し其口はたへ花の風

咲みたす桃の中よりはつ櫻

吹風は尾細くなるや犬ざくら

景清も花見の座には七兵衛

探丸子のきみ別墅の花見催させ給ひけるにまかりて古き事など思ひ出侍るに

さまぐ\の事おもひ出す櫻かな

瓢竹菴に膝を入れて旅の思

ひいとやすかりければ

花を宿にはじめ終や二十日ほど

旅立ける日

此程を花に禮いふわかれかな

乾坤無住同行二人

よし野にて櫻見せうぞ檜木笠

大和國を行脚してかつらぎ山の麓を通るに四方の花はさかりにて嶺々は霞わたりたる曙のけしきいと艶なるに所の神のみかたちあしゝと人の口さがなく世にいひ傳へ侍れば

猶見たし花に明け行く神の顏

龍門

龍門の花や上戸の土產にせん

酒のみに語らんかゝる瀧の花

櫻

さくら狩きとくや日々に五里六里

春風に吹出し笑ふ花もがな

日は花に暮てさびしやあすならふ

まづ花や藤三郎かよしの山

扇にて酒くむかげやちるさくら

聲よくばうたはんものを櫻ちる

よし野にて

花ざかり山は日ごろの朝ぼらけ

鐘きえて花の香は撞ゆふべかな

しばらくは花の上なる月夜かな

初瀨にて人々花見けるに

うかれける人やはつせの山櫻

花のもとにて發句望まれ侍りて

花に明ぬなげきや我が歌袋

たかき屋にのぼりて見ればの御製の有がたきを今も猶

叡慮にてにぎはふ春の庭かまど

上野の奧

花に醉り羽織きて刀指す女

孤名がみちのくに行を送る

むく起に隣の花のにほひ哉

坦堂和尚を悼

地にたふれ根により花のわかれかな

大和國平尾村にて

花の陰謡に似たる旅寝かな

酒のみ居たる人の繪に

月花もなくて酒のむひとりかな

草庵桃櫻あり門人に其角嵐
雪あり

両の手に桃と櫻や草の餅

山家

鶴の巣にあらしの外の櫻かな

伊賀國花垣の莊はそのかみ
平城の八重櫻の料に附られ

けるといひ傳へ侍れば

一里はみな花守の子孫かや

上野にて

似合しや豆の粉めしに櫻がり

路草亭

紙衣のぬるとも折らん雨の花

木のもとに汁も鱠もさくらかな

酒落堂之記

四方より花吹入てにほの海

春の夜は櫻に明てしまひけり

萬乎別墅

年々やさくらをこやす花のちり

尾張の人より淡酒一樽木曾

の獨活茶一種送りしを門人
にひろむるとて

飲明て花活にせん二舛樽

西行上人像讃

すてはてゝ身はなきものと思へども
雪のふる日はさぶくこそあれ
花のふる日はうかれこそすれ

僧專吟餞別之詞

鶴の毛の黑き衣や花の雲

肅山のもとめにて探雪の畫
ける琴の讃

ちる花や鳥もおどろく琴の塵

露沾公にて

西行の庵もあらん花の庭

顔に似ぬ發句も出よはつざくら

京は九萬九千群集の花見かな

句空への文に

うらやまし浮世の北の山ざくら

玄虎子の深川の旅舍をとふ

花見にとさす舟遲し柳原

布袋の畫讃

物ほしや袋の中の月と花

櫻をばなど寢所にせぬぞ花
にねぬ鳥のこゝろよ

花に寢ぬ是もたぐひか鼠の巢

上野の花見にまかり侍しに

人々幕うちさはぎものゝ音
にうたの聲さまぐ\なりけ
る傍の松陰をたのみて

四つ五器の揃はぬ花見ごゝろかな

支考東行餞別

此こゝろ推せよ花に五器一具

蝙蝠も出よ浮世の花に鳥

路通がみちのくに赴く時

草枕まことの花見しても來よ

子に飽と申人には花もなし

盛じや花にそゞろうき法師ぬめり妻

半日の雨より長し糸ざくら

初花にいのち七十五年ほど

歌よみの先達多し山ざくら

てきちよくにもててふ來るや花見酒

古沓や花の旅出の拾ひばき

嵐山

花の山二丁のぼれば大悲閣

花の陰硯にかはるまる瓦

上醍醐にて

留守といふ小僧なふらん山櫻

柳　汐干

はれ物に柳のさはるしなへかな

猿雖に對して

もろく\の心柳に任すべし

春雨のいとしづかに降てやがて晴たる頃近きあたりなる柳見に行けるに春光清らなる中にも滴いまだをやみなければ

凡丸閑空で雨降るやなぎかな

贈杜國

笠の緒に柳縮る旅出かな

脇御附可被成候

入口は柳にのぼるよし野哉

雨中

傘に押分見たる柳かな

重三

青柳の泥にしだるゝ潮干かな

あち東風や面々さばき柳髪

餅雪をしら糸となすやなぎかな

古川にこひて芽をはる柳かな

猫の戀

まだふ人な犬ふみつけて猫の

田家にありて二句

麥めしにやつるゝ戀か猫の妻

猫のこひやむ時閨の朧月

猫の戀竈の崩よりかよひけり

燕蝶

楠部

盃に泥な落しそむら燕

煤ほりて埃たく家になく燕

莊子の繪讚

壁土の家する木曾の燕かな

野中の月影

唐土の誹諧とはん飛ふ小蝶

路通に對す

蝶の飛ばかり野中の日影かな

古木亭

起よ〱わが友にせんぬる小蝶

蝶の羽の幾度越る塀の屋根

吹たびに蝶の居直るやなぎかな

蝶鳥もうはつき立や花の雲

物好や匂はぬ草にとまる蝶

怒誰が製して贈りける筆の
心殊によろしければ

君や蝶我や莊子の夢ごゝろ

白魚 田螺

留別

藻にすだく白魚や取ば消ぬべく

鮎の子の白魚送るわかれかな

蜆子畫讚

明ほのや白魚白き事一寸

桑名の濱の地藏にて

白魚や黑き目をあく法の綱

蛤の闇しら魚の月夜かな
しら魚に價有こそ恨なれ
袖汚すらん田螺の海士のひまをなみ
飯貝や雨に泊りて田螺聞く

雉子雲雀並生類

草も木もはなれ切たるひばりかな
鷺の足雉子脛ながく繼そへて
蛇くふと聞けばおそろしきじのこえ
雲雀啼中の拍子や雉子の聲

臍峠

雲雀より上にやすらふ峠かな

高野山

ちゝはゝのしきりにこひし雉子の聲
ながき日も囀りたらぬ雲雀かな
原中や物にもつかず啼雲雀
古池や蛙飛込水のおと
雀子と聲啼かはす鼠の巣
闇の夜や巣をまどはして啼千鳥
蛙子は目すり鱠を啼音哉
しほしりの尻も居らぬ春の駒

遁世ノ時

雲とへだつ友かや雁の生わかれ

神祇釋教

二月堂に籠りて

水取やこもりの僧の沓の音

二月吉日とて是橋が剃髪して入醫門を賀す

初午に狐のそりし頭かな

初瀬にて

春の夜や籠り人ゆかし堂の隅

去年見たる花實に來る彼岸かな

けふひがん菩提の種を蒔日かな

ねはん會や皺手合する珠數の音

神垣やおもひもかけず涅槃像

海苔

老儒

蠣よりは海苔をば老の賣もせで

おとろへや歯に喰あてし海苔の砂

淺草千里がもとにて

海苔汁の手際見せけり淺黄椀

桃 椿 躑躅

落ざまに水こぼしけり花つばき

葉にそむく椿や花のよそごゝろ

遁水や椿ながるゝ竹のおく

富士に行椿にかくれ家に出づ

舟あしもやすむ時あり濱の桃

煩へば餅こそ喰はね桃の花

古寺の桃に米ふむ男かな

伏見西岸寺任口上人に逢ふて

我衣にふしみの桃の雫せよ

尙白と浪花に下る

たゞ一夜桃に宿かる木幡かな

滿上下あかぬ千日や桃の花

晝の休らひとて旅店に腰を掛て

躑躅活てその陰に干鱈さく女

畫讃

裾山や虹はくあとの夕つゝじ

ひとり尼わら家すげなし白躑躅

春雨　春風

赤坂の庵にて

不性さやかき起されし春の雨

苔清水

春雨の木下につたふ清水かな

笠寺やもらぬ窟もはるの雨

春雨や蓬をのばす草の道

はる雨や蓑吹かへす川柳

春雨や蜂の巣つたふ屋根の漏

奈良行

春雨や人聲うつる三笠山

春かぜやきせるくはへて船頭殿

山吹　菜の花

山吹の露菜の花かこち顔なるや

西　川

ほろ／＼と山吹ちるか瀧の音

赤坂の庵にて

山吹や笠にさすべき枝の形

畫　讃

山吹や宇治に焙爐の匂ふ時

菜畠に花見顔なる雀かな

くさぐさ集

春寒し垣根に殘る雪こかし

若松の四方に影さす光かな

あれこれをあつめて春は朧かな

藤堂橋木子にて

土手の松花や木ぶかき殿作り

イ／＼と榎の花の袖そむる

子の日しに都へ行む友もがな

大津に出る道、山路を越えて

山路來て何やらゆかしすみれ草

出羽國子呂丸をいたむ旅にて死せし人なり

當歸よりあはれは墳のすみれ草

夢想の俳諧

捧たり二月中旬はつ茄子

田家にありて二句 一句は前出猫の戀の句也

こまかなる雨や二葉の茄子だね

伊賀山中春興

種芋や花のさかりを賣ありく

まふくたか袴よそふかつく〳〵し

春雨や二葉にもゆる茄子種

此たねとおもひこなさじたうがらし

木白興行

畠うつ音やあらしの櫻あさ

奈良にて故人に別る

二股にわかれ初けり鹿の角

萱つみて貧なる女機による

雪間より薄紫の芽獨活哉

題しらず

木曾の情雪や生ぬく春の草

古畑や薺つみゆく男ども

よく見れば薺花さく垣根かな

苔清水

露凍て筆に汲ほすしみず哉

丹波市とかやいふ所にて日暮かゝりたりけるにふぢの花おぼつかなく咲たるを

草臥て宿かる頃や藤の花

行春や鳥啼魚の目は泪

望湖水惜春

行春をあふみの人とをしみけり

和歌浦

ゆくはるに和歌の浦にて追付たり

鐘撞かぬ里は何をかはるの暮

百景や杉の木の間のいろみ草

兩角扇に讃を望むに

前髪もまだ若草のにほひかな

隣庵の僧宗波旅に赴かれけるを

古巣只あはれなるべき隣かな

田家に春の暮を侘

入相の鐘もきこえずはるの暮

龍尚舍

物の名を先問ふ蘆の若葉かな

草庵會

芋植て門は葎の若葉かな

此筋に望れて茅舍の畫讃

葎さへ若葉はやさし破れ家

芭蕉を植る詞

ばせを植てまづにくむ荻の二葉哉

捨ものに梨の接穗や山屋敷

正月も美濃と近江や閏月

暮遲き四ッ谷過けり紙草履

膳所へ行く人に

獺のまつり見て來よ瀬田の橋

二見の圖を拜し侍りて

うたがふなうしほのはなゝ浦の春

草の戸も住替る代ぞ雛の家

二月十七日神路山を出るとて

躶にはまた衣更着のあらし哉

菩提山

此山のかなしさ告よ野老堀

石川北鯤生の舎弟山店子我つれ〴〵を慰んとて芹の飯煮させて深川迄持來る是金泥坊底の芹にやあらんと其代の侘も今更におほゆ

我ためか鶴哺殘す芹の食

悲しまんや墨子芹燒を見ても猶

氏もよし生立もよしや藤の棚

那須の雲岸寺佛頂禪師の小庵を尋て

留守に來て棚さがしする藤の花

夏之部

更衣

旅行

一ツぬいで後に負ぬ更衣

郭公

啼やなけ耳のすうなるほとゝぎす

岩つゝじ滿る涙やほとゝぎす

口すべれ油月夜のほとゝぎす

戸の口に宿札なのれ郭公

しばし間もまつやほとゝぎす千年

黒燒釜わつて捨てけりほとゝぎす

時鳥いまだ俳諧師なき世かな

笈負僧

みえばやな出立〳〵のほとゝぎす

淸く聞む耳に香灶てほとゝぎす

子規なき〳〵とぶぞいそがはし

須磨の海士の矢先に啼か時鳥

不卜一周忌琴風勸進

時鳥鳴音やふるき硯箱

あかし

ほとゝぎす消え行方や島一つ

郭公うら見の瀧のうらおもて

野を横に馬牽むけよほとゝぎす

高久角左衛門の宿

落くるやたかくの宿のほとゝぎす

ほとゝぎす正月は梅の花咲けり

子規大竹籔をもる月夜

ほとゝぎす啼くや五月のあやめぐさ

木がくれて茶摘も聞くやほとゝぎす

時鳥聲横たふや水の上

一聲の江に横たふやほとゝぎす

時鳥まねくや麥のむら尾花

曙やまた朝日にほとゝぎす

橘やいつの野中のほとゝぎす

烏賊賣の聲まぎらはし時鳥

さし棹書たる扇に

鳥さしも竿や捨けん郭公

子規なくや黑戸の濱ひさし

京にても京なつかしやほとゝぎす

田や麥や中にも夏のほとゝぎす

牡丹

二度熱田に草鞋をときて林氏桐葉子の家のあるじとせしに又思ひ立てあづまにくだるとて

牡丹蘂深く分け出る蜂の名殘哉

贈 桃隣 新宅自畫讚

寒からぬ露や牡丹の花の蜜

牡丹花の讚

風月の財をわすれよ深見草

松魚　茄子

かつを賣いかなる人を醉すらむ

鎌倉を生て出けむはつ堅魚

又越ん小夜の中山初松魚

大井川水出て塚本氏がもとにとまりて二句

二句之内一部ハ五月雨ノ句也五月雨ノ部ニ出ス

ちさはまた青葉ながらになすびかな

羽黒山に參籠して後鶴ヶ岡にいたり重行亭にて

めづらしや山を出羽の初茄子

卯の花　杜若

悼大顚和尙

梅戀て卯の花拜む泪かな

卯の花

うのはなやくらき柳の及ごし

其角が母五七日追善

卯の花も母なき宿はすさまじき

鳴海知足亭庭前にて

杜若我に發句のおもひあり

大阪にてある人のもとにて

杜若語るも旅のひとつかな

手のとゞく水際うれしかきつばた

かきつばた似たりや似たり水の影

こゝも三河むらさき麥かきつばた

山崎宗鑑やしきにて近衛殿の宗鑑がすがたをみればがきつばたと遊むしけるを思ひ出てこゝろのうちにいふ

有がたき姿を拜むかきつばた

夏木立　茂

雲岸寺佛頂和尚の山居の跡

啄木鳥も庵はやぶらず夏木立

幻住庵の記

先たのむ椎の木もあり夏木立

大垣の城主日光御代參勤させ玉ふに扈從す岡田氏何某に送る

笹の露袴にかけし茂りかな

ひかり合ふ二ッの山のしげり哉

嵐山藪のしげりや風の筋

若葉　夏野　鹿

西大寺に詣して

若葉して御目の雫ぬぐはゞや

あらたふと青葉若葉の日の光

奈須の余瀬翠桃亭を尋て

馬草負ふ人を枝折の夏野かな

落梧のぬしをさなきものを
うしなへる事をいたみて

もろき人にたとへん花も夏野かな

馬ほく〳〵我を繪に見る夏野哉

灌佛の日に生れあふ鹿の子哉

舊友に奈良にてわかる

鹿の角先一節のわかれ哉

芥子　螢

白芥子や時雨の花の咲つらん

贈杜國

白けしにはねもぐ蝶の形身かな

海士の顔先見らるゝやけしの花

愚に闇く棘をつかむ螢かな

木曾路の旅思ひ立て大津に
とゞまるころ瀬田の螢見に
出て

此螢田毎の月にくらべ見ん

草の葉を落るより飛ほたる哉

瀬田の螢見

ほたる見や船頭醉て覺束な

己が火を木々の螢や花のやど

晝見れば首筋赤きほたるかな

水鷄　夏の月

白河の關にて

關守の宿を水鷄に問はふもの

大津湖仙亭

此宿は水鷄もしらぬ扉かな

露川がともがら佐屋まで道送りしてともに隱士山田氏が亭にとめられて

水鷄なくと人のいへばや佐屋泊り

拵ふておれは水鷄やわたし守

月あれど留守のやうなり須磨の夏

月見ても物たらはずや須磨の夏

あかし夜泊

蛸壺やはかなき夢を夏の月

手を打ば木魂に明る夏の月

松島眺望

松しまや夏を衣裳に水と月

夏の月御油より出て赤坂や

大堰川波に塵なし夏の月

あやめ

あやめ生り軒の鰯のされかうべ

俗士にさそはれて五月四日

吉岡求馬を見る五日はや死すと聞て

花あやめ一夜にかれしもとめかな

あやめ草足にむすばん草鞋の緒

五月雨　夏の雨

阿武隈川の水源にて

五月雨は瀧ふりうづむみかさかな

樽山や柴して戻る夏の雨

しなのゝ洗馬

つゆはれのわたくし雨や雲ちぎれ

病中自詠

髪はえて容顔蒼し五月雨

五月雨にかくれぬものや瀬田の橋

笠島はいづこ五月のぬかりみち

平泉

五月雨のふりのこしてや光堂

仙人堂岸に水みなぎり舟危し

五月雨をあつめて早し最上川

日の道や葵かたぶく五月雨

五月雨や蠶わづらふ桑ばたけ

湖水はれて比叡降のこす五月雨

五月雨や色紙へぎたる壁の跡

露沾公に申侍る

五月雨に鳰の浮巣をみに行かん

大井川出水塚本氏にて二句

二句之内一句ハ前出茄子
ノ部ニ出ス

さみだれの雲吹おとせ大井川

五月雨に御物遠や月の顔

五月雨の岸檜葉の翠いつまでも

降音や耳もすうなる梅の雨

五月雨も瀬ふみ尋ぬみぞれ川

さみだれや龍燈あげる番太郎

さみだれや此笠森をさしも艸

發心の時

拙(虫損)野に臥こともたのしきやなどあるじの問れければ

さみだれに寒いまゝなり旅すがた

麥　合歡の花

麥刈娘に物いひて

青ざしや草餅の穂に出つらん

伊豆國蛭ケ小島の桑門にあふて

いざともに穂麥くらはん草枕

甲斐國山家に立よりて

ゆく駒の麥になぐさむやどりかな

麥の穗や涙に染て啼雲雀

五月上旬武府を出て故郷に赴く川崎まで人々送り來りて餞別の句をいふそのかへし

麥の穗をたよりにつかむわかれかな

荘巖の柱によりて合歡の花

象潟

象潟の雨や西施がねふの花

早苗　田植　田植うた　五月乙女

雨折々おもふ事なき早苗かな

早苗とる手もとや昔しのぶ摺

奥州今の白川にて

早苗にも我色黒き日數かな

送別

手はなせば夕風やどる早苗かな

西か東かまづ早苗にも風の音

田一枚植て立去る柳かな

奥州岩瀬郡相樂伊左衛門亭にて

風流のはじめやおくの田植うた

藏田氏に遊びて

柴付し馬の戻りや田植樽

尾張にて舊交に對す

世を旅に代かく小田の行戻り

五月乙女にしかた望んしのぶ摺

紫陽花　竹の子

紫陽花や藪を小庭の別庭敷

あぢさゐや帷子時の薄淺黄

うきふしや竹の子となる人の果

竹の子や稚き時の繪のすさみ

四度結ひたる深川の庵を立
出るとて

鶯や竹の子藪に老を啼

新麥や筝時の草の庵

老僧の竹の子をかむ涙かな

瓜　眞桑　夕顔

河野松波宅にて

瓜の花雫いかなるわすれ草

秋芳軒宜白のまねきに應じ
て稲葉山の松の下涼みして
長途の愁をなぐさむほど

山陰や身をやしなはん瓜畠

酒田の吟

初眞桑たてにやわらん輪にやせん

幻住庵に籠れる唄

夕にも朝にもつかずうりの花

花と實と一度に瓜の盛かな

子供等よ晝顔咲ぬ瓜むかん

去來が別墅にて

朝露によごれてすゞし瓜の土

落柿舍亂吟

柳骨柳片荷はすゞし初眞瓜

之道に對して

われに似な二ッにわれし眞桑瓜

人々つどいて瓜の名所數多
いひ出ける中に

瓜の皮むいた所や蓮臺寺

闇夜狐下はふ玉眞桑

夕顔に見とるゝ身もうかりひよん

夕顔の白く夜の後架に紙燭とりて

夕顔や秋は色〲の瓢かな

夕顔に干瓢むいてあそびけり

ゆふ顔や醉て顔出す窓の穴

風薫　夏羽織

丈山の像に謁す

風かをる羽織は襟もつくろはず

出羽新庄盛信亭

風の香も南に近しもがみ川

小倉山常寂寺にて

松杉をほめてや風のかほる音

加賀へ文通に

風薫る越の白根を國の花

游刀亭納凉二句

二句之内一句ハ暑ノ部ニアル湖や暑さをしむ雲の峯ノ句也

漣や風のかをりの相拍子

辨慶が七ツ道具の刀豆は日本一のがうのもの哉此狂歌の心もちて

辨慶は夏も紙衣の羽織かな

わかればや笠手に提て夏羽織

草之類

山路にて

夏來てもたゞ一ツ葉の一葉かな

山賤のおとがひ閉るむぐらかな

平泉

夏草や兵どもの夢の跡

元祿元年辰六月大津奇香亭興行

蕣のみじか夜眠る晝間かな

東武吟行のころ美濃路より平田の李由のもとへ文の音信に

晝顏に晝寢せうもの床の山

夏豆の二葉や麥の株かへし

美しき其ひめゆりや后がね

木類

木曾を經て武の深川へくだるとて

思ひたつ木曾や四月の櫻狩

元祿二年卯月二十四日築井
彌三郎宅にて
此宿の傍に大なる栗の木陰
をたのみて世をいとふ僧あ
り可仲といふ

世の人の見つけぬ花や軒の栗

武隈の松

櫻より松に二木を一月ごし

我松しまの松といふめるを
苫屋かしたる案内の海士人
に習ひて

松の露苫屋見に來る序かな

柚の花にむかし忍ばん料理の間

癸酉年森川許六離別詞

椎の花のこゝろにも似よ木曾の旅

道芝にやすらひて

どんみりとあふちや雨の露ぐもり

駿河の國に入て

駿河路や花橘も茶のにほひ

清瀧や波にちりこむ青松葉

椹の實や花なき蝶の世すて酒

關の住素牛ぬし大垣の旅店
を訪れけるかの藤しろみか
さといひけん花は宗祇の昔
しに匂ひて

藤の實は俳諧にせん花のあと

夏山や杉に夕日の一里鐘

日の入の雲吹はらへむら樗

因亭にて竹睡日

ふらずとも竹植る日は簑と笠

須磨寺や籟かぬ笛きく木下闇

生類

卯月の末庵にかへりて旅のつかれをはらすとて

夏衣いまだ虱を取つくさず

蝸牛角ふりわけよ須磨明石

蚤虱馬の尿する枕もと

這出よかひやが下の蟾の聲

能なしの寝たしわれをぎやう〱し

うき我を淋しがらせよかんこ鳥

我宿は蚊の小さきを馳走かな

許六離別詞二句

うき人の旅にも習へ木曾の蠅

くさ〱集

盤齋うしろむきたる像

世の中をうしろになして山里にそむきはてゝも墨染の袖といふに

團扇もてあふがん人のうしろむき

うらみの瀧

しばらくは瀧に籠るや夏の初

修驗光明寺行者堂

夏山に足駄を拜む首途かな

笈と太刀も五月にかざれ紙幟

最上秋鴉主人の佳景に對す

山も庭もうごき入るゝや夏座敷

松　島

島々や千々にくだけて夏の海

六月四日羽黑山坊におい
て俳諧興行

有がたや雪をかをらす南谷

新莊風流亭興行

水のおく氷室尋ぬるやなぎかな

出羽三山順禮三句の内

語られぬ湯殿にぬらす袂かな

粽結ふ片手にはさむひたひ髮

井狩氏水櫻

世の夏や湖水にうかぶ浪の上

晉の淵明をうらやむ

窓形に晝寢の臺やたかむしろ

水無月や鯛はあれども鹽くじら

なまぐさし小なぎが上の鮎の腸

五月三十日の富士の思ひ出らるゝに

目にかゝる時や殊更五月不二

野明亭

清瀧の水汲よせてところてん

淺香山帷子干て通りけり

遠淺や夏の日の出の舟ごゝろ

なつ山や紙すく里は飯時分

文鱗子出山の像を贈られければ

南も佛草の臺もすゞしけれ

李青く竹笠破て石あぶなし

光明寺にて

汗の香に衣ふるはむ行者堂

短夜や驛路の鈴の耳につく

峰入や一里おくるゝ小山伏

山のすがた蠶が茶臼の覆ひ哉

富士の風や扇にのせて江戸みやげ

夏寒し大佛暮ぬ堂の内

冷汁や須磨に淡路の帆懸船

川狩や伊勢武者は皆赤ふとし

元祿七年六月廿一日大津木節亭にて

秋ちかき心のよりや四疊半

撫子 蓮 紅花

酔て寢ん撫子咲る石の上

正成像

なでしこにかゝるなみだや楠の露

鐵肝石心此人之情

木間主馬が亭にまねかれしに太夫が家名を稱して二句 二句之内一句ハ下ニ出シひうさあくる扇や雲の峰ノ句也

蓮の香に目をかよはすや面の鼻

尋ぬれば蓮の君子の門ばしら

枝なくて世にかゝはらぬ蓮かな

爪紅の末摘花のゆかりかな

まゆはけを俤にして紅のはな

行末は誰が肌ふれん紅の花

暑 雲の峰

蛤の口しめてゐる暑かな

水無月はふく病やみの暑かな

殺生石

石の香や夏草赤く露暑し

寺嶋彦助亭

暑き日を海に入れたり最上川

游刀亭二句　二句之内一句ハ前出ノ連や風のかをり卅拍ナノ句也

湖や暑ををしむ雲の峰

本間主馬二句　二句之内一句ハ前出ノ蓮の香に目をかよはすや面の鼻ノ句也

ひら〱とあくる扇や雲の峰

廿九日扨こそ得たれ雲の峰

雲の峰いくつ崩れて月の山

嵐山

六月や峰に雲おくあらし山

蟬　清水

稲葉山

撞鐘もひゞくやうなり蟬の聲

無常迅速

やがて死ぬけしきも見えず蟬の聲

人に帷子をもらひて

いでや我よき布着たり蟬の聲

羽州山形領立石寺

閑さや岩にしみ入る蟬の聲

梢からあだに落けり蟬のから

聲にみなきしまふてやせみのから

さゞれ蟹足はひ上る清水かな

岐阜山

城あとや古井の清水先とはん

那須の温泉大明神の相殿に
八幡宮を移し奉り兩神一方
に拜れ給ふ

湯を結ぶちかひもおなし岩清水

むすぶよりはや歯にひゞく清水哉

芳野西行庵

硯洗ふ智恵は出たり苔清水

掛て置拂子は智恵の土用干

千子が身まかりけるを聞て
美濃國より去來がもとへ申
遣し侍りける

なき人の小袖も今や土用ほし

夏の夜や木魂に明る下駄の音

湖水邊菅沼氏曲翠亭六月十
六日

夏の夜や崩れて明しひやしもの

鵜すゞみ

落梧なにがしにまねきに應
じて稻葉山の松の下凉み
して、長途の愁をなぐさむ
るほどに

美濃國にて辰のとし。

またゝぐひ長良の川の鮎鱠

鵜飼をみる鵜船も通り過る
程に歸るとて

おもしろうてやがて悲しき鵜舟哉

巣立せり鵜の子や海を戀るらん

一文の酢の錢落す鵜川哉

のりたやと子の聲くらき鵜舟かな

箔押よとちも身のため夕すゞみ

破風口に日影やよはる夕すゞみ

唐破風や日影かげろふ夕すゞみ

唐破風の入日や薄き夕すゞみ

皿鉢のほのかに闇の宵涼み

小夜の中山にて

命なりわづかの笠の下すゞみ

風瀑を餞別す

わすれずば小夜の中山にてすゞめ

尾花澤清風亭

涼しさを我宿にしてねまるなり

涼しさやほの三日月の羽黒山

酒田の湊伊東不玉亭にて袖
の浦眺望

あつみ山や吹浦かけて夕すゞみ

汐越や鶴はぎぬれて海すゞし

小鯛さす柳すゞしや海士が軒

花の上漕ぐとよまれし櫻の
老木西行法師の紀念を殘す

夕ばれや櫻に凉む浪の花

四條の河原すゞみ

川風や薄がき着たる夕すゞみ

曲翠に遊びて四家といへる
題を置て

飯あふぐ嚊がちそうや夕すゞみ

凉

川中の根木によころふすゞみかな

野水閑居を思ひ立けるに

すゞしさは指圖に見ゆる住居かな

雪芝が庭の松を植るを見て

凉しさや直ぐに野松の枝のなり

十八樓之記

此あたり目に見ゆるものみなすゞし

東武より上りて人々に對す

東路の毛ずねはづかし床すゞみ

野明亭

すゞしさを繪にうつしけり嵯峨の竹

百里來たりほどは雲井の下凉し

瓜つくる君かあれなど夕すゞみ

松風の落葉か水の音すゞし

晝顏に米搗すゞむあはれなり

秋之部

今朝の秋　初秋

張ぬきの猫もしるべし今朝の秋
秋來にけり耳をたづねて枕の風
初秋やたゝみながらの蚊帳の夜着

鳴海眺望

初秋は海やら田やらみどりかな
初秋や海も青田も一みどり

七夕

水草も乘物かさん天の川
七夕のおはぬこゝろや雨中天
月弓や壻の一藝男七夕

なにがしの御代官に隨身して四國へ赴く人に

七夕や裸すゞりの俄たび

越後出雲崎にて

荒海や佐渡に横たふ銀河

越後直江津今町にて

文月や六日も常の夜には似ず

野童亭

七夕や秋を定むるはじめの夜
水學ものりものかさん天の河

合歡の木の葉ごしもいとへ星の影

素堂の母七十餘り七としの秋七月七日にことぶきするに萬葉七種をもて題とす。是につらなるもの七人、此結縁にふれて、各また七叟のよはひにならはむ

七株の萩の手本や星の秋

小町が歌

高水に星も旅寢や岩の上

玉祭

家はみな杖にしら髮の墓詣

かゞの國を過るとて

熊坂がゆかりやいつの玉まつり

鳥部山

魂まつりけふも燒場のけぶりかな

尼壽貞が身まかりけると聞て

數ならぬ身とな思ひそ玉まつり

骸骨の讃

夕風や盆提灯も糊はなれ

蓮池や折らで其まゝ玉祭

露稻妻

とく〳〵の清水

露とく〳〵試みに浮世すゝがばや

二見の浦にて

硯かとひろふやくほき石の露

蓍讃

西行のわらじもかゝれ松の露

今日よりは書付消さん笠の露

寄二李下一

稻妻を手にとる闇の紙燭かな

あの雲は稻妻をまつたより哉

粟津にて

稻妻や海の表をひらめかす

本間主馬宅にて

稻妻や顏の所がすゝきの穗

稻妻や闇の方行く五位の聲

いなづまにさとらぬ人のたふとさよ

或智識の日なま禪大疵のもとひとかやいとありがたくて

白髮ぬく机の下やきり〴〵す

きりぎりす　くさ〴〵の虫

酒堂が予が枕もとにて鼾をかきしを

床に來て鼾に入るやきり〴〵す

猪の床にも入るやきり〴〵す

しづかさや繪かゝる壁のきり〴〵す

淋しさや釘に懸たるきり〴〵す

むざんやな甲の下のきり〴〵す

朝な〳〵手習すゝむきり〴〵す

蜑が家は小海老にまじるいとゞ哉

盆過て宵闇くらし蟲のこゑ

胡蝶にもならで秋ふる菜虫哉

ほね柴や斯と見るより蝶の殼

蜻蛉や取つきかねし石の上

聽閑

蓑虫の音を聞に來よ草の庵

蕣　女郎花

閉關の說

あさがほや晝は鎖おろす門の垣

當麻寺

僧蕣いく死かへる法の松

嵐雪が畵しに讃を望れければ

朝顔は下手のかくさへ哀なり

更科の月見んと旅立ける頃
人々廓外に送りて盃をかたむけゝる

朝顔は酒もりしらぬさかりかな

蕣の花に鳴き行く蚊のよわり

深川閉關之頃

朝顔や是もまたわが友ならず

和二角蓼螢句一

朝顔に我は飯くふ男かな

ひよろ／＼と尙露けしや女郎花

玉川の水におぼれそをみなへし

萩

小松といふ所にて

しほらしき名や小松ふく萩すゝき

觀水亭雨中の會

ぬれて行人もをかしや雨の萩

萩の聲こや秋風の口うつし

浪の間や小貝にまじる萩の塵

小萩ちれますほの小貝小盃

萩原や一夜はやどせ山の犬

寢たる萩や容顔無禮花のかほ

畫讃

しら露もこぼさぬ萩のうねりかな

藤堂玄虎子の庭なかばに作りたるを見て

風色やしどろにふえし庭の萩

萩の露米つく宿のとなり哉

木槿 蕣

花木槿はだかわらべのかざしかな

馬上の唫

道のべの木槿は馬にくはれけり

足輕町の外折垣を通れない
わしの聲さへ寂て

桐の木に鶉啼なる塀の内

鷹の目も今や暮ぬと啼鶉

月

延寶四辰桑名氏何がしの催
しに應じ渡部氏に會あり

詠るや江戸にはまれな山の月

武藏守泰時仁愛を先とし政
以去欲爲先

明月の出るや五十一ヶ條

侘てすめ月侘笠の窓を家として

月をわび、つたなきをわび
て、わふとこたへんとすれ
ど問ふ人もなし、猶わびわ
びて

わびてすめ月侘齋がなら茶歌

三日月や朝顔の夕つぼむらん

我影は四角な影を窓の月

山寒し心の底や水の月

小夜の中山

馬に寝て殘夢月遠し茶のけぶり

外宮

三十日月なし千とせの杉を抱く嵐

月はやし梢は雨をもちながら

根本寺の隠室に宿かる人をして深省を發せしむ

寺に寢てまこと顔なる月見かな

雲折々人を休むる月見かな

常陸へまかりける時船中にて苫をあくれば

明ほのや廿七夜も三日の月

座頭かと人に見られて月見かな

芋の葉や月待里のやけ畠

名月や池をめぐりて夜もすがら

大曾根成就院の歸るさに

何事の見たてにも似ず三日の月

あの中に蒔繪書たし宿の月

姥捨山

俤や姨ひとりなく月の友

いざよひもまたさらしなの郡かな

善光寺

月影や四門四宗も只ひとつ

中秋の月は更科の里姨捨山

になぐさめかねて猶哀さの
目にもはなれずながら長月
十三日になりぬ

木曾の痩もまだ直らぬに後の月

元祿二年つるがの湊に月を
見て氣比の明神に詣遊行上
人の古例をきゝて

月清し遊行のもてる砂の上

名月や北國日和定めなき

淺水の橋をわたる俗にあさ
うつといふ淸少納言の橋は
とありて一條あさむつのと
書る所とぞ

あさむつや月見の旅の明はなれ

悼二遠流天宥法師一

その靈を羽黑にかへせ法の月

市振にて

一ッ家に遊女も寢たり萩と月

月のみか雨に相撲もなかりけり

月見せよ玉江の蘆をからぬ先

燧が山

義仲が寢覺の山か月悲し

湯尾峠

月に名を包みかねてやいもの神

鐘ケ崎にて

月いづこ鐘はしづみて海の底

木因亭

かくれ家や月と菊とに田三反

斜嶺亭戸をひらけば西に山あり伊吹といふ花にもよらず雪にもよらずたゞこれ孤山の徳あり

そのまゝに月もたのまじ伊吹山

伊勢國又玄が宅にとゞめられ侍るころ其の妻男の心にひとしくものことまめやかに見えければ旅の心をやすくし侍りぬ彼日向守が妻髪を切て席をまうけられし心を今更に申出で

月さびて明智が妻のはなしせん

賤の子や稲すりかけて月をみる

正秀亭初會

月代や膝に手をおく宵の宿

古寺翫月

名月や坐にうつしき顔もなし

名月や湖水に浮ぶ七小町

月見賦

米くるゝ友をこよひの月の客

三井寺の門たゝかばやけふの月

堅田十六夜の辨

鎖明て月さし入よ浮見堂

名月は二ッ有ても瀬田の橋

いざよひや海老いる程の宵の闇

やすく〱と出ていざよふ月の雲

柴の戸の月やそのまゝ阿彌陀坊

石山　詣ける道

橋桁のしのぶは月の名残哉

旅窓長夜

九度起ても月の七ッかな

三日月に地は朧なり蕎麥の花

名月や門にさし込潮がしら

柱は杉風枳風が情を削り住居は曾良岱水が物數寄をわぶ猶明月のよそほひにとて芭蕉五本、植て

芭蕉葉を柱に懸ん庵の月

深川の末五本松といふ所に舟をさして

川上とこの川下や月の友

いざよひはとりわけ闇のはじめ哉

嵐蘭の初七日墓に詣

見しやその七日は墓の三日の月

東順傳

入月のあとは机の四隅かな

伊賀の山中にて

名月の花かと見えてわたばたけ

名月に麓の霧や田のくもり

同國の簑虫庵

今宵誰芳野の月も十六里

元錄七年九月八日南都より難波にわたる生玉邊にて日をくらして

菊に出て奈良と難波は宵月夜

住吉の市に立て

升買て分別かはる月見哉

其柳亭

秋もはやはらつく雨に月の形り

畦止亭即興月下に兒を送る

月すむや狐こはがる兒の供

見る影やまだ片なりも宵月夜

木を伐て本口見ばやけふの月

夏かけて名月暑きすゞみかな

名月の夜やおもく〱と茶臼山

月澄て秋は入日のあとのふし

古將監の古實を語りて

月やその鉢の木の日のした面

廿日過出るや名殘三日の月

影は天の下てるひめか月の顏

寶や月間口千金の通り町
夜竊に蟲は月下の栗を穿つ
三日月やはや手に障る草の露
武藏野の月の若ばえや松島種
名月や西にもほしき窓一つ
月にしるべこなたへいらせたびの宿
名月や鶴脛高き遠干潟
名月や我を筆架のかげぼふし
名月や我家にもどる門徒坊
川舟やよい茶よい酒よい月夜
水油なくて寝る夜や窓の月
初月や向ひに家のなき處
三日月や名のなき山も三笠山

名月やたしかにわたる鶴の聲

隱士等栽坊にまみゆ

名月の見所問む旅寢せん

また明ぬこゝはいかに窓の月

越人へ

男ぶり水香顏や秋の月
物識の心問たし後の月

礎

よし野

礎打て我にきかせよや坊が妻

猿引はさるの小袖をきぬた哉
聲澄て北斗にひゞく碪かな
近江路を通る頃日野山のほとりにて故摩といふものに上の絹をとられて
剝れたる身にはきぬたのひゞき哉

秋の風　野わけ

座右銘
ものいへば唇寒し秋の風
桃夭の名をつけて
桃の木のその葉ちらすな秋の風
牛部屋に蚊の聲よわし秋の風

秋の風やり戸の口やとがり聲
蜘何と音を何と啼秋の風
野ざらしを心に風のしむ身かな
猿を聞人捨子に秋の風いかに
義朝の心に似たり秋の風
秋かぜや藪もはたけも不破の關
身にしみて大根からし秋の風
途中吟
あか〳〵と日は難面もあきの風
嵐蘭誄
秋風に折れてかなしき桑の杖
追善
塚も動け我泣聲は秋の風

石山の石より白し秋の風

宇治の中村といふ所にて

秋風や伊勢の墓原猶すこし

秋原の吹とも青し栗のいが

暮秋の氣色を

秋風や桐にうごいて蔦の霜

西東あはれさ同じ秋の風

野水が旅行を送りて

見送りのうしろやさびし秋の風

やゝあきかぜ吹とばせ松のむら紅葉

深川庵

芭蕉野分して盥に雨を聞く夜哉

猪もともに吹るゝのわけかな

吹とばす石は淺間の野わけ哉

蘭　芭蕉

或茶屋店にて

蘭の香や蝶の翅にたきものす

敦賀守榮院にて

門に入れば蘇鐵に蘭の匂ひかな

此寺は庭一ばいのばせをかな

諸賛

鵙啼やその聲に芭蕉やれぬべし

蔦　柿

閑人廬牧亭

蔦植て竹四五本のあらしかな

棧やいのちをからむ蔦かづら

蔦の葉はむかしめきたる紅葉かな

澁柿や一口はくらふ猿のつら

片野望翠宅にて

里ふりて柿の木もたぬ家もなし

李由去來の二人

菎蒻と柿とうれしき草の庵

堅田柳瀬可休亭

祖父の親孫のさかえや柿みかん

菊

菊花の蝶

秋を經て蝶もなめるや菊の露

草庵の雨

起上る菊ほのかなり水のあと

左柳亭

はやく咲け九日もちかし菊の花

大垣人如行亭

痩ながらわりなき菊のつぼみかな

悦堂和尚の隱室にまねかれて

香を殘す蘭帳菊のやどりかな

重陽

さかづきの下ゆく菊や朽木盆

菊の露落て拾へばぬかごかな

九月五日乙州が一樽たづさへて來りければ

草の戸や日くれてくれし菊の酒

見所のあれや野分の後の菊

田所にやどりて

稻こきの姥もめでたし菊の花

大門通を過るとて

琴箱や古もの店の背戸の菊

堅田の何某木既醫師の亭にまねかれしにみづから茶をたて酒をもてなされける野菜八珍の中に菊花の鱠いと芳しければ

蝶も來て酢をすふ菊のすあへかな

素堂亭

蓮池の主翁また菊を愛すきのふは龍山の宴をひらきけふはその酒のあまれるをすゝめて狂吟たはれとなす猶思ふ明年誰かすこやかならん事を

いざよひのいづれか今朝に殘る菊

深川よりの文通に

いざよひの月と見はやせ殘る菊

佁　水　亭

影まちや菊の香のする豆腐串

八町堀にて

きくの花咲や石屋の石の間

荊蠢が道南のこゝろをいへ
る山家集　題にならふ

一露もこぼさぬ菊の氷かな

加賀山中溫泉

山中や菊はたをらぬ湯の匂

閑峠にて

きくの香にくらがり登る節句かな

堅田禪瑞寺にて

朝茶のむ僧しづかなりきくの花

菊の香やならには古き佛達

菊の香やならは幾代の男ぶり

園　女　亭

白菊の目に立て見る塵もなし

茸

其匂ひ籠よりもるゝ松茸の

松茸やしらぬ木の葉のへばりつく

松たけやかぶれた程の松の形

はつ茸やまだ日數へぬ秋の露

鷹狩やあぶなきことに夕しぐれ

相撲

むかしきけ秩父殿さへ角力取

許六が畫に

勝角力いつも上手に米の飯

角髪やおくを出羽の相撲取

唐がらし

大風のあしたも赤し唐辛子

深川夜遊

青くても有べきものを唐がらし

かくさぬぞ宿は菜汁に唐がらし

木曾墳の舊草にありて敲戶の人に對す

草の戶をしれや穗蓼に唐がらし

木の類

木曾の橡うき世の人のみやげかな

全昌寺にて加州大聖寺城下

庭掃て出ばや寺に散る柳

如水別墅

籠居て木の實草の實拾はゞや

橙や伊勢の白子の店ざらし

遊女の畫讃

枝ぶりの日に／＼かはる芙容哉

霧雨の空を芙蓉の天氣かな

散柳あるじも我も鐘を聞く

嵐雪におくる

さびしさを問てくれぬか桐一葉

色づくや豆腐に落てうす紅葉

草の類

吉野　後醍醐亭御陵

御廟年を經てしのぶは何を忍ぶ草

桑門已白亭に日ごろありて

やどりせん藜の杖に成る日迄

杉の竹葉軒といふ庵を尋て

粟稗にとぼしくもあらず草の庵

みちのく出羽の名所／＼を見廻りて猶北海の荒磯をつたひ高砂子あゆみくるしき越の長途に多病いとつかれて高田といふ所に至る此境に良醫棟雪とかや風雅の聞へ遠く傳へたるを尋入て

藥欄にいづれの花を草枕

越中に入て

早稲の香やわけ入る右は荒磯海

知足の弟金右衛門が新宅を賀す

よき家や雀よろこぶ背戸の粟

東寺を過るに

荻の穂や頭をつかむ羅生門

鬼灯は實も葉もからむ紅葉かな

草いろ／＼おの／＼花の手柄かな

畫讃

鶏頭や雁の來る時猶あかし

草庵二句　二句之内一句ハひや／＼と壁をふまへて晝寝がなの句也

道細しすまふとり草の花の露

秋海棠西瓜の色に咲にけり

唐黍や軒端の荻の取ちがへ

故人に逢て

冬瓜やたがひにかはる顔の形

くすし何がしの像

村雨を背中におふて柴胡堀

いたゞいておち穂拾はん關の前

幾秋のせまりて瞿子にかくれけん

伊勢の斗從に山家をとはれて

蕎麥はまた花でもてなす山路かな

毒海長老我草の戸にして身
まかり侍るを葬て

何事もまねきはてたる芒かな

鳥獸

田中の法藏寺にて

苅あとや早稻かた〳〵の鳴の聲

棧や先おひひいづ駒むかへ

堅田にて

病雁の夜寒に落て旅寢かな

稻雀茶の木畑や逃處

老の名の有ともしらで四十雀

榎の實散る椋の羽おとや朝あらし

月にかゝる雲やしばしのわたり鳥

ひいとなく尻聲かなし夜の鹿

木つゝきの柱をたゝく住居かな

世渡りやわたりくらべてわたりどり

ひれふりて牝鹿もするや牡の島

武藏野や一寸ほどな鹿の聲

秋

秋來ぬと妻乞星や鹿の皮

見わたせば詠れば見れば須摩の秋

秋十とせ却りて江戸を指す故郷

神前

此松の實ばへせし代や神の秋

田家

かりかけし田つらのつるや里の秋

送られつ別れつ果は木曾の秋

夕がほやかいまはるほど秋は來ぬ

雨の日や世間の秋を堺町

後家の秋ものゝあはれをとゞめたり

ある草庵にいざなはれて

秋すゞし手毎にむけや瓜茄子

寂しさや須磨にかちたる濱の秋

小名木澤の桐溪興行

秋にそふて行ばや末は小松川

車庸亭二句

秋の夜を打崩したる噺かな

おもしろき秋の朝寝や亭主ぶり

何くふて小家は秋の柳陰

蝶鳥のしらぬ花あり秋の空

信濃なる坂木の横吹といふ所に乞食のいねたるを見て

翁おきな起ば浮世の秋を見ん

秋の色ぬかみそつぼもなかりけり

旅懷

此秋は何で年よる雲に鳥

秋ふかき隣は何をする人ぞ

幻住庵

旅癖や寝冷煩ふ秋の山

さらでさへ秋よ野寺の一ッ鐘

夜歩行にから櫓の音や浦の秋

秋さびし編笠着たる人の形

くさ〳〵集

如行亭

しら露のさびしき味をわするるな

瓢の銘

米のなき時は瓢にをみなへし

人に米をもらひて

世の中は稲刈ごろか草の庵

霧しぐれ富士を見ぬ日ぞ面白き

駐馬の影見む關のわたし舟

悼仙風

手向けり芋は蓮に似たるとて

西行谷

芋洗ふ女西行ならば歌よまん

千りが舊里

綿弓や琵琶になぐさむ竹の奥

物書て扇引さく余波哉

越後國能生神社汐路の名鐘

曙や霧にうづまく鐘の聲

內宮はことをさまりて外宮の遷宮拜み侍りて

たふとさに皆押合ぬ御遷宮

曲翠亭にて題夜寒

乳麺の下たき立る夜寒かな

草菴二句　道細しすまふとり草の花の露

ひや〳〵と壁をふまへて晝寢かな

手にとらば消ん涙ぞあつき秋の霜

新藁の出そめて早きしぐれ哉

色ならぬいろはもかきて火中哉

とらへたき聲ばかり見る蘆間哉

これもまた水生木やもみぢ餠

よるべをいつ一葉に虫の旅寢して

不卜亡母追善

水向けてあととひ給へ道明寺

嵐雪が四國へ渡る時

雲霧の暫時百景を盡しけり

旅がらす二百十日も船支度

みちのくにて

くりからや三度起ても落し水

高瀬の漁火といふ題をとりて

篝火にかじかや浪の下むせび

萍やしかも山田の落し水

温泉の名残今宵は肌の寒からん

鍼立や肩に槌打から衣

江鮭ありもやはすらん富士の湖

於君崎

松なれや霧ゑいさうゑいと引ほどに

秋の暮　行秋

憶老杜

髭風を吹て暮秋歎するは誰子ぞ

死もせぬ旅寝の果よ秋の暮

枯枝に烏のとまりけり秋の暮

雲竹自畫讃

こちらむけ我もさびしき秋のくれ

廿六日きよ水の茶店に遊吟して泥足の集の俳諧あり連衆十二人

此道や行人なしに秋の暮

人聲や此道かへるあきの暮

おなじ時あるじの男のふかく望けるに

松風の軒をめぐりて秋のくれ

六介六兵衛の二人ばせを庵
を訪れて故郷の安否を聞

幾千里へだつおもひや秋の暮

秋のくれ客か亭主か中柱

愚案ずるに冥途も斯や秋の暮

舩頭の尻聲さむし秋の暮

行秋や身に引まとふ三布蒲團

行秋の猶たのもしや青蜜柑

雪の旅それらではなし秋のくれ

行秋や手をひろげたる栗の毬

旅の物うさもいまだやまざ
るに長月六日になれば伊勢
の遷宮拜まむと又舟にのり
て

蛤のふたみにわかれ行秋ぞ

時雨　冬の雨　寒雨

手つから雨の侘笠をはりて

世にふるは更に宗祇のやどりかな

名護屋へ入る道の程謳吟す

草枕犬もしぐるゝか夜のこゑ

林氏桐葉ぬし心ざし淺から
ざりければ暫くとゞまらん
とせし程に

此海に草鞋を捨ん笠しぐれ

十一月十一日餞別會

旅人と我名呼ばれん初しぐれ

一尾根は時雨る雲か富士の雪

山城へ井手の駕籠かる時雨かな

伊賀へ歸る山中にて

初時雨猿も小蓑をほしげなり

いづくしぐれ笠を手に提てかへる僧

草　庵

人々をしぐれよ宿は寒くとも

元錄三年の冬粟津の草庵よ

り武江におもむくとて島田の驛塚本が家にいたりて

宿かして名をなのらする時雨哉

元錄六年神無月三日の夜許六亭にて

馬かたはしらじ時雨の大井川

人のかたへ初て行て

けふ斗人も年よれ初しぐれ

美濃垂井の宿矩外がもとに冬籠して

初しぐれ初の字をわが時雨かな

戸田の權太夫亭にて

作り木の庭をいさめるしぐれ哉

一しぐれ礫や降て小石川

時雨行や舟の帆つなに取付て

ゆく雲や犬の欠け尿村時雨

火吹竹音やしぐれて小豆飯

むら時雨てれふれ町の名なるべし

鷄の聲にしぐるゝ牛家かな

途中時雨

笠もなき我をしぐるゝか何と〳〵

鳴海鍛冶出羽守氏雲亭にて

面白し雪にやならん冬の雨

舊里の道すがら

しぐるゝや田のあらかぶの黑む程

雁さわぐ鳥羽の田面や寒の雨

こがらし

名護屋に入る道の程諷吟す

狂句凩の身は竹齋に似たるかな

竹齋讃

こがらしや竹にかくれてしづまりぬ

木枯や頬腫痛む人の顔

美濃耕雪子別墅則時

木がらしに匂ひやつけし歸り花

三河新城の家中菅沼權右衞

門宅

京に飽て此こがらしや冬住居

鳳來寺に參籠して

木がらしに岩吹とがる杉間かな

摘けんや茶を木枯の秋ともしらで

凩の町にも入るや鯨賣

こがらしの吹やるうしろすがたかな

霜

心理あくして欄木起倒子へ
藥の事言遣すとて

藥のむさらでも霜の枕かな

杜國が庵を尋て

さればこそあれたきまゝの霜の宿

葛の葉のおもて見せけり今朝の霜

土屋四友子を送りて鎌倉ま
でまかるとて

霜を踏で跂跛ひく迄送りけり

貧山の釜霜に啼聲寒し

深川大橋成就せし時

有がたやいたゞいて踏む橋の霜

から〳〵と折ふし凄し竹の霜

紙子にも霜や置かと撫て見し

霜がれに咲は辛氣な花野かな

かりてねん案山子の袖や夜半の霜

夜すがらや竹氷らするけさのしも

初霜や菊冷初る腰の綿

穭田に霜の花見る朝かな

爐開　口切　火燵
火桶　埋火

支梁亭口切

口切に堺の庭ぞなつかしき

爐ひらきや左官老ゆく鬢の霜

硯このむ奈良の法師が火燵哉

住つかぬ旅の住居や置炬燵

ふるき世をしのびて

霜の後なでしこ咲る火桶かな

あらがねの土よりおこる火桶かな

きりぎりすわすれ音に啼火燵哉

少年をうしなへる人に

埋火もきゆや泪の烹る音

曲水旅館にて

埋火や壁には客の影法師

河豚

雪の魨左勝水無月の鯉

あら何ともなきのふは過てふぐと汁

貞享はじめのとし桑名に遊びてあつたにいたる

遊び來ぬ鯫釣かねて七里まで

ふぐ汁や鯛も有のに無分別

家にふるき奴僕ありてかたく聖の教を守る

兄弟のくすし憎むや河豚汁

大根

口上に書落しけり土大根

玄虎子旅館にて菜根を喫し終に談話す

武士の大根辛きはなし哉

大根引と云事を

鞍壺に小坊主のるや大根引

菊の後大根の外さらになし

冬ごもり

屏風には山を畫て冬ごもり

野馬と云ものゝ四吟

金屏の松の古さよ冬ごもり

しばしかくれ居ける人をな

冬籠またより添はん此はしら

ぐさめて

先祝へ梅をこゝろの冬ごもり

贈酒堂

難波津や田螺の蓋も冬籠

千川堂

折々に伊吹を見てや冬ごもり

さぶさ　寒　氷

三河の下地の茶店にて

ごを焚て手拭あぶる寒かな

越人と吉田の驛にて

寒けれど二人寝る夜ぞ頼母しき

あまつ縄手

冬の日や馬上に氷る影法師

李下が妻を悼

かつぎふす蒲團や寒き夜や凄き

元起和尚より酒を賜りける
かへしに奉りける

水寒く寝入かねたるかもめかな

深川冬夜感

櫓聲波を打て腸氷る夜や泪

茅舎買氷

氷苦く偃鼠が咽をうるほせり

生ながら一ッに氷る生海鼠哉

芹焼やスソワの田井の初氷

瓶割るゝ夜の氷の寢覺かな

から鮭も空也の痩も寒の内

月花の愚に針立ん寒の入

鳳來寺に參籠して

夜着一ッ祈り出したる寒さかな

仙化が父の追善

袖の色よごれて寒しこいねづみ

鹽鯛の齒ぐきも寒し魚の棚

葱白く洗ひ上げたるさぶさかな

によきによきと帆柱寒き入江かな

綿弓や窓に入日の影寒き

冬さむし欠びをうつす息の色

雪　あられ

桑名本當寺にて

冬牡丹千鳥よ雪のほとゝぎす

草の枕に寢あきてまだほのくらき中に濱の方に出て地藏堂の柱に書つく

明ほのや白魚白き事一寸

雪見にありきて抱月亭

市人にいで是うらん雪の笠

旅人を見て

馬をさへながむる雪の旦かな

杜國亭にて中あしき人の事などとりつくろひて

雪と雪今宵師走の名月か

箱根こす人もあるらし今朝の雪

深川貧の中

米買に雪の袋や投頭巾

卒都婆小町の讃

たふとさや雪ふらぬ日も蓑と笠

君火をたけよきもの見せん雪丸ゲ

閑居箴

酒のめばいとゞ寝られね夜の雪

はつ雪や幸庵にまかりある

鳴海の驛本陣業言亭に泊りけるに飛鳥井雅章の君都をへだてゝと詠で主へ給りけるを見て

京まではまだ半空や雪の雲

熱田の宮御修覆なりぬ

磨直す鏡も清し雪の花

有人の會に

ためつけて雪見にまかる紙子哉

いざ行ん雪見にころぶ處まで

去年のわび寝を思ひ出て越人に送る

二人見し雪はことしも降けるか

信濃路を過るに

雪ちるや穂屋の芒のかりのこし

元錄二年霜月朔日伊賀良品亭

いざ子どもはしりありかん玉あられ

山中に子どもと遊ぶ

初雪に兎の皮の髭つくれ

奈良にて

初雪やいつ大佛の柱たて

自畫自贊

いかめしき音や霰の檜木笠

雪の朝ひとり干鮭を咬得たり

浪の花と雪もや水にかへり

けさの雪根深を園の栞か

時雨をやもとかしがりて松の雪

あられまじる帷子雪は小紋かな

黒森を何といふとも今朝の雪

子におくれたる人の許にて

しほれふすや世はさかさまの雪の竹

笠の緒や咽喰しむる不二の雪

雪花は南の枝や遲ざくら

みちのく名所の內猫山

山は猫眠りはいてや雪のひま

雪の日や羅紗の羽織にたゝき鞘
湖水から光り出しけり比良の雪
深川や根ごしの芭蕉雪がこひ

膳所の草庵を人々訪ける時

霰せよ綱代の氷魚煮て出さん

旅　行

はつ雪や聖小僧の笈の色

大津にて智月といふ尼のすみかを尋ねて、おのが音の少將とかや、老の後あたりちかくかくれ侍りしといふをおもひ出て

少將のあまのはなしや志賀の雪

湖水眺望

比良三上雪かけわたせ鷺の橋
常ににくむ鴉も雪のあした哉

深川大橋半かゝりける時

初雪やかけかゝりたる橋の上
雜水に琵琶聞く軒の霰哉
初雪や水仙の葉のたわむ迄

竹の讃

たわみては雪まつ竹のけしき哉

寒山自畫

庭掃て雪をわするゝはゝ木かな

霜月八日卽興

いさみ立鷹引居るあられ哉

夜着は重し吳天に雪を見るあらん

草庵に士あり

木枕に油ぬぐふやよるの雪

琵琶引の夜や三弦の音あられ

大雪や婆々ひとり住藪の家

雪の竹笛つくるへう節あらん

師走、耕月亭にて

雪をまつ上戸のひたひいなびかり

神祇　釋教

落　葉

留守の間にあれたる神の落ば哉

霜月のはじめ武江にいたる

都出て神も旅寢の日數かな

え比須講酢賣に袴着せにけり

神無月二十日深川にて卽興

ふり賣の雁あはれなりえびす講

御命講や油のやうな酒五升

菊鷄頭切つくしけり御命講

京に鉢叩聞て

長嘯の墓もめぐるか鉢扣

納豆きる音しばしまて鉢たゝき

水鼻に誠見せけり御取越

鳥虫

尾張國熱田にまかりける頃
人々師走の海見んと船さし
けるに

海くれて鴨の聲ほのかに白し

毳につゝみてぬくし鴨の足

一疋のはね馬もなし川千鳥

鳴海にとゞまりて

星崎の闇を見よとや啼千鳥

杜國が不幸をいらこ崎に尋
て鷹の聲を折ふし聞て

夢よりも現の鷹ぞ頼母しき

訪杜國紀行

鷹一つ見付てうれし伊良子崎

杜國に對して

いらこざき似るものもなし鷹の聲

ある庵にて

冬庭や月もいとなる虫の吟

木草

多度權現を過るとて

宮人よわが名をちらせ落葉川

防川亭探梅

香を探る梅に藏見る軒端哉

大通閲の主道圓居士芳志をきく事親しききまゝにまみえん事を契てその日をまたず初冬一夜の霜と消ぬけふはゝや一めぐりにあたりぬといふを聞て

そのかたち見はや枯木の枝のたけ

大津にて

三尺の山もあらしの木葉かな

月の澤と聞へけの明照寺に羈旅の心を澄して

尊かるなみだやそめてちる紅葉

宿明照寺元錄辛未十時四十八歲

當寺此平田に地をうつされてより已に百年におよぶとかや御堂奉賀の辭に曰竹樹密に土石老たりと誠に木立物ふりて殊勝に覺へ侍れば

百年のけしきを庭の落葉かな

保美の里

梅椿早咲ほめん保美の里

元錄五年十二月二十日卽興

打寄て花入探れうめ椿

冬がれや世は一色に風の音

病中の吟　元錄七年十月八日

旅に病で夢は枯野をかけめぐる

神前の茶店にて

しのぶさへ枯て餅かふやどりかな

霜の後葎をとひて

花みな枯て哀をこぼす草の種

ある人のもとにて

麥はへてよきかくれ家や畠村

熱田梅人亭塵裏の閑を思ひ

よせられけむ。九衢齋をいへる名を殘して

水僊や白き障子のともうつり

三河にて白雪といへる者の子二人に桃先桃後と名を付あたへて

その匂ひ桃より白し水仙花

三秋を經て草庵に歸れば舊友門人日々にむらがり來りていかにと問へばこたへ侍る

ともかくもならでや雪の枯花尾

元錄辛酉之初九冬日素堂菊園の遊

重陽の宴を神無月のけふ設

に侍る事はその頃は花いま
だめぐみもやらず菊花開く
時刑重陽といへる心により
かつは展重陽のためしなき
にしもあらねば猶秋菊を詠
じて人々をすゝめられける
事になりぬ

菊の香や庭にきれたる沓の底

苅あとや物にまぎれてそばの莖

元祿六年冬ばせを庵にて即
興

寒菊や粉糠のかゝる臼のはた

さし籠るむぐらの友か冬菜賣

くさ／＼集

三面大黒の讃

忘るなよ神の頭巾のしめくゝり

貞德翁讃

をさな名やしらぬ翁の丸頭巾

五ツ六ツ茶の子に並ぶゐろり哉

乾鮭や何がし殿は毛唐人

冬がれの磯に今朝る見とさか哉

白炭や彼浦島が老の筥

四山の銘

物ひとつ瓢はかろき我世かな

月の鏡小春に見るや目正月

石かれて水しぼめるや冬もなし

小野炭や手習ふ人の灰せゝり

鹽にしていさことづけん都鳥

龍安寺にて

山鳥も我もかもねん宵まどひ

我爲に日はうらゝなり冬の空

深草や是も淺草火鉢かな

餅花やかざしにさせるよめが君

大年の夜ぬすびとにあひて

梅干にかよふ鶯あはれなり

九のとせの春秋市中に住わびて居を深川のほとりに移す長安は古來名利の地空手にして金なきものは行路かたしといひけん人のかしこく覺侍るは此身のとぼしき故にや

柴の戸に茶を木葉かく嵐かな

消息に

三十里尾張大根のはなしかな

書讃

たのむぞよ寢酒なき夜の紙衾

けし炭に薪わる音か小野の奥

頭巾着た顔さしこむや繩すだれ

煤掃

煤掃之説

すゝはきや暮行宿の高鼾

煤掃は己が棚つる大工かな

旅行

煤はきは杉の木の間のあらしかな

行脚の五笠一具難波に殘し置たるを年經て路通が送りげるを見て

これや世の煤にそまらぬ古盆子

旅寢して見しやうき世の煤掃

師走　節季候　年之市　餅搗

月白き師走は子路が寢覺かな

何にこの師走の市に行からす

春や立また春を見む此師走

果の朔日の朝から

かくれけり師走の海のかいつぶり

十二月九日一井亭興行

たび寢よし宿は師走の夕月夜

節季候の來れば風雅も師走哉

素堂亭年忘

節季候を雀のわらふ出立かな

一休が土器買ん年の市

年の市線香買に出ばやな

有明も三十日にちかし餅の音

年忘
年暮行年

洛上ノ御靈別當素桃丸興行

半日は神を友にやとしわすれ

此忘ながるゝとしの淀ならん

まだ埋火のきえやらず臘月末京都を立出でて乙州が新宅に春を待て

人に家を買せて我は年忘

魚鳥のこゝろは知らずとしわすれ

年わすれ三人寄て喧嘩かな

わすれ草菜飯に摘む年の暮

とし暮ぬ笠着て草鞋はきながら

くれ〱て餅を木魂の侘寝哉

自得箴

めでたき人の數にもいらん老の暮

月雪とのさばりけらしとしの暮
盗人にあふた夜もあり年の暮
せつかれて年わすれする機嫌かな
蛤のいける甲斐あれとしのくれ
分別の底たゝきけりとしの暮
海ある所にたばねたる柴の
畫に
須磨の浦の年とりものや柴一把
みなをがめ二見の七五三のとしの暮
舊里や臍の緒に泣くとしの暮
成りにけりくまでとしのくれ
うかくと年よる人やふる暦

畫讃
行年や汝が親の小松うり
行年や藥に見たき梅の花

名所

朝よさはたれ松島を片ごゝろ
歩行ならば杖つき坂を落馬かな
越後新潟にて
海に降る雨やこひしき浮身宿
名所八體
星合の中や絕なん龍田川
秋や須磨すまや秋なる麥日和
貝寄る風の手じなや若の浦

汗水や吉野どまりの笈山伏

松島や雪の白地の衣くばり

姨石に啼かはしたる雉子哉

八朔や天の橋立たばね熨斗

辛崎夜雨

琵琶の湖雨よ疎顔か松の律

粟津晴嵐

さぞ野分人の淡たつ市の聲

矢橋歸帆

夕がすみ赤石の浦を帆のおもて

比良暮雪

さそへ雪白衣の天狗比良の雪

石山秋月

汐やかぬ須磨よ此湖秋の月

瀬田夕照

遅き日にかわかぬ網の左袖

三井晩鐘

盃に片われはなし花の鐘

堅田落雁

鳥の文かた田の雁よ片便り

紀行篇

附日記篇

行脚掟

一　一宿なすとも故なきに再宿すべからず。樹下石上に伏すともあたゝめたる筵と思ふべし。

一　腰に寸鐵たりとも帶すべからず。總て物の命を取る事なかれ。

一　君父の讎ある處には、門外にも遊ぶべからず。倶に天をいたゞかざる忍びざる情あれば也。

一　衣類、器財、相應にすべし。過たるはよからず。足らざるもしからず。程あるべし。

一　魚鳥獸の肉を好んでくふべからず。美味珍食にふける人は、他事にふれやすき物也。菜根を咬で百事をなすべき語を思ふべし。

一　人の求なきに、己が句を出すべからず。望をそむくもしからず。問はざるに説くは説にあらず。問に答ざるはよろしからず。

一　たとひ嶮岨の境たりとも所勞の念を起すべからず。發らば中途より歸るべし。

一　馬駕に乘事なかれ。一枝の枯枝を己が痩脚と思ふべし。

一　好で酒を飲べからず。饗應により固辭しがたくとも微醺にして止むべし。亂に及ばずの禁有、祀

歳の戒祭に酷を用るも酔るを惛めば也。酒に遠ざかるの訓あり。愼むべき事也。

一　船錢茶代忘るべからず。

一　他の短をあげて、己が長を顯す事なかれ。人を謗て己にほこるは甚賤。

一　俳談の外雜話すべからず。雜話出なば、居眠りして、勞を養ふべし。

一　女性の俳友にしたしむべからず。師にも弟子にもいらぬ事也。此道に親炙せば人をもて傳ふべし總て男女の道は嗣を立るのみ也。流蕩すれば心敦一ならず。此道は主一無適にして成す能己を省るべし。

一　主あるものは、一枝一草たりとも取るべからず。山川江澤にも主あり。勤よや。

一　山川舊跡したしく尋入べし。あらたに私の名を付る事なかれ。

一　一字の師恩たりとも忘るゝ事なかれ。一句の理をだに解せず人の師となる事なかれ。人に教るは己を成して、後の事也。

一　一宿一飯の主もおろそかに思ふべからず。さりやとて媚諂事なかれ。如此の人は世の奴也。此道に入るものは、此道の人に交るべし。

一　夕を思ひ旦を思ふべし。旦暮の行脚といふ事は好まざる事也。人に勞を懸る事なかれ。しば〳〵すれば疎せらるゝの言を思ふべし。はた餘食たりとも好むべからず。

右之條々我門の行脚は愼むべき也。當時を見るに、如此の掟を守て、行脚する俳客一人もなし。不相應に美を飾り、利欲の爲に僞を云て、世をわたる淺ましからずや。或は古人の名を賣、自己の勝手のよきやうにいひちらすは、誠に羊頭をかけて狗肉を賣の徒にして、切賣の功者といふべし。

芭蕉庵桃青

會式

諸禮停止

出合遠近

但聲先

月花一句

又日

飽食飽
あるにまかせよ
酒亂に及
事なかれ

芭蕉庵桃青

野ざらし紀行

千里に旅立て路粮をつゝまず、三更月下無何入といひけん、昔の人の杖にすがりて、貞享甲子秋八月、江上の破屋を立いづる程、風の聲そゞろ寒氣也。」

野ざらしを心に風のしむ身かな

秋十とせ却て江戸をさす故郷

關越る日は、雨降て、山みな雲に隱れたり、

霧しぐれ富士を見ぬ日ぞ面白き

何某千里といひけるは、此度路の助と成て、萬いたはり心をつくし侍る。常に莫逆の交り深く、朋友信あるかな、此人。

深川や芭蕉を富士に預け行　千里

富士川の邊を行くに、三つばかりなる捨子の、哀げに泣あり。此川の早瀬にかけて、浮世の波をしのぐにたえず、露ばかりの命まつ間と捨置けん、小萩がもとの秋の風、今宵やちるらん、明日やしほれんと、袂より喰ものなげて通るに

猿を聞人すて子に秋の風いかに

いかにぞや、汝が父ににくまれたるか、母にうとまれたるか、父は汝を惡にあらじ、母は汝をうとむにあらじ、只是天にして、汝が性のたたなきをなけ。」

大井川越る日は終日雨降ければ、

秋の日の雨江戸に指をらん大井川　千里

馬上の吟

道のへの木槿は馬にくわれけり

二十日あまりの月かすかに見えて、山の根いとくらきに、馬上に鞭をたれて數里いまだ鷄鳴ならず、杜牧が早行の殘夢、小夜の中山に至りてたちまち驚く。」

馬に寢て殘夢月遠し茶のけぶり

松葉屋風瀑が伊勢に有けるを尋音信て、十日ばかり足をとゞむ。腰間に寸鐵を帶ず、襟に一嚢を掛て、手に十八の珠を携ふ。僧に似て塵あり、俗に似て髪なし、我僧にあらずといへども、髪なきものは浮屠の屬にたぐへて、神前に入をゆるさず。暮て外宮に詣侍りけるに、一の鳥居の陰ほのくらく、御燈處々に見えて、また上もなき峰の松風、身にしむばかり深き心を起して、」

三十日月なし千とせの松を抱くあらし

西行谷の麓に流あり。女共の芋洗ふを見るに

芋洗ふ女西行ならば歌よまん

其日のかへるさ、或茶店に立寄けるに、てふといひける女、あが名に發句せよと云て、白き絹出しけるに書付侍る。

蘭の香や蝶の翅にたきものす

閑人の茅舍を訪て、

蔦植て竹四五本のあらしかな

長月の初、古郷に歸て。小堂の萱草も霜枯果て、跡だになし。何事も昔に替りて、はらからの鬢白く、眉皺よりて、只命ありてとのみ言て詞もなきに、兄の守袋をほどきて、母の白髪拜めよ浦島が子の玉手箱、汝が眉もやゝ老たりと暫く泣て、

手にとらば消ん泪ぞあつき秋の霜

大和國に行脚して、葛城郡竹の內といふ所にいたる。此所は、例の千里が舊里なれば、日頃とどまりて足を休む。藪より奧に家有、

綿弓や琵琶に慰む竹の奧

二上山當麻寺に詣て、庭上の松を見るに、凡千とせもへたるならん、大さ牛を隱すともいふべけん。かれ非情といへども佛緣にひかれて、斧斤の罪をまぬがれたるぞ幸にしてたふとし。

僧朝顏いく死かへる法の松

獨よしのゝ奧にたどりけるに、誠に山深く白雲峰にかさなり、煙雨谷を埋て、山賤の家處々にちい

さく、西に木を伐る音東に響き、院々の鐘の聲は心の底に答ふ。昔より此山に入て、世をわすれたる人の多くは、詩にのがれ歌にかくる。いでや唐土の盧山といはんも、亦むべならずや。或坊に一夜をかりて、

砧打て我にきかせよや坊が妻

西上人の草の庵の跡は、奥の院より右の方二丁斗分け入程、柴人の通ふ道のみ僅に有て、さかしき谷を隔たる。いと尊し。かのとく〳〵の清水はむかしにかはらずと見えて、今もとく〳〵と雫落ける。

露とく〳〵こゝろみに浮世すゝがばや

若是扶桑に伯夷にあらば、かならず口をすゝがん。もしこれ許由に告ば耳をあらはん。山を登り坂を下るに。秋の日既に斜なれば、名ある所〳〵見殘して、先づ後醍醐帝の御陵を拜む。

御廟年を經てしのぶは何をしのぶ草

大和より山城を經て、近江路に入て美濃に至る、今須山中を過て、いにしへ常盤の墳有。伊勢の守武がいひける、義朝殿に似たる秋風とは、いづれの處か似たりけん。我もまた

義朝のこゝろに似たり秋の風

不破

秋頃や藪もはたけも不破の關

大垣に泊りけるに、夜は木因が家をあるじとす。武藏野を出し時、野ざらしを心に思ひて、旅立ければ

死にもせぬ旅寢の果よ秋の暮

桑名本當寺にて

冬牡丹千鳥よ雪のほとゝぎす

草の枕に寢あきて、まだほのくらき中に濱のかたに出て、

明ぼのや白魚白き事一寸

熱田に詣づ社頭大いに破れ、築地は倒れて、草村に隱る、かしこに繩をはりて、小社の跡をしるし、爰に石をすえて其神と名のる。蓬しのぶ心のまゝに生たるぞ、中々に目出度よりもこゝろとまりける。

しのぶさへ枯て餅かふやどりかな

名古屋に入る道の程諷吟す。

狂句凩の身は竹齊に似たるかな

草まくら犬もしぐるゝかよるの聲

雪見にありきて、

市人よこの笠賣らう雪の笠

旅人を見て、

馬をさへながむる雪の旦かな

海邊に日暮して、

海くれて鴨の聲ほのかに白し

爰にわらぢをとき、かしこに杖を捨て、旅寢ながらに年の暮ければ

としくれぬ笠着て草鞋はきながら

といひ／＼も山家にとしを越て、

誰が聟ぞ齒朶に餅おふうしの年

奈良に出る道のほど、

春なれや名もなき山のうすがすみ

二月堂に籠りて、

水取やこもりの僧の沓の音

京に登りて、三井秋風が鳴瀧の山家を訪ふ。

梅林

梅白しきのふや鶴を盗れし

樫の木の花にかまはぬすがた哉

伏見西岸寺任口上人に逢て、

我衣にふしみの桃の雫せよ

大津に出る道、山路をこえて、

湖水眺望

辛崎の松は花より朧にて

晝の休らひとて、旅店に腰をかけて、

躑躅いけてその陰に干鱈さく女

吟行

菜畠に花見顔なる雀かな

水口にて、廿年を經し、故人にあふ、

命ふたつ中に活きたるさくらかな

伊豆國蛭ヶ小島の桑門、是も去年より行脚しけるに、我名を聞て、草の枕の道連にもと、尾張の國より跡をしたひ來りければ、

いざともに穗麥くらはん草枕

此僧われに告て言、圓覺寺大顚和尙、ことしむ月のはじめ遷化したまふよし、まことや夢のこゝちせらるゝに、先づ道より其角が方へ申つかはしける。

梅戀て卯の花拜む泪かな

贈杜國

白芥子にはねもぐ蝶の形見哉

二たび桐葉子がもとに有て、今やあづまに下らんとするに、

牡丹蘂深く分け出る蜂の名残哉

甲斐の山中に立よりて、

ゆく駒の麦になぐさむやどりかな

卯月の末庵にかへり、旅のつかれをはらすほどに

夏衣いまだ虱を取つくさず

鹿島紀行

洛の貞室、須磨の浦の月見に行て、

松かげや月は三五夜中納言

と云ひけん狂夫のむかしもなつかしきまゝに、此秋鹿島の山の月見んと思ひ立ことあり、伴ふ人二人、浪客の士ひとり一人は水雲の僧。僧はからすの如くなる墨の衣に。三衣の袋を衿に打かけ、出山の尊像を厨子にあがめ入て、うしろに背負、柱杖曳ならして、無門の關もさはるものなく、あめつちに獨歩して出ぬ。今ひとりは僧にもあらず、俗にもあらず、鳥鼠の間に名をかうふりの鳥なき島にもわたりぬべく、門より船に乘て、行德と云ふ處にいたる。船をあがれば馬にものらず、細脛の力をためさんと、歩行よりぞ行。甲斐國より或人の得させたる檜木もてつくれる笠を、おの〳〵いただきよそひて、八幡といふ里を過れば、かまがひか原と云ふひろき野あり。秦甸の一千里とかや、目もはるかに見わたさるゝ筑波山、むかふに高く二峰ならびたてり。かの唐土に双劍の峰ありと聞えしは、廬山の一隅なり。「雪は申さず先むらさきのつくばかな」と詠しは、我が門人嵐雪が句也。すべて此山は日本武尊のことはをつたへて、連歌する人のはじめにも名づけたり。和歌なくはあるべからず。句

なくは過べからず、誠に愛すべき山の姿なりけらし。萩は錦を地にしけらんやうにて、爲仲が長櫃に折入て、都のつとに持せたるも風流にくからず、きちかう、をみなへし、かるかや、尾花、みだれ合て小男鹿の妻こひわびゐいとあはれ也。野の駒所得がほにむれありく又哀なり。日既に暮かゝる程に、利根川のほとりふさといふ所につく。此川にて鮭の網代といふものをたくみて、武江の市にひさぐ者あり、宵のほと其漁家に入てやすらふ。夜の宿腥し。月くまなく晴けるまゝに、夜船さしくだして鹿島にいたる。晝より雨しきりに降て、月見るべくもあらず。麓に根本寺のさきの和尚、今は世をのがれて、此所におはしけるといふを聞て、尋入てふしぬ。すこぶる人をして深省を發せしむと吟じけむ、しばらく淸淨の心をうるに似たり。曉の空いさゝか晴けるを和尚おこし驚し侍れば人々おき出ぬ。月の光、雨の音、たゞあはれなるけしきのみむねにみちて、いふべき言の葉もなし。はるばると月見に來たる甲斐なきこそほいなきわざなれかの何がしの女すら時鳥の歌得よまでかへりわづらひしも、我ためにはよき荷擔の人ならんかし。

をりをりにかはらぬ空の月かげも

ちゞのながめは雲のまにまに　　和　尙

月はやし梢は雨をもちながら

寺に寢てまこと顔なる月見かな

雨に寢て竹おきかへる月見かな　曾良

月さひし堂の軒端の雨しづく　宗波

笈之小文

百骸九竅の中に物あり。かりに名づけて風羅坊といふ。誠にうすものゝ風に破れやすからん事をいふにやあらん。かれ狂句を好む事久し。終に生涯のはかりごとゝなす。或時は、倦て放擲せん事をおもひ、ある時はすゝむで人にかたん事をほこり、是非胸中にたゝかふて、是が爲に身安からず、しばらく身を立む事をねがへども、これが爲にさゝえられ、暫く學で愚をさとさん事をおもへども、是が爲に破られ、終に無能無藝にして、只此一筋に繫がる。西行の和歌における、宗祇の連歌に於ける、雪舟の繪に於ける、利休の茶に於ける、其貫通する物は一なり。しかも風雅に於ける、造化にしたがひて、四時を友とす。見る所花にあらずといふ事なし、思ふ所月にあらずといふ事なし。思ひ花にあら

ざる時は夷狄にひとし、心花にあらざる時は鳥獸に類ひす。夷狄を出、鳥獸を離れて、造化にしたがひ造化にかへれとなり。

神無月の初、空定めなきけしき、身は風葉の行方なき心地して、

旅人と我名呼れん初しぐれ

又山茶花を宿〳〵にして

岩城の住、長太郎と云もの、此脇を付て、其角亭において、關送りせんともてなす。

時は秋よし野をこめん旅のつと

此句は、露沾公より下し給はらせ侍りけるを、はなむけの初として、舊友親疎門人等、あるは詩歌文章もて訪ひ、或は草鞋の料を包で志を見す。かの三月の糧をあつむるに一芥の力を入れず、紙衣綿子など云ふもの、帽子したうつやうなもの、心々に送りつどひて、霜雪の寒苦をいとふに心なし。あるは小舟をうかべ別墅にまうけし草庵に酒肴携來りて、行へを祝し名殘をおしみなどするこそ、ゆゑある人の首途するにも似たりと物めかしく覺へられけれ。

抑、道の日記といふものは、紀氏長明、阿佛の尼の文をふるひ情を盡してより、餘は皆俤似かよひ

て、其糟粕を改る事あたはず。まして淺智短才の筆に及べくもあらず。其日は雨降、晝より晴て、そこに松有かしこに何と云川流れたりなどいふ事、たれ〳〵もいふべく覺へ侍れども、黄奇蘇新のたぐひにあらずば云事なかれ。されどもその所々の風景心に殘り、山館野亭のくるしき愁も且はなしの種となり、風雲の便ともおもひなして、わすれぬ所〳〵跡や先と書集侍るぞ猶酔る者の妄語にひとしく、いねる人の譫言するたぐひに見なして、人又亡聽せよ。」

鳴海にとまりて

星崎の闇を見よとや鳴千鳥

飛鳥井雅章公の此宿にとまらせ給ひて、都も遠くなるみがた、はるけき海を中にへだてゝと詠じ給ひけるを、自らかゝせ玉ひて、たまはりけるよしかたるに、

京まではまた半空や雪の雲

三河國保美といふ所に、杜國がしのびて有けるをとふらはんと、まづ越人に消息して鳴海より跡ざまに二十五里尋かへりて、其夜吉田に泊る。

寒けれど二人寢る夜ぞ頼しき

あまつ縄手田の中に細道ありて、海より吹上る風いと寒き所也。

冬の日や馬上に氷る影法師

保美より伊良古崎へ壹里ばかりも有べし、三河國の地つゞきにて、伊勢とは海をへだてたる所なれども、いかなる故にや、萬葉集には伊勢の名所の内に選び入られたり。此洲崎にて碁石を拾ふ、世にいらこ白といふとかや。骨山といふは鷹を打所なり。南の海のはてにて、鷹のはじめて渡る所といへり。いらこ鷹など歌にもよめりけりとおもへば、猶あはれなる折ふし、

鷹一ッ見つけてうれしいらこ崎

熱田御修覆

磨直す鏡も清し雪の花

蓬左の人々にむかへとられて、しばらく休息する程、

箱根越す人もあるらし今朝の雪

ある人の會

ためつけて雪見にまかる紙子かな

いざゆかん雪見にころぶ處まで

ある人興行

香を探る梅に藏見る軒端かな

此間、美濃、大垣、岐阜のすきものとぶらひ來りて、歌仙あるは一折など度々に及ぶ、師走十日あまり名古屋を出て、舊里に入らんとす。

旅寝して見しやうき世の煤佛

桑名よりくはで來ぬればと云日永の里より、馬かりて、杖つき坂上るほど荷鞍うちかへりて。馬より落ぬ。

歩行ならば杖突坂を落馬哉

と物うさのあまり云出侍れども、終に季のことば入ず。」

古さとや臍の緒に泣としの暮

宵のとし空の名殘をしまんと酒のみふかして、元日寝わすれたれば、」

二日にもぬかりはせじな花の春

初春

春立てまだ九日の野山かな

枯芝やや丶かげらふの一二寸

伊賀國阿波庄といふ所に、俊乘上人の舊跡あり。護峰山新大佛寺とかや云名ばかりは、千歳の形見となりて、伽藍は破れて礎を殘し、坊舍は絕て田畑と名の替り、丈六の尊像は苔の綠に埋れて、御ぐしのみ現前とをがまれさせ玉ふに、上人の御影は、いまだ全くおはしまし侍るぞ其代の名殘うたがふ所なく、泪こぼる丶ばかり也。石の蓮臺獅子の座などは蓬葎の上に堆く双林の枯たる跡もまのあたりにこそ覺えられけれ。

丈六にかげろふ高し石の上

故主蟬吟公の庭にて

さまざまの事おもひ出す櫻哉

伊勢山田

何の木の花とはしらず匂ひかな

蝶にはまだ衣更着のあらし哉

菩提山

此山のかなしさ告よ野老堀

龍尙舍

物の名を先問ふ荻の若葉哉

網代民部雪堂に會

梅の木に猶やどり木やうめの花

草庵會

芋植て門は葎の若葉かな

神垣の内に、梅一木もなし。いかに故有事にやと、神司などに尋侍れば、只何とはなし、おのづから梅一もともなくて、子良の館の後に一もと侍るよし、かたりつたふ。

御子良子の一もとゆかし梅の花

神垣やおもひもかけず涅槃像

彌生半過る程、そゞろにうき心の花の我を、道引枝く折となりて、よしのの花におもひ立んとするに、かのいらこ崎にて、ちぎり置し人の伊勢にて出むかひ、ともに旅寝のあはれを見且は我為に童子となりて、道の便りにもならんと、自ら万菊丸と名をいふ。まことにわらべらしき名のさまいと興あり、いでや門出のたはふれ事せんと、笠の内に落書す、

乾坤無住同行二人

よし野にて櫻見せうぞ檜木笠

よしのにて我も見せうぞ檜木笠　万菊丸

旅の具多きは道のさはりなりと、物皆掃捨たれども、よるの料にと紙衣一ッ合羽やうのもの硯、筆、紙、薬等、書笥など物に包みて、後に背負たれば、いとゞすねよわく力なき身の、跡ざまにひかふるやうにて、道猶すゝまず、たゞ物うき事のみ多し。

草臥て宿かる頃や藤の花

初瀬

春の夜や籠り人ゆかし堂の隅

足駄はく僧も見えたり花の雨　万菊

葛城山

猶見たし花にあけゆく神の顔

三輪　多武峰臍峠（多武峰より龍門へ越る道也）

雲雀より上にやすらふ峠かな

龍門

龍門の花や上戸の土産にせん

酒のみに語らんかゝる瀧の花

西河

ほろほろと山吹ちるか瀧の音

蜻蛉が瀧。布留の瀧は布留の宮より二十五丁山の奥也布引の瀧津の國幾田の川上にあり。大和箕面瀧

勝尾寺へ越る道にあり

櫻

さくらがりきとくや日々に五里六里

日は花に暮てさびしやあすならう

扇にて酒くむかげやちるさくら

苔清水

春雨の木下につたふ清水かな

よしのゝ花に三日とゞまりて、曙黄昏のけしきにむかひ、有明の月の哀なるさまなど心にせまり、胸にみちて、あるは攝政公のながめにうばはれ、西行の枝折にまよひ、かの貞室が是は〱と打なぐりたるに、我いはん言葉もなく、いたづらに口をとぢたるいと口をし。思ひ立たる風流いかめしく侍れども、爰に至りて無興の事なり。

高野

ちゝはゝのしきりに戀し雉子の聲

ちる花にたぶさはづかし奥の院　万菊

和歌浦

行春に和歌の浦にて追付たり

紀三井寺

跪はやぶれて西行にひとしく、天龍の渡しをおもひ、馬をかる時はいきまきし聖の事心にうかぶ。山野海濱の美景に造化のたくみを見、或は無依の道者の跡をしたひ、風流の人の實をうかゞふ、猶栖をさりて、器物のねがいなし。空手なれば途中の愁ひもなし。寛歩駕にかへ、晩食肉よりも甘し。とまるへき道にかきりなく、立へき朝に時なし。只一日のねがひ二ッのみ。今宵よき宿とらん、草鞋のわが足によろしきを求んと斗りは、いさゝかのおもひなり。時々氣を轉じ、日々に情をあらたむ、もしわづかに風雅ある人に出合たる悦限りなし。日比は古めかしくかたくななりと悪み捨たる人も、邊土の道づれにかたりあひはにふむぐらのうちに見出したるなど、瓦石のうちに玉を拾ひ、泥中に黄金を得たる心ちして、物にも書付人にもかたらんと思ふぞ、又是旅のひとつなりかし。

更衣

一ッぬいで後に負ひぬころもかへ

吉野出て布子賣たしころもかへ　万菊

灌佛の日は、奈良にて爰かしこ詣侍るに、鹿の子をうむを見て、此日においてをかしければ

灌佛の日に生れあふ鹿の子かな

招提寺鑑眞和尚來朝の時、船中七十余度の難をしのき給ひ、御目の內鹽風吹入て、終に御目盲させ給ふ尊像を拜して、

若葉して御目の雫ぬぐはゞや

舊友に奈良にてわかる

鹿の角先つ一節のわかれ哉

大阪にてある人のもとにて

杜若語るも旅のひとつかな

須磨

月はあれど留守のやう也須磨の夏

月見ても物たらはずや須磨の夏

卯月中比の空も朧に殘りて、はかなきみじか夜の月もいとゞ艷なるに、山は若葉にくろみかゝりて、ほ

ほとゝきす鳴出へきしのゝめも、沖のかたよりしらみそめたるに、上野とおぼしき所は麥の穗波あからみあひて、漁人の軒ちかき芥子の花のたえだえに見渡さる。

海士の顔まつ見らるゝやけしの花

東須磨、西須磨、濱すまと三處にわかれて、あながちに何わざするとも見えず。藻鹽たれつゝなど歌にもきこえ侍るも、いまはかゝるわざするなども見えず、キスコといふうをゝ網して、眞砂の上にほしちらしけるを、からすの飛來つてつかみ去る。是をにくみて、弓をもておどすぞ海士の業とも見えず、若し古戰場の余波をとゞめて、かゝる事をなすにやといとゞ罪ふかく、猶むかしの戀しきまゝに、てつかいが峰にのぼらんとする導きする子のくるしがりて、とかくいひまぎらはすをさま〳〵にすかして、麓の茶店にて、物くらはすべきなど云てわりなき體に見えたり。かれは十六と云けん、里の童子よりは四ツばかりもおとうとなるべきを、數百丈の先達として、羊腸險岨の岩根をはひのぼば、すべり落ぬべき事あまた度也けるを、つゝじ根笹にとり付き息をきらし汗をひたして、漸雲門に入こそ心もとなき道師の力なりけらし。

須磨の海士の矢先に啼や時鳥

ほとゝぎす消え行方や島ひとつ

須磨寺や吹ぬ笛きく木下闇

あかし夜泊

蛸壺やはかなき夢を夏の月

かゝる所の秋なりけりとかや、此浦の實は秋をむねとするなるべし。かなしさゝびしさいはん方なく秋なりせばいさゝか心のはしをもいひ出べき物をと思ふぞ、我心匠の拙きを知らぬに似たり。淡路しま手にとるやうに見えて、すまあかしの海左右にわかる。呉楚東南の詠もかゝる所にや、物しれる人の見侍らば、さまざまの境にもおもひなぞらふるべし、又後の方に山を隔て、田井の畑といふ所松風村雨のふる里といへり。尾上つゞき丹波路へかよふ道あり、鉢伏のぞき逆落などおそろしき名のみ残りて、鐘懸松より見下すに、一ノ谷内裏やしき目の下に見ゆ。其代のみだれ其時のさわぎ、さながら心にうかび俤につどひて、二位のあま君皇子を抱き奉り、女院の御裳に御足もたれ、船やかたにまろび入らせ玉ふ御有さま、内侍、局、女嬬、曹子のたぐひ、さまざまの御調度もてあつかひ、琴琵琶なと、しとねふとんにくるみて、船中に投入、供御はこぼれてうろくづの餌となり、櫛笥はみだれてあ

まの捨草となりつゝ、千歳のかなしび此浦にとゞまり、素波の音にさへ愁多く侍るや。

更科紀行

さらしなの里をばすて山の月見ん事、しきりにすゝむる秋風の心に吹さわぎて、ともに風雲の情をくるはすもの又ひとり越人と云。木曾路は山深く、道さかしく、旅寝の力も心もとなしと、荷●子が奴僕をしておくらす。おのゝゝ心ざし盡すといへども、驛旅の事心得ぬさまにて、共におぼつかなく、ものごとのしどろにあとさきなるも中々におかしきことのみ多し。何々と云ふ所にて、六十斗の道心の僧おもしろげも、をかしげもあらず、たゞむつゝゝとしたるが腰たわむまで物おひ、息はせはしく、足はきざむやうにあゆみ來れるを、ともなひける人のあはれがりて、おのゝゝ肩にかけたるもの共、かの僧のおひぬものとひとつにからみて、馬に付けて、我をその上にのす、高山奇峰頭の上におほひ重りて、左は大河ながれ、岸下は千尋の思ひをなし、尺地もたひらかならざれば鞍の上靜ならず

九折只あやうき類のみやむ時なし。棧はし寢覺など過て、猿が馬場たち峠などは四十八曲りとかや。九折重りて、雲路にたどる心地せらる。歩行より行ものさへ眼くるめき、たましひしぼみて、足さだまらざりけるに、かのつれたる奴僕いともおそるゝけしき見えず。馬の上にて、たゞねぶりにねぶりて、落ぬべき事あまたゝびなりけるを、あとより見あげて、あやうき事のかぎりなし。佛の御心に、衆生の浮世を見玉ふもかゝる事にやと、無常迅速のいそがはしさも我身にかへり見られて、阿波の鳴戸は波風もなかりけり。夜は草の枕を求て、晝のうち思ひまうけたるけしき、むすび捨たる發句など矢立取出て、燈の下に目をとぢ、頭をたゝきてうめき伏せば、かの道心の坊、旅情の心うくて物思ひするにやと推量し、我をなぐさめんとす。わかき時をがみめぐりたる地、あみだのたうとき數をつくし、おのがあやしとおもひし事共はなしつゞくるぞ風情のさわりとなりて、何を云出る事もせず、とてもまぎれたる月影の壁の破れより木の間がくれにさし入て、引板の音、鹿おふ聲所〴〵にきこえける。まことにかなしき秋の心爰に盡せり。いでや月のあるじに酒振まはんといへば、さかづき持出たり。よのつねに一めぐりもおほきに見えて、ふつゝかなる蒔繪をしたり。都の人はかゝるものは風情なしとて、手にもふれざりけるに、おもひもかけぬ興に入て、瑇碗玉巵の心地せらるゝも所がら也。

あの中に蒔繪かきたし宿の月

棧やいのちをからむ蔦かつら

棧や先おもひいづ駒むかひ

霧はれて棧はめもふさがれず　越人

姨捨山は八幡と云里より一里ばかり、南に西南に横れてた。すさまじく高くもあらず。かど〳〵しき岩など見えず、只あはれ深き山のすがたなり、なぐさめかねしといひけんもことわりしられて、そゞろに悲しきに何故にか老たる人を捨たらんと思ふに、いとゞ涙もそひたれば

俤や姨ひとりなく月の友

いざよひもまださらしなの郡かな

ひよろ〳〵と尙露けしや女郎花

身にしみて大根からし秋の風

木曾の旅うき世の人のみやげ哉

送られつおくりつ果は木曾の秋

善光寺

月影や四門四宗も只一つ

吹飛す石は淺間の野分かな

さらしなや三よさの月見雲もなし　越人

おくの細道

月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也。船の上に生涯をうかべ、馬の口とらへて老をむかふる物は、日々旅にして旅をすみかとす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて、漂泊のおもひやまず。海濱にさすらへ、去年の秋、江上の破屋に蛛の古巣をはらひて、やゝ年も暮春立る霞の空に白川の關こえむと、そゞろ神の物につきて心をくるはせ、道祖神のまねきにあひて取物手につかず、股引の破をつゞり、笠の緒付かへて、三里に灸すうるより松島の月まづ心にかかりて住る方は人に讓り杉風が別墅に移るに、

草の戶も住替る代ぞ雛の家

面八句を庵の柱に懸置、彌生も末の七日、明ぼのゝ空朧々として、月は有明にて光をさまれる物から

不二の峰幽に見えて、上野谷中の花の梢又いつかはと心ぼそし。むつまじきかぎりは宵よりつどひて船に乗りて送る。千じゆと云所にて船をあがれば、前途三千里の思ひ胸にふさがりて、幻のちまた離別の泪をそゝぐ。

行春や鳥啼魚の目は泪

是を矢立の初として、行道なほすゝまず。人々は途中に立ならびて、後かげの見ゆる迄は見送るなるべし。ことし元祿二とせにや、奥羽長途の行脚只かりそめに思ひ立て、呉天に白髪の恨を重ぬといへ共、耳になれていまだ目に見ぬさかひ、若生て歸らばと定なき頼の末をかけ、其日漸早加といふ宿にたどり着にけり。痩骨の肩にかゝれる物先くるしむ。只身すからにと出立侍るを、紙子一衣は夜の防ぎ、ゆかた雨具墨筆のたぐひ、あるはさりがたき餞なとしたるは、さすがに打捨がたくて、路次の煩となれるこそわりなけれ。

室の八島に詣ず。同行曾良が曰、此神は木の花さくや姫の神と申て富士一體也。無戸室に入て燒玉ふちかひのみ中に、火々出見尊生れ給ひしより室の八島と申、又けふりをよみならはし侍るもこの謂也。將このしろといふ魚を禁ず縁起の旨世に傳ふ事も侍し。

三十日、日光山の麓に泊る。あるじの云けるやう我名を佛五左衛門と云、萬正直を宗とする故に、人かくは申侍るまゝ、一夜の草の枕に打解て休み玉へと云。いかなる佛の濁世塵土に示現して、かゝる桑門の乞食巡禮ごとき人をたすけ玉ふにやと、あるじのなす事に心をとゞめて見るに、唯無智無分別にして正直偏固の者也。剛毅木訥の仁に近きたぐひ、氣稟の淸質、尤、尊ぶべし。

卯月朔日、御山に詣拜す。往昔、此御山を二荒山と書しを、空海大師開基の時、日光と改玉ふ。千歳未來をさとり給ふにや、今此御光一天にかゞやきて、恩澤八荒にあふれ、四民安堵のすみか穩也。猶憚多くて筆をさし置ぬ。

あらたふと青葉若葉の日の光り

黑髮は霞かゝりて、雪いまだ白し。

剃捨て黑髮山に衣かへ　曾良

曾良は河合氏にして、惣五郎と云へり。芭蕉の下葉に軒をならべて予が薪水の勞をたすく。このたび松しま象潟の眺共にせん事を悅び、且は羈旅の難をいたはらんと旅立、曉髮を剃て黑染にさまをかへ、惣五を改て宗悟とす。仍て黑髮山の句有。更衣の二字力ありてきこゆ。

廿餘丁山を登りて瀧有、岩洞の頂より飛流して百尺、千岩の碧潭に落たり。岩窟に身をひそめ、入て瀧の裏よりみれば、うらみの瀧と申傳へ侍るなり。

暫時は瀧に籠るや夏の初

那須の黒はねと云所にしる人あれば、是より野越にかゝりて、直道をゆかんとす。遙に一村を見かけて行に雨降日暮る。農夫の家に一夜をかりて、明れば又野中を行。そこに野飼の馬あり、草刈るをのこになげきよれば野夫といへどもさすがに情しらぬには非ず。いかゞすべきや。されども此野は縱横にわかれて、うひ〳〵しき旅人の道ふみたがへんあやしう侍れば、此馬のとゞまる所にて馬を返し玉へとかし侍ぬ。ちさき者ふたり、馬の跡したひてはしる。獨は小姫にて名をかさねと云、聞なれぬ名のやさしかりければ。

かさねとは八重撫子の名なるべし　曾良

頓て人里に至れば、あたひを鞍つぼに結付て、馬をかへしぬ。黒羽の館代淨坊寺何がしの方におとつれる。思ひがけぬあるじの悦び、日夜語つゞけて、其弟桃翠など云ふが朝夕つとめとふらひ、自の家にも伴ひて、親屬の方にもまねかれ、日をふるまゝにひとり郊外に逍遥して、犬追物の跡を一見し、

那須の篠原をわけて玉藻の前の古墳をとふ。夫より八幡宮に詣。與市の扇の的を射し時、別しては我國氏神正八幡とちかひしも此神社にて侍ると聞ば、感應殊にしきりに覺えらる。暮れば桃翠宅に歸る。

修驗光明寺と云有、そこにまねかれて行者堂を拜す。

夏山に足駄を拜む首途かな

當國雲岸寺のおくに、佛頂和尚の山居の跡あり。

竪横の五尺にたらぬ草の庵
むすぶもくやし雨なかりせば

と松の炭して岩に書付侍りしと、いつぞや聞へ玉ふ。其跡見んと雲岸寺に杖を曳けば、人々すゝんで共にいざなひ、若き人多く道のほど打さわぎておぼえず彼麓に至る。山はおくあるけしきにて、谷道遙に松杉黒く苔したゞりて、卯月の天今猶寒し。十景盡る所、橋をわたつて山門に入。さてかの跡はいづくのほどにやと、後の山によぢのぼれば、石上の小庵岩窟にむすびかけたり。妙禪師の死關法雲法師の石室をみるがごとし。

木啄も庵はやぶらず夏木立

と取敢ぬ一句を柱に殘し侍りし。是より殺生石に行、館代より馬にて送らる、此口付のをのこ、短册を得させよと乞。やさしき事を望み侍るものかなと、

野を横に馬牽むけよほとゝぎす

殺生石は溫泉の出る山陰にあり。石の毒氣いまだほろびず、蜂蝶のたぐひ眞砂の色の見えぬほどかさなり死す。又清水ながるゝの柳は、芦野の里にありて、田の畔に殘る。此所の郡守戸部某の、此柳見せばやなど折々に、の給ひ聞え給ふを、いづくのほどにやと思ひしを、今日此柳のかげにこそ立より侍りつれ。

田一枚植て立去る柳かな

心許なき日かず重なるまゝに、白川の關にかゝりて、旅心定まりぬ。いかで都へと便求しもことわり也。中にも此關は三關の一にして、風騷の人心をとゞむ。秋風を耳に殘し、紅葉を俤にして、青葉の梢猶あはれ也。卯の花の白妙に茨の花の咲そひて、雪にもこゆる心地ぞする。古人冠を正し、衣裝を改しことなど淸輔の筆にもとゞめ置れしとぞ。

卯の花をかざしに關の晴着哉　曾良

とかくしてこえゆくまゝにあぶくま川を渡る。左に會津根高く、右に岩城、相馬、三春の庄、常陸、下野の地をさかひて、山つらなるかげ沼と云所を行に、今日は空曇て物影うつらず。すか川の驛に等窮といふものを尋て、四五日とゞめらる。先白川の關いかにこえつるやと問。長途のくるしみ身心つかれ且は風景に魂うばゝれ、懐舊に腸を斷て、はかぐしう思ひめぐらさず。

風流の初やおくの田植うた

無下にこえんもさすがにと語れば、脇弟三とつゞけて、一巻となしぬ。

此宿の傍に、大きなる栗の木陰をたのみて、世をいとふ僧有。橡拾ふ太山もかくやと閒に覺られて、ものに書付侍る。其詞、

栗といふ文字は西の木と書て西方淨土に便ありと

行基菩薩の一生杖にも柱にも此木を用給ふとかや

世の人の見付ぬ花や軒の栗

等窮が宅を出て、五里斗檜皮の宿を離れて、あさか山有、路より近し。此あたり沼多し。かつみ刈頃

もやゝ近うなれば、いづれの草を花かつみとは云ぞと、人々に尋侍れども、更に知人なし。沼を尋ね人にとひ、かつみ〳〵と尋ありきて、日は山の端にかゝりぬ。二本松より右にきれて、黒塚の岩屋一見し福島に宿る。あくればしのぶ文字摺の石を尋て、忍ぶの里に行、遙山陰の小里に石半土に埋てあり里の童の來りて教ける、昔は此山の上に侍しを、往來の人の麥草をあらして、此石を試侍るをにくみて此谷につき落せば、石の面下さまにふしたりと云、さもあるべき事にや。

早苗とる手もとや昔しのぶ摺

月の輪のわたしを越て、瀬の上と云宿に出づ。佐藤庄司が舊跡は、左の山際一里半斗に有。飯塚の里鯖野と聞て尋〳〵行に、丸山といふに尋あたる。是庄司が舊館也。麓に大手の跡など人の教るにまかせて泪を落し、又かたはらの古寺に一家の石碑を殘す。中にも二人の嫁がしるし先哀也。女なれどもかひ〴〵しき名の世に聞えつる物かなと袂をぬらしぬ。墮涙の石碑も遠きにあらず、寺に入て茶を乞へば、爰に義經の太刀辨慶が笈をとゞめて什物とす。

笈も太刀も五月にかざれ紙幟

五月朔日の事也。其夜、飯塚にとまる。溫泉あれば湯に入て宿をかるに、土坐に筵を敷てあやしき貧

家なり。灯もなければ、ゐろりの火かげに、寢所をまうけて臥す。夜に入て、雷鳴雨しきりに降て臥る上よりもり、蚤蚊にせゝられて眠らず、持病さへおこりてきえいるばかりになん。短夜の空もやう〳〵明れば、又旅立ぬ。猶夜の余波心すゝまず、馬かりて桑折の驛に出る。遙なる行末をかゝへて、斯る病ひおぼつかなしといへど、羇旅邊土の行脚、捨身無常の觀念、道路に死なん是天の命なりと、氣力聊とり直し、路縱横に踏で、伊達の大木戸を越す。鐙摺。白石の城を過、笠島の郡に入れば、藤中將實方の塚はいづくのほどならんと人にとへば、是より遙右に見ゆる山際の里をみのわ笠じまと云、道祖神の社、かたみの薄、今にありと敎ふ。此頃の五月雨に、道いとあしく、身つかれ侍れば、よそながら眺やりて過るに、簑輪笠島も五月雨の折にふれたりと、

笠島はいづこ五月のぬかり道

岩沼に宿る。

武隈の松にこそ目覺る心地はすれ。根は土際より二木にわかれて、昔の姿うしなはずとしらる。先能因法師思ひ出。往昔、むつの守にて下りし人、此木を伐て、名取川の橋杭にせられたる事などあればにや、松は此たび跡もなしとは詠たり。代々あるは伐、あるひは植繼などせしと聞に、今將に千歳の

かたちとゝのほひて、めでたき松のけしきになん侍し。

　　武隈の松見せ申せ遅ざくら　　擧白

と云ふものゝ餞別したりければ、

　　櫻より松は二木を三月越

名取川を渡りて仙臺に入。あやめふく日也。旅宿をもとめて四五日逗留す。爰に畫工加右衛門と云ものあり。聊心ある者と聞て知る人になる。この者、年頃さだかならぬ。名ところを考置侍ればとて一日案内す。宮城野の萩茂りあひて、秋の氣色思ひやらるゝ。玉田、よこ野、つゝじが岡はあふひ咲ころ也。日影ももらぬ松の林に入て、爰を木の下と云とぞ。昔もかく露ふかければこそ、みさぶらひみかさとはよみたれ。藥師堂、天神の御社など拜みて、其日はくれぬ。猶松島鹽がまの所々畫に書て送る。且紺の染緒つけたる草鞋二足餞す。さればこそ風流のしれもの爰に至りて其實を顯す。」

　　あやめ草足にむすばん草鞋の緒

かの畫圖にまかせてたどり行けば、おくの細道の山際に十符の菅あり。今も年々十符菅菰を調て國守に献ずと云り。

壺　碑（市川村多賀城に有）

つぼの石ぶみは高さ六尺餘、横三尺計歟。苔を穿て文字幽也。四維國界の數里をしるす。此城神龜元年、按察使鎭守府將軍大野朝臣東人の所置也。天平寶字六年參議東海東山節度使鎭守府將軍惠美朝臣獦修造也十二月一日と有、聖武皇帝の御時に當れり。むかしよりよみ置ける歌枕多く語傳ふといへども、山崩川落て道あらたまり、石は埋て土にかくれ、木は老て若木にかはれば、時移り代變して、其跡たしかならぬ事のみを爰に至て疑なき千歳の記念、今眼前に古人の心を閲す。行脚の一德、存命の悦び、羇旅の勞をわすれて泪落るばかり也。

それより野田の玉川沖の石を尋ぬ。末の松山は寺を造て、末松山といふ松のあひ〳〵皆墓はらにて、はねをかはし枝をつらぬる契の末も終りはかくのごときと悲しさも増りて、鹽がまの浦に入相のかねを聞。五月雨の空聊はれて、夕月夜幽に籬が島もほど近し。蜑の小舟こぎつれて肴わかつ聲々につなでかなしもとよみけんこゝろもしられて、いとゞ哀也。其夜、目盲法師の琵琶をならして、奥上るりと云ものをかたる。平家にもあらず、舞にもあらず、ひなびたる調子うち上げて、枕ちかうかしかましけれど、さすがに邊土の遺風忘れざるものから、殊勝に覺えらる。早朝、鹽がまの明神に詣。國守

再興せられて、宮柱ふとしく、彩椽きらびやかに、石の階九仭に重り、朝日あけの玉がきをかゞやかす。かゝる道の果塵土の境まで神靈あらたにましますこそ、我國の風俗なれといと貴けれ。神前に古き寳燈有、かねの戸びらの面に文治三年和泉三郎寄進と有。五百年來の俤今目の前にうかびて、そゞろに珍らし。かれは勇義忠孝の士也。佳名今に至りてしたはずといふ事なし。誠に人よく道をつとめ義を守るべし。名もまた是にしたがふと云へり。日既に午にちかし。舟をかりて松島にわたる。其間二里餘、雄島の磯につく。

抑、ことふりにたれど、松島は扶桑第一の好風にして、凡洞庭西湖を恥ず。東南より海を入て、江の中三里浙江の潮をたゝふ。島々の數を盡して、欹つものは天を指さしふすものは波にはらはふ。あるは二重にかさなり三重にたゝみて左にわかれ、右につらなる、おへるあり、抱るあり、兒孫を愛するが如とし。松の綠こまやかに、枝葉汐風に吹たはめて、屈曲おのづからためたるがごとし。其氣色窅然として美人の顏を粧ふ。ちはやふる神のむかし、大山すみのなせるわざにや、造化の天工いづれの人か筆をふるひ詞を盡さん。

雄島が磯は地つゞきにて海に出たる島也。雲居禪師の別室の跡、坐禪石など有。はた松の木陰に世を

いとふ人も稀々見え侍りて、落穂松笠など打けぶりたる草の庵しつかに住なし、いかなる人とはしられずながら、先なつかしく立寄ほどに、月海にうつりて、晝のながめ又あらたむ。江上に歸りて宿を求れば窓をひらき、二階を作りて、風雲の中に旅寢するこそあやしきまで妙なる心ちはせらるれ。」

松しまや鶴に身をかれほとゝぎす　曾良

予は口をとぢて眠らんとしていねられず。舊庵をわかるゝ時、素堂松島の詩あり、原安適松がうらしまの和歌を贈らる、袋を解てこよひの友とす。且杉風濁子が發句あり。

十一日、瑞岸寺に詣。當寺三十二世の昔、眞壁の平四郎出家して、入唐歸朝の後開山す。其後に雲居禪師の徳化に依て、七堂甍改りて、金壁莊嚴光をかゞやかし、佛土成就の大伽藍とはなれりける。かの見佛聖の寺はいづくにやとしたはる。

十二日、平和泉と心ざし、あねはの松、緒たえの橋など聞傳へて、人跡稀に雉兎芻蕘の往かふ道そこともわかず、終に道ふみたがへて、石の巻といふ港に出。こがね花咲とよみて奉たる金花山海上に見わたし、數百の廻船入江につどひ、人家地をあらそひて、竈の煙立つゞけたり。思ひがけず斯る所にも來れる哉と、宿からんとすれど、更に宿かす人なし。漸まどしき小家に一夜をあかして、明れば又

しらぬ道まよひ行。袖のわたり、尾ぶちの牧、まのゝ萱はらなどよそめに見て、遙なる堤を行。心細き長沼にそふて、戸伊戸と云ふ所に一宿して、平泉に至る。此間廿餘里ほどとおぼゆ。
三代の榮耀一睡の中にして、大門の跡は一里こなたに有。秀衡が跡は田野に成て、金鷄山のみ形を殘す。先高館にのぼれば北上川、南部より流るゝ大河也。衣川は和泉が城をめぐりて、高館の下にて大河に落入。康衡等が舊跡は衣ヶ關を隔て、南部口をさし堅め、夷をふせぐと見えたり。扨も義臣すぐりて此城にこもり、功名一時の叢となる。國破れて山河あり、城春にして草青みたりと、笠打敷て、時のうつるまで泪を落し侍りぬ。

夏草や兵どもが夢の跡

卯の花に兼房見ゆる白毛哉　曾良

兼て耳驚かしたる二堂開帳す。經堂は三將の像を殘し、光堂は三代の棺を納め、三尊の佛を安置す。七寶散うせて、珠の扉風にやぶれ、金の柱霜雪に朽て、既に頽廢空虛の叢と成べきを、四面新にかこみて、甍を覆て、風雨を凌、暫時千歳の記念とはなれり。

五月雨の降のこしてや光堂

南部道遙にみやりて、岩手の里に泊る。小黒崎、みつの小島を過て、なるこの湯より尿前の關にかゝりて、出羽國に越んとす。此道、旅人稀なる所なれば、關守にあやしめられて、漸として關をこす。大山をのぼりて日既に暮ければ、封人の家を見かけて、舍りを求む。三日風雨あれてよしなき山中に逗留す。

蚤虱馬の尿する枕もと

あるじの云、是より出羽國に大山を隔て道さだかならざれば、道しるべの人を賴て越えへきよしを申す。さらばと云て人を賴侍れば、究竟の若者反脇指をよこたへ、樫の杖を携て、我々が先に立て行。けふこそ必あやうきめにもあふべき日なれと、辛き思をなして、後について行。あるじの言にたがはず、高山森々として一鳥の聲きかず、木の下闇茂りあひて、夜る行かごとし。雲端につちふる心地して、篠の中踏分々々水をわたり、岩に蹶て、肌につめたき汗を流して、最上の庄に出。かの案内せしをの子云やう、此道必不用の事有、恙なうおくりまゐらせて、仕合したりとよろこびてわかれぬ。跡に聞てさへ胸とゞろくのみ也。

尾花澤にて淸風と云者を尋ぬ。かれは富るものなれども志いやしからず。都にも折々かよひて、流石

に旅の情をも知たれば、日比とゞめて、長途のいたはりさまぐ〵にもてなし侍る。

涼しさを我宿にしてねまる也

這出よかひやが下の蟇の聲

まゆはきを俤にして紅粉の花

蠶飼する人は古代のすがたかな　曾良

山形領に立石寺と云山寺あり。慈覺大師の開基にて、殊に淸閑の地也。一見すべきよし人々のすゝむるに依て、尾花澤よりとつてかへし、其間七里斗也。日いまだ暮ず。麓の坊に宿かり置て、山上の堂にのぼる。岩に巖を重て山とし、松柏年ふり、土石老て、苔滑に岩上の院々扉を閉て、物の音きこえず。岸をめぐり岩を這て、佛閣を拜し、佳景寂寞として心すみ行のみおぼゆ。

しづかさや岩にしみ入蟬の聲

最上川をのぼらんと大石田と云所に日和を待。爰に古き俳諧の種こぼれて、忘れぬ花のむかしをしたひ芦角一聲の心をやはらげ、此道にさぐり足して、新古ふた道にふみまよふといへども、みちしるべする人しなければと、わりなき一巻殘しぬ。このたびの風流爰に至れり。

最上川は、みちのくより出て、山形を水上とす。こてん、はやぶさなど云おそろしき難所あり。板敷山の北を流て、果は酒田の海に入。左右田覆ひ茂みの中に船を下す。是に稲つみたるを、やいな船とはいふならし。白糸の瀧は青葉の隙〳〵に落て、仙人堂岸に臨で立、水みなぎりて舟あやうし。」

五月雨をあつめて早し最上川

六日三日、羽黒山に登る。圖司左吉と云者を尋て、別當代會覺阿闍梨に謁す。南谷の別院に舍して憐愍の情こまやかにあるじせらる。」

四日本坊において俳諧興行。

有難や雪をかをらす南谷

五日、權現に詣。當山開闢能除大師は、いづれの代の人と云事をしらず。延喜式に羽州里山の神社とあり、書寫黒の字を里山となせるにや。羽州黒山を中略して羽黒山と云にや。出羽といへるも、鳥の毛羽を此國の貢に献ずると風土記に侍るとやらん。月山湯殿を合せて三山とす。當時武江東叡山に屬して、天台止觀の月明らかに、圓頓融通の法の灯かゝげそひて、僧坊棟をならべ、修驗行法を勵し、靈山靈地の驗効人貴ひ且恐る。繁榮長にしてめでたき御山と謂つべし。」

八日、月山にのぼる。木綿しめ身に引かけ、寶冠に頭を包、強力と云ものに道ひかれて、雲霧山氣の中に、氷雪を踏でのぼる事八里、更に日月行道の雲關に入かとあやしまれ、息絶身こゞえて頂上に臻れば、日没て月顯る。笹を敷篠を枕として、臥て明るを待。日出て雲消れば湯殿に下る。谷の傍に鍛冶小屋と云有。此國の鍛冶靈水を選て、爰に潔齋して劍をうち終り月山と銘を切りて世に賞せらる。かの龍泉に劍を淬とかや。干將莫耶のむかしをしたう、道に堪能の執あさからぬ事しられたり。岩に腰かけて、しばしやすらふほど、三尺ばかりなる櫻のつぼみ半ばひらけるあり。ふる積雪の下に埋て、春を忘れぬ遲ざくらの花の心わりなし。炎天の梅花爰にかをるがごとし。行尊僧正の歌の哀も爰に思ひ出て、猶まさりて覺ゆ。惣て此山中の、微細、行者の法式として他言する事を禁ず。仍て筆をとゞめて記さず。

坊に歸れば阿闍梨の需に依て、三山順禮の句々短册に書。」

涼しさやほの三日月の羽黒山

雲の峰幾ッ崩れて月の山

語られぬ湯殿にぬらす袂かな

湯殿山錢ふむ道の泪かな　曾良

羽黒山を立て、鶴ヶ岡の城下長山氏重行と云ものゝふの家にむかへられて、俳諧一巻有。左吉も倶に送りぬ。川舟に乗て酒田の湊に下る。淵庵不玉と云醫師の許を宿とす。

あつみ山や吹浦かけて夕すゞみ

暑き日を海にいれたり最上川

江山水陸の風光數をつくして、今象潟に方寸を責。酒田の湊より東北の方山を越、磯を傳ひ、いさごをふみて、其際十里日影やゝかたぶく比、汐風眞砂を吹上、雨朦朧として鳥海の山かくる。闇中に莫作して、雨も又奇也とせば、雨後の晴色又頼母敷とあまの苫屋に膝をいれて、雨の晴を待。其朝天能く晴て、朝日花やかにさし出る程に、象潟に舟をうかぶ。先能因島に舟を寄せて、三年幽居の跡をとふらひ、むかふの岸に舟をあがれば、花の上こぐとよまれし櫻の老木西行法師の記念をのこす。江上に御陵あり。神功皇后の御墓といふ。寺を干滿珠寺と云。此處に行幸ありし事いまだ聞ず、いかなる事にや、此寺の方丈に坐して、簾を捲ば、風景一眼の中に盡て、南に鳥海天をさゝへ、其陰うつりて江にあり。西はむや〳〵の關路をかぎり、東に堤を築て、秋田に通ふ道遙に海北にかまへて、浪打ち入る

所を汐ごしと云。江の縱横一里ばかり、俤松島にかよひて、又異なり。松島は笑ふが如く象潟はうらむがごとし。寂しさに悲しひをくはへて、地勢魂をなやますに似たり。

象潟や雨に西施がねぶの花

汐越や鶴はぎぬれて海涼し

祭禮

象潟や料理何くふ神祭　曾良

蜑の家や戸板を敷て夕涼　みのゝ國の商人 低耳

岩上に雎鳩の巣を見る

波こえぬ契ありてやみさごの巣　曾良

酒田の餘波日を重ねて、北陸道の雲に望む、遙々のおもひ胸をいたましめて、加賀の府まで百卅里と聞。鼠の關をこゆれば、越後の地に歩みを改て、越中の國一ぶりの關に到る。此間九日、暑濕の勞に神をなやまし、病おこりて事をしるさず。

文月や六日も常の夜には似ず

荒海や佐渡によこたふ天の川

今日は親しらず、子しらず、犬もどり、駒返しなど云北國一の難所を越て、つかれ侍れば、枕引よせて寢たるに、一間隔て西の方に若き女の聲二人斗ときこゆ。年老たるをのこの聲も交て、物語するをきけば、越後國新潟と云所の遊女成し。伊勢參宮するとて、此關迄をのこ送りて、あすは古郷にかへす文したゝめて、はかなき言傳などしやる也。白浪のよする汀に身をはふらかし、あまの子の世をあさましう下りて定めなき契り、日々の業因、いかにつたなしと物いふをきゝ〳〵寢入て、あした旅立に我〳〵にむかひて、行へしらぬ旅路のうさあまり覺束なう悲しく侍れば、見えかくれにも御跡をしたひ侍ん。衣の上の御情に大慈のめぐみをたれて、結緣せさせ玉へと泪を落す。不便の事には侍れども、我々は所々にてとまる方おほし、只人の行にまかせて行べし、神明の加護かならず恙なかるべしと、云捨て出つゝ哀さしばらくやまざりけらし。

一家に遊女もねたり萩と月

曾良にかたれば書とゞめ侍る。くろべ四十八ヶ瀬とかや、數しらぬ川をわたりて、那古と云浦に出。擔籠の藤浪は春ならずとも、初秋の哀とふべきものをと、人に尋れば、是より五里いそ傳ひして、む

かふの山陰にいり、蜑の苫ふきかすかなれば、芦の一夜の宿かすものあるまじと　いひおどされて、

加賀國に入。

わ せ の 香 や 分 入 右 は 有 礒 海

卯の花山くりからが谷をこえて、金澤は七月中の五日也。爰に大阪よりかよふ商人何處と云者有、それが旅宿を共にす。一笑と云ものは、此道にすける名のほの〴〵聞えて、世に知人も侍りしに、去年の冬早世したりとて、其兄追善を催すに、

塚 も 動 け 我 泣 聲 は 秋 の 風

ある草庵にいざなはれて

秋 涼 し 手 毎 に む け や 瓜 茄 子

途 中 吟

あ か 〳〵 と 日 は 難 面 も あ き の 風

小松と云所にて

し ほ ら し き 名 や 小 松 ふ く 萩 す ゝ き

此所太田の神社に詣。實盛が甲錦の切あり、往昔源氏に屬せし時、義朝公より給はらせ給ふとかや。げにも平士のものにあらず。目庇より吹返しまで、菊から草のほりもの金をちりばめ、龍頭に鍬形打たり。實盛討死の後、木曾義仲願狀にそへて、此社にこめられ侍よし。樋口次郎が使せし事ともまのあたり緣記にみえたり。

むざんやな甲の下のきりぎりす

山中の溫泉に行ほど、白根が嶽跡に見なしてあゆむ、左の山際に觀音堂あり。花山法皇三十三所の巡禮とげさせ玉ひて後、大慈大悲の像を安置し玉ひて、那谷と名付玉ふとや。那智谷組の二字をわかち侍しとぞ。奇石さまぐ〵に古松植ならべて、萱ふきの小堂岩の上に造りかけて、殊勝の土地也。

石山の石より白し秋の風

溫泉に浴す。其功有馬に次と云。

山中や菊はたをらぬ湯の匂ひ

あるじとする物は久米之助としていまだ小童也。かれが父俳諧を好み、洛の貞室若輩のむかし爰に來りし比、風雅にはづかしめられて、洛に歸りて、貞德の門人となつて世にしらる。功名の後、此一村判

詞の料を請ずと云。今更むかし語りとはなりぬ。

曾良は腹を病で、伊勢國長島と云所にゆかりあれは、先立て行に、

行〳〵てたふれ伏とも萩の原　曾良

と書置たり。行ものゝ悲しび、殘るものゝうらみ、隻鳧のわかれて、雲にまよふがごとし。予も又、

今日よりや書付消さん笠の露

大聖寺の城外全昌寺といふ寺にとまる。猶加賀の地なり。曾良も前の夜、此寺に泊て、

終宵秋風聞やうらの山

と殘す。一夜の隔千里に同じ。吾も秋かぜを聞つゝ衆寮に臥せば、明ぼのゝ空近う讀經の聲すむまゝに、鐘板鳴て食堂に入。けふは越前國へと心早卒にして、堂下に下るを、若き僧ども紙硯をかゝへ階のもとまで追來る折節、庭中の柳ちれば、

庭掃て出るや寺に散柳

とりあへぬさまして、草鞋ながら書捨つ。越前の境、吉崎の入江を舟に棹して、汐越の松を尋ぬ。

終夜嵐に波をはこばせて

月をたれたる汐越の松　　西行

此一首にて數景盡たり。もし一辨を加るものは、無用の指を立るがごとし。

丸岡天龍寺の長老古き因あれは尋ぬ。又金澤の北枝と云もの、かりそめに見送りて、此所までしたひ來る。所々の風景、過さず思ひつゞけて、折節あはれなる作意など聞ゆ。今既に別に望みて、

物書て扇引さく余波かな

五十丁山に入て永平寺を禮す。道元禪師の御寺也。邦機千里を避て、かゝる山陰に跡をのこし玉ふも貴きゆゑ有とかや。福井は三里斗なれば、夕飯したゝめて出るに、たそがれの路たどくし。爰に等栽といふ古き隱士有。いづれの年にか江戸に來りて、予を尋ぬ。遥か十とせ餘り也。いかに老さらぼひて有にや、將死けるにやと人に尋侍れば、いまだ存命してそこかと敎ゆ。市中ひそかに引入て、あやしの小家に、夕顏へちまのはへかゝりて、鷄頭はゝ木に戸ぼそをかくす。さては此うちにこそと門を叩ば佗し氣なる女の出て、いづくよりわたり玉ふ道心の御坊にや、あるじは此あたり何がしと云ものゝ方に行ぬ、もし用あらば尋玉へと云。かれが妻なるべしとしらる。むかし物がたりにこそ、かゝる風情は侍れど、頓て尋逢て、その家に二夜とまりて、名月はつるがのみなとにとたび立、等栽も共に送

らんと裾をかしうからげて、路の枝折とうかれ立。漸白根嶽かくれて、比那嵩あらはる。あさむつの橋をわたりて、玉江の蘆は穂に出にけり。鶯の關を過て、湯の尾峠を越れば、燧が城かくる。山に初雁を聞て、十四日の夕ぐれつるがの津に宿をもとむ。その夜、月殊に晴たり。あすの夜もかくあるべきにやといへば、越路の習ひ猶明夜の陰晴はかりがたしと、あるじに酒すゝめられて、氣比の明神に夜参す。仲哀天皇の御廟なり。社頭神さびて、松の木の間に月のもり入たる、おまへの白砂霜を敷るがごとし。往昔、遊行二世の上人大願發起の事ありて、みづから草を刈、土石を荷ひ、泥渟をかわせて、参詣往來の煩なし。古例今にたえず。神前に眞砂を荷ひ玉ふ、これを遊行の砂持と申侍ると、亭主のかたりける。

月清し遊行のもてる砂の上

十五日、亭主の詞にたがはず、雨降。

名月や北國日和定めなき

十六日、空霽たれば、ますほの小貝ひろはんと、種の濱に舟を走らす。海上七里あり。天屋何某と云もの、破籠小竹筒などこまやかにしたゝめさせ、僕あまた舟にとりのせて、追風時のまに吹着ぬ。濱

はわづかなる海士の小家にて、侘しき法華寺あり。爰に茶を飲酒をあたゝめて、夕ぐれのさびしさ感に堪たり。

寂しさや須磨にかちたる濱の秋

浪の間や小貝にまじる萩の塵

其日のあらまし　等裁に筆をとらせて、寺に殘す。路通も此みなと迄出むかひてみのゝ國へと伴ふ。駒にたすけられて、大垣の庄に入ば、曾良も伊勢より來り合、越人も馬をとばせて、如行が家に入集る。前川子荊口父子其他したしき人々日夜とぶらひて、蘇生のものにあふがごとく。且悦び且いたはる。旅の物うきもいまだやまざるに、長月六日になれば、伊勢の遷宮をがまんと又舟にのりて、

蛤のふたみにわかれ行秋ぞ

嵯峨日記

元祿四、辛未、卯月十八月、嵯峨に遊びて、去來が落柿舍に至る。凡兆共に來りて、暮に及で京に歸る。予は尙暫くとゞむべきよしにて、障子つゞくり、葎引かなぐり、舍中の片隅一間なる所伏所と定む。

机一ツ　硯　文庫　白氏文集　本朝一人一首

世繼物語　源氏物語　土佐日記

松葉集を置

唐の蒔繪書たる五重の器に、さまゞゝの菓子を盛り、名酒一壺盃そへたり。

夜の衾、調菜の物共、京より持來て貧しからず。我貧賤を忘れて、淸閑を樂む。

十九日午半、臨川寺に詣。

大井川前に流て、嵐山右に高く、松の尾の里につゞけり。虛空藏に詣る人往かひ多し。松の尾林の中に、小督屋敷と云有、都て上下の嵯峨に三所あり、何れかたしかならん。彼仲國が駒とめたる所と

て、駒止の橋と云此あたりに侍れば、暫く是によるべきにや。墓は三軒屋の隣藪の内に有、しるしに櫻を植たり。かしこくも錦繡綾羅の上に起臥して、終に藪中の塵芥となれり。照君村の柳巫女廟の花のむかし思ひやらる。

うきふしや竹の子となる人の果

嵐山藪の茂りや風の筋

斜日に及で落柿舍に歸る。凡兆京より來る。去來京に歸る。宵より臥。

二十日北嵯峨の祭見んと羽紅尼來る。去來途中の吟とて語。

つかみあふ子供のたけや麥畑

落柿舍は昔の主の作れるまゝにして、處々頽癈す。中々に作りみがゝれたる昔のさまより、今のあはれなるさまこそ心とゞまれ。彫せし梁、畫る壁も風に破れ雨にぬれて、奇石怪松も葎の下にかくれたる竹椽の前に、柚の木一本花芳しければ、

柚の花にむかし忍ばん料理の間

子規大竹藪をもる月夜

またやみん覆盆子あからめ嵯峨の山　尼　羽紅

去來兄の方より菓子調菜の物など送りて、今宵は羽紅夫婦をとゞめて、蚊屋一はりに五人こぞり臥たれば、夜もいねがたくて、夜半過る頃よりも各起出て、晝の菓子盆など取出て、曉近きまではなし明す。去年の夏、凡兆が宅に臥たるに、二疊の蚊屋に四ヶ國の人ふしたり、思ふ事よつにして夢もまた四種と書捨たる事ども云出して笑ひぬ。明れば羽紅凡兆京にかへる。去來尚とゞまる。」

二十一日。

昨夜いねざりければ心むづかしく、空のけしきもきのふに似ず、朝よりうち曇り、雨をり〱音信れば終日眠臥たり。暮に及て去來京に歸る。今夜は人もなく晝臥たれば、夜も寢られぬまゝに、幻住庵にて書すてたる反故を尋出して淸書す。」

二十二日。

朝の間雨降、今日は人もなく淋敷まゝに、むだ書して遊ぶ、其詞。」

喪に居る者は悲みをあるじとし

酒をのむ者はたのしみをあるじとし

愁に住する者は愁をあるじとし
徒然に住する者は徒然を主とす

淋しさなくばうからましと、西上人のよみ侍るは、淋しさをあるじなるべし。又よめる

山里にこはまた誰をよぶこ鳥獨すまんとおもひしものを

獨すむ程面白きはなし。長嘯隱士の曰、客は半日の閑を得れば主は半日の閑を失ふと、素堂常に此ことばをあわれむ。予も又

うき我を淋しがらせよかんこ鳥

とは有寺に獨居て云し句也。暮方、去來より消息す。乙州か武江より歸り侍るとて、朋友門人の消息どもあまた屆く。其中、曲水が狀に、予がすみすてし芭蕉の舊跡を尋て、宗波に逢よし。」

むかし誰小鍋洗ひしすみれ草

又 云

我すみ所、弓杖二長ばかりにして、楓一本、外は靑き色を見すと書て、」

わか楓茶色になるも一盛り

嵐雪が文に

狗脊の塵にえらるゝ蕨哉

出替や幼ごゝろに物あはれ

二十三日。

手を打ば木魂に明る夏の月

夏の夜や木魂に明る下駄の音

竹の子や稚き時の繪のすさみ

麥の穗や涙に染て鳴雲雀

一日〳〵麥あからみて鳴雲雀

能なしの眠たし我をきやう〳〵し

二十四日。

題落柿舍

豆植る畑も木部屋も名所かな　凡兆

暮に及て、去來京より來る。

膳所昌房より消息

大津の昌白より消息有

凡兆來る堅田本福寺訪

春伯凡兆京に歸る

二十五日

千那大津に歸る

史邦丈草被訪

題落柿舍　丈草

深對峨峰伴鳥魚　就荒喜似野人居

枝頭今欠赤虬卵　青葉々頭堪學書

尋小督墳

強攪怨情出深宮　一輪秋月野村風

昔季僅得求琴韵　何處孤墳竹樹中

芽出しより二葉に茂る柿の實　丈草

途中吟

杜宇啼や榎も梅さくら　史邦

黄山谷之感句

杜門覓句陳無己　對客揮毫秦少游

乙州来て武江のはなし、拜燭五分、はいかい一巻、其内に、

半俗の膏藥入は懐に

碓井峠を馬ぞかしこき　其角

腰の簑に狂はする月

野分より流人に渡す小屋一ツ

宇津の山女に夜着を借て寝る

偽せめてゆるす堪忍

申の時斗より雷霆雹降雲龍寺を過る時、雹降、大なるはからもゝのごとし、小きは柴栗のごとし。」

二十六日

茅出しより二葉に茂る柿の實　史邦

畠の塵にかゝる卯の花　芭蕉

蝸牛頼母しげなき角振て　去來

人のくむうち釣瓶待なり　丈草

有明に三度飛脚の行やらん　乙州

二十七日

人不來終日得閑。」

二十八日

夢に、杜國が事を云出して、涕泣して覺る。心氣相交る時は、夢をなす、陰盡て火をゆめみ、陽衰へて水を夢見る。飛鳥髪を含時は飛鳥をゆめ見、帶を敷寢にする時に蛇を夢見ると云り。睡枕記に、槐安國莊周が蝶夢、皆其理有て妙をつくさす。我夢は聖人君子の夢にあらず。終日忘想散亂の氣、夜陰

夢又しかり、誠に此ことを夢見るこそ所謂念夢なれ。我に志ふかく、伊陽舊里迄したひ來りて、夜々床を同じくし、起臥行脚の勞を助て、百日が程影のごとく伴ふ、片時も離れず。ある時はたはふれ、或時はかなしみ、其志吾心裏に染て忘るゝ事なければ成べし、覺て又袂をしぼる。

二十九日

日暮に至て奧州高館の詩を見る。

　高館聳天星似冑　衣川通海月如弓

　其地の風景聊以不叶古人不至其地時以不叶其景

三十日。朔日

江州平田明昌寺李由訪問。尙白千那消息有。

　竹の子や喰殘されし後の露　李由

　此ごろの肌着身につく卯月哉　尙白

　　遷　岐

　またれつる五月もちかし聟粽　同

二日

「曾良來り芳野の花を尋、熊野に詣侍るよし。武江舊友門人の話彼是取まぜて談す。」

　熊野路や分つゝ入は夏の海

　大峰や芳野の奥を花の果

夕陽にかゝりて、大井川に船を浮べて、嵐山にそふて、戸難瀬を登る。雨降出て暮に及て歸る。」

三日

昨夜の雨降つゞく事終日終夜止ず。猶其武江の事共問語に既夜明る。」

四日

宵に寢ざりける草臥に終日臥。晝より雨降りやむ。明日は落柿舍を出んにと、名殘をしかりければ、奥口の一間〳〵を見廻りて、

　五月雨や色紙へぎたる壁の跡

文章篇

幻住庵記

石山の奥岩間のうしろに山有、國分山と云。そのかみ國分寺の名を傳ふなるべし。麓に細き流を渡りて、翠微に登る事三曲二百歩にして八幡宮たゝせ玉ふ。神體は彌陀の尊像とかや。唯一の家には甚忌なる事を、兩部光を和げ、利益の塵をおなじうしたまふも又たふとし。日頃は詣ざりければ、いとゞ神さび、物しづかなる傍に住すてし草の戸有。よもぎ、根笹軒をかこみ、屋根もり、壁落て、狐狸ふしどを得たり、幻住庵と云。あるじの僧何がしは勇士菅沼氏、曲水氏の伯父になん侍りしを、今は八年斗昔に成て、正に幻住老人の名をのみ殘せり。予又市中をさる事十年斗にして、五十年やゝちかき身は、簑虫の簑を失ひ、蝸牛の家を離て、奥羽象潟の暑き日に面をこがし、高砂子あゆみくるしき北海の荒磯にきびすを破りて、今歳湖水の浪にたゞよふ、鳰の浮巣の流とゞまるべき蘆の一もとの陰たのもしく、軒端茨あらため、垣根結そくなどして、卯月の初いとかり初に入し山の、頓て出じとさへおもひそみぬ。流石に春の名殘りも遠からず、つゝじ咲殘り、山藤松に懸りて、時鳥しばしば過る程、宿かし鳥の便さへ有を、木つゝきのつゝくともいはじなどそゞろに興して、たましひは呉楚東南

にはしり、身は瀟湘洞庭に立つ、山は未申にそばだち、人家よきほどに隔り、南薫峰よりおろし、北風海を浸して涼し。日枝の山、比良の高根より辛崎の松は霞こめて、城あり、橋あり、釣たるゝ舟有、笠とりにかよふ木樵の聲、麓の小田に早苗とる唄、螢飛かふ夕闇の空に水鷄の叩く音、美景物としてたらずといふ事なし中にも三上山は士峰の俤にかよひて、武蔵野の古き栖もおもひいでられ、田上山に古人をかぞふ、さゝほが嶽、千丈が峰、袴腰といふ山有。黒津の里はいとくろう茂りて、網代守るにぞとよみけん萬葉集の姿也けり。猶眺望くまなからんと、後の峰に這のぼり、松の棚作り、藁の圓座を敷て、猿の腰掛と名付く。彼海棠に巣をいとなむ主、簿峰に庵を結べる王翁除佺が徒にはあらず、唯睡癖山民と成て、孱顔に足を投出し、空山に虱を捫て座す。適心まめなる時は、谷の清水を汲て、自炊ぐ、とく〳〵の雫を侘て、一爐の備へいとかろし。はた昔住けん人の殊に心たかく住なし侍りて、たくみ置る物ずきもなし。持佛一間を隔てゝ、夜の物をおさむべき所など、いさゝかしつらへり、さるを筑紫高良山の僧正は、加茂の甲斐何某が厳子にて、此たび洛にのぼりいまそかりけるを、或人をして額を乞、いとやす〳〵と筆を染て、幻住庵の三字を送らる、頓て草庵の紀念となしぬ。すべて山居といひ、旅寝と云、さる器たくはふべくもなし。木曽の檜笠、越の菅蓑はかり枕の上の柱に懸た

り。晝は稀〳〵と訪ふ人〴〵に心を動かし、あるは宮守の翁、里のをのこども入來りて、いのしゝの稻くひあらし、兎の豆畑にかよふなど我聞しらぬ農談、日既に山の端にかゝれば、夜坐靜に月を待ちては影を伴ひ、燈を取ては罔兩に是非をこらす。かくいへばとて、ひたぶるに閑寂を好み、山野に跡をかくさんとにはあらず。やゝ病身人に倦て、世をいとひし人に似たり。倩年月の移りこし拙き身の科をおもふに、ある時は仕官懸命の地をうらやみ、一たびは佛籬祖室の扉に入らんとせしも、たよりなき風雲に身をせめ、花鳥に情を勞して、暫く生涯のはかりごとゝさへなれば、終に無能無才にして此一筋につながる。樂天は五臟の神をやぶり老杜は痩たり。賢愚文質のひとしからざるも、いづれか幻の栖ならずやと、おもひ捨てふしぬ。

先たのむ椎の木もあり夏木立

題芭蕉翁國分山幻住庵記之後

何世無隱士以心隱爲賢也何處無山川風景因人美也問讀芭蕉翁幻住庵乃記識其賢且知山川得其人而益美矣可謂人與山川共相得焉廼作鄙章一篇歌之曰

琵湖南兮國分嶺　古松鬱兮綠陰清

茅屋竹椽纔數問　内有佳人獨養生
瀟口錦繡輝山川　風景依稀入誹域
此地自古富勝覽　今日因君尙益榮

元祿庚午仲秋日震軒具艸

十八楼記

美濃國、ながら川にのぞみて、水楼あり。主を賀島氏といふ。稲葉山後に高く、亂山左右にかさなりて近からず遠からず。田中の寺は杉の一むらにかくれ、岸にそふ民家は、竹のかこみのみどりも深し。曝布所々に引はへて、右に渡し船浮ぶ。里行かひしげく、漁村軒をならべて、網を引釣をたるゝおのがさまぐゝも、只此楼をもてなすに似たり。暮がたき夏の日も忘るゝばかり、入日の影も月にかはりて、波にむすぼるゝ篝火の影もやゝ近く、高欄のもとに鵜飼するなど、誠に目ざましき見ものなりけらし。かの瀟湘の八ツのながめ、西湖の十の境も、涼風一味のうちに思ひためたり。もし此楼に名をいはんとならば、十八楼ともいはまほしき也。

此あたり目に見ゆるものは皆涼し

洒落堂記

山は靜にして性をやしなひ、水はうごいて情をなぐさむ。靜動二ツの間にして、すみかを得物あり、濱田氏珍夕といへり。目に佳境をつくし、口に風雅を唱へて、濁をすまして塵をあらふが故に、洒落堂といふ、門に戒幡を掛て、分別の門内に入る事をゆるさずと書けり。彼宗鑑が客にをしふるざれ歌に、一等くはへてをかし、且それ簡にして方丈なるもの二間休紹二子の侘を次で、しかも其のりを見ず。木を植、石を並てかりのたはぶれとなす。抑、おものゝ浦は、勢多唐崎を左右の袖のごとくし、湖を抱て三上山に向ふ。湖は琵琶のかたちに似たれば、松のひゞき波をしらふ。日枝の山、比良の高根をなゝめに見て、音羽石山の肩あたりになむ置けり。長柄の花を髪にかざして、鏡山は月をよそふ。淡粧濃沫の日にかれるがごとし。心匠の風雲も亦是に習ふ成べし。

四方より花吹入てにほの海

紙衾の記

古き枕、古きふすまは、貴妃がかたみより傳へて、戀といひ哀傷とす。錦床の夜のしとねの上には、鴛鴦をぬひ物にして、ふたつのつばさに後の世をかこつ。彼は其膚に近く、其匂ひ殘りとゞまれらんをや、戀の一物とせんむべなりけらし。いでや、此紙のふすまは戀にもあらず、無常にもあらず、蜑の笘屋の蚤をいとひ、驛のはにふのいぶせきを思ひて、出羽の國最上といふ所にて、ある人つくり得させたる也。越路の浦々、山館、野亭の枕の上には、二千里の外の月をやどし、蓬葎のしきねの下には、霜にさむしろのきり〴〵すを聞て、晝は疊みて脊中に負ひ、三百餘里の險難をわたり、終に頭を白くして、みのゝ國大垣の府にいたる。猶も心のわびをつきて、貧者の情をやぶる事なかれと、我をしたふものにうちくれぬ。

伊賀大佛之記

伊賀國阿波の莊に新大佛といふ有。此所は南都東大寺の聖俊乘上人の舊跡也。ことし舊里に年をこ

て、舊友宗七宗無ひとり二人さそひ合してかの地に至る。仁王門鐘樓の跡は、枯たる草の底にかくれて、松物いはゞこと問ん礎ばかり堇のみしてといひけんも、かゝる氣色に似たらん。猶分入て、蓮花臺獅子の座なんどは、いまだ苔の跡を殘せり。御佛は後へなる岩窟にたゝまれて、霜に朽、苔に埋れてわづかに見えさせ給ふに、御ぐしばかりはいまだつゝがもなく、上人の御影を崇め置たる草堂の傍に安置したり。誠にこゝらの人の力を費し上人の貴願いたづらになり侍ることも悲しく、涙も落て語もなく、むなしき石臺にぬかづき侍て、」

丈六にかげろふ高し石の上

月見賦

ことし琵琶湖の月見んとて、暫く木曾寺に旅寝して、膳所松本の人々を催に、乙州は酒をたづさへて泉川に三日の名をつたへ、正秀は茶を包て信樂に一夜の夢を覺す。今宵は茶といひ、酒といひ、かたふの人も二派にわかれて、酒堂は灯にかたぶきて、其茶に玉川が歌を詠じ、丈草は月にうそぶきて、其酒に樂天が詩を吟ず。支考は若く木節は老ぬ。智月は物の覺束なう、かつぎのあまのなまざびなら

ず。それが中にも惟然法師は酒におどろき、茶に感じ、ほむるもそしるも空に風吹て。爰に三子者の志をためさらんや、まして其外の友とする人も峨々洋々の心ざしをしれゝば、すべて飲中八仙の遊びならん。誠やつれぐ〳〵の法師だに心をつくろはぬ友えらびは、かゝる月見の侘なるやと思ひしまゝの草の庵に浮世の外の風狂をつくせり。

米くるゝ友をこよひの月の客

かくて三盃の興に乗じて、湖水の月に船を浮べんと、物このむ人の風情をそへたるに、杖に瓢箪の唐子はなけれども、扇に茶瓶の若男あれば、赤壁の船のともしさにはあらざめり。さゞ浪や、打出の濱の名にしおふ鏡の山もこなたにさし向ひ、日枝は横川の杉につらなりて、比良の高根は雁をもかぞへつべし。うしろに音羽の峰高く、石山の鐘はあばづの嵐にさへて、そこに楓橋の霜も置ぬらん。矢橋の歸帆は今宵をもてなすに似たるべし。

名月や湖水に浮ぶ七小町

されば我朝の紫式部は石山に源氏の俤を寫し、唐國の蘇居士は西湖に越女のよそほひをたとふ。いづれも風雅の名に殘りて、今のまぼろしに浮ざらんや。實そも和漢の名蹤なりけらし。さて松本に船を

さし寄て、茶店の欄干に心をはなてば、目はよし蓬萊の水をへだて、身はたゞ芙蓉の露にうるほふ。竹の林の酒も時ならで松江の鱸は今宵なるをや。猶はたかたぶく月の名殘には、辛崎の松もひとりやたてる古き都の名もゆかしければ、尾花川の明ぼのをこそと、千那尙白をおどろかしぬれば、夜ははや五更に過ぬべし。

三井寺の門たゝかばやけふの月

誠に推敲のむかしながら、船に今宵の遊を思へば、此座に韓愈の文章をもあざむき、賈島が詩賦をもゝどさぬべき詩人文客にとぼしからねば、たとへ赤壁の前後といふとも、其地に此人をはづべきやと見ぬもろこしを相手にとりて、今宵の風流を爭ふほどに、月は長等山の木の間にいりぬ。

既望賦

望月の殘興猶やまず、今宵は二三子にいさめられて、船を堅田の浦にはす。其日もたそがれの程ならん、何某成秀といふ人の家の後に漕入れて、醉翁狂客の月にうかれて來れるありと、船の中より聲々によばふ。あるじは思ひかけず、おどろき悅びて、簾をまき塵を拂ふに、其後園に芋あり、さゝげ有

て、鯉鮒の切目たゝさぬにしもあらず。やがて岸上に筵をならべ、筵をのべて、おの／＼いざよひの宴を催す。月は待ほどもなくさし出て、湖上はなやかに照わたれり、兼てきゝぬ仲秋望の日は、月は浮見堂にさし向ふを鏡山といふなるよし。今宵猶其あたり遠からじと、かの堂上の欄干によれば、三上水莖は左右にわかれて、その間に十二峰の影をひたす。とかくいふほど月も三竿にして、黒雲のうちに隱れたれば、いづれか鏡山といふ事をわかず。されどあるじの興をそへて、をり／＼雲のかゝるこそと、客をもてなせる心ざしいと切なり。やがて其月の雲をはなるゝほど水面に玉塔の影をくだきて、あらたに千體佛の光をそふ。誠やいざよひの空を世の中にかけて、かたぶく月のをしきのみかはとは、京極黄門の歎息の詞なるを、我はこよひしも此堂に遊びて、二たび惠心僧都の衣をうるほす無常觀想の便ならずやといふに、あるじは興に乘じて來れる客を、などさは興つきて歸さんやと、もとの岸上に盃をあぐれば、月は横川にかたぶきて、姑蘇城の鐘も聞ゆなるべし。」

鎖あけて月さし入よ浮御堂

やす／＼と出ていざよふ月の雲

烏之賦

一烏小大有て名を異にす。小を烏鵲といひ、大を觜太といふ。此烏反哺の孝を讃して、烏中の曾子に比す。或は人家に行く人をつけ、銀河に翅をならべて、二星の媒となれり。或ひは大年のやどりをしりて春風をさとり、巢を改むといへり。雪の曙の聲寒げに、夕に寢所へ行なんと、詩歌の才士も情あるに云なし、繪にもかゝれてかたちを愛す。只貪猶の中にいふ時はその時大いなり、又汝が罪をかぞふる時は其德小にして、害又大なり。就中、かの觜太は性佞強惡にして、鷲の翅をあなどり、鷹の爪のときことを恐れず、肉は鴻雁の味もなく、聲は黃鳥の吟にも似ず。啼時は、人不正の氣を抱て、かならず凶事をひいて、愁をむかふ。里にありては栗柿の梢をあらし、田野に有ては田畑を費す。糧に辛苦の勞をしらずや、或は雀のかい子をつかみ、池の蛙をくらふ。人の尸をまち、牛馬の腸をむさぼりて、終にいかの爲に命をあやまり、鵜の眞似をしてあやまりを傳ふ。是みな汝むさぼる事大にして其智を責ざる誤なり。汝がごとき心貪慾にして、かたちを墨に染たる人に有て、賣僧といふ釋氏も是をにくみ、俗士も甚うとむ。嗚呼、汝よくつゝしめ、羿か矢先にかゝつて、三足の金烏に罪せられん

ことを。

松島之賦

抑、事ふりにたれど、松島は扶桑第一の好風にして、凡洞庭西湖を耻ず。東南より海を入て、江の中三里浙江の湖をたゝふ。七十二峰数百の島々欹つものは天を指しふすものは波に匍匐、あるは二重にかさなり三重にたゝみて、左にわかれ右につらなる、負るあり、抱るあり、兒孫を愛するがごとし。内ふたこ、外ふたこ、鎧島、かぶと島、牛しま、蛇島、内裏しま、屏風島、苞ケ島はあまの小船漕つれて、肴わかつ聲〱に、つなでかなしもとよみけん俤を殘し、末の松山は寺となりて、松のひま〱墓を築て、羽をかはし枝をならぶる契の末も、終には皆かくのごとしと悲し。野田の玉川、沖の石、宮城野の萩、武隈の松、猶此境に名をならべたり。鹽竈の浦にはしほがま明神あり。神前のかな燈籠文治三年泉の三郎寄進と記す。雄島が磯は地つゞきにて、雲居禪師の別室の跡に坐禪石。瑞岸寺は相模守時頼入道の建立、當寺三十二世の昔、眞壁平四郎出家して、入唐、歸朝の後開山す。そのち伊達政宗再興して、七堂伽藍となれりける。法蓮寺は海岸に峙、老杉影をひたし、花鯨波にひゞ

く。松の緑こまやかに枝葉潮風に吹たわめて、屈曲おのづからためたるがごとし。その氣色窅然として美人の顔を粧ふ。ちはやふる神のむかし、大山すみのなせるわざにや、造花の天工いづれの人か筆をふるひ詞を盡さん。

幻住庵賦

五十年やゝちかき身は、苦柳の老木となりて、蝸牛のからをうしなひ、蓑虫のみのをはなれて、行方なき風雲にさまよふ。かの宗鑑がはたこを朝夕になし、能因が頭陀の袋をさぐりて、松島白川に面を焦し、湯殿の御山に袂をぬらす。猶善知鳥啼く外の濱邊より、えぞが千島を見やらんまでと、しきりにおもひ立侍るを、同行曾良何がしと云もの、多病いぶかしなど袖をひかえるに心たわみて、象潟といふ所より越路の方へおもむく。さるは高砂子あゆみくるしき北海の荒磯にきびすを破て、ことし湖水のほとりにたゞよふ鳰の浮巣のながれとゞまるべき蘆の一葉のやどり求るに、其名を幻住庵と云、其山を國分山といへり。古きみやしろのたゝせ玉へば、六根おのづから淸して塵なき心地なんせらるかの住捨し草の戸は、勇士菅沼氏の曲水子伯父なる人の此世をいとひし跡とかや。主は八とせばかり

の昔になりて、樓はまぼろしのちまたに殘せり。まことに知覺逶倒と、みなたゞ幻の一字に歸して無常迅速のことわり、いさゝかもわするべき道にあらず。山はさすがに深からず、人家よきほどにへだゝり、石山を前にあてゝ岩間山のしりへ立り、南薰たかく峰よりおろし北風はるかに海をひたして涼し。折しも卯月の初めなれば、つゝじ咲殘り、山藤松にかゝりて、時鳥しば〳〵過るほど宿かし鳥のたよりさへあるに、木啄のつゝくともいでじ、かつこ鳥我をさびしがらせよなどひとりよろこび、そゞろにたのしみて、吳楚東南のながめに耻ず。五湖三江もこゝにうたがはしきや、ひえの山比良の高根よりから崎の松はかすみこめて、膳所の城は木の間にかゞやき、勢田の橋に雨はれて、粟津の松原に夕日を殘す。三上山は不二の俤にかよひて、むさしのゝ古きすみかも思ひ出られ、田上山に古人をしたふ、さゝほがだけ、千丈が峰はかまこしと云山あり。笠取山に笠はなくて、黑津の里人の色やくろかりけん。猶はた眺望くまなからんと、うしろの峰にはひのぼり、松の棚作り、藁の圓坐を敷て、これを猿の腰かけと名づく。傳へきゝぬ除老が海棠巢の飲樂も、市にありてかまびすしく、玉道人が主薄峯の住ひも旻を捨てうらやむべからず。虛無にまなこをひらいて嘯き、孱顏に虱をひねりて坐す。たま〳〵心すこやかなる時は薪を拾ひ淸水をむすぶに、齒朶ひとつ葉のみどりをつたふ、とく

〳〵の雫をわびてか、一爐のそなへいと輕し。前に住ける人もさすがに心高く、たくみおける物ずきもなし、持佛一面をへだてゝ、よるの物かくし置べき所など、いさゝかしつらへり、さるを高良山の僧正、洛に上り居玉ひしをある人をして額をこふ、いとやすらかに筆を取りて、幻住庵の三字をおくらる。其裏には、予が名を書て、後見ん人のかたみともなれりとなり。山居といひ、旅寢といひ、させる器たくはふべきにもあらず。木曾の檜木笠、越の菅みのばかり枕の上の柱にかけたり、ひるは宮守の翁、麓の里人など入來りて、猪の稻くひあらし、兎の豆畑にかよふなど、我聞しらぬはなしに日を暮し、且はまれ〳〵訪人も、夜坐しづかにして影をともなひ、罔兩に對しては是非をこらす。斯いへばとてひたぶるに閑寂をこのみ、山野に跡をかくさんとにもあらず、病身やゝ人にうみて、世をいとひし人に似たり。何ぞや、法をも修せず俗をもつとめず、いとわかき時よりよこさまにすける事侍りて、しばらく生涯のはかりごとゝさへなれり。終に此一筋につながれて、無能無才を恥るのみ。勞して功空しく、神つかれ、眉をしはめて、秋も半に過ゆくまゝ、風景朝暮の變化とても、又只のすまひならずやと、此文をとゞめて立さりぬ。

（編者言。此一文前述の幻住庵記と文章相似たり。恐らくはその下書の草稿にてもあらん乎。

雪見賦

十月の時雨、霜月の霜、師走の雪の降べきとて、ひとり法師は火燵の小薬罐に物くるゝ友とてなし。金箱の守する親仁は、袖口より脊中をかゝせて、茶碗にふけゆく鐘の聲をかぞふ。それより一ふし世なれたる男は、夜着の袖口より庭を見やりて、あら降たる雪哉と、身の上に、うたひ捨たる花も紅葉も遊び過して、今更ものさびしけれと、折々父母をこらしたるひとり息子の身の果ならん。世は斯さまぐの相手あれど、これと遊ばんと思ふ人はまれ也。たとへ香爐峰に簾を捲たる女は、智恵過てすさまじく、かの山陰のよるの雪に、小舟の模様付たる男も興過て後寒からんっいざや無分別界にて、平日浸地の雪見せんと、此三國川に舟をうかべたるに錦城の顯吟は更にしらず。中に置火燵の紫ふとんは、雪の夕日にかゞやきて、繻子の緋むくも純子の空色も、名こその關の名こそとがめてしかば、人目もしのびずやあらん。むかし陶朱公が舟にのせて、五湖のあなたに遊し人は、我もの顔にて憎からんに、越女の紅裙も花娘の翠黛も、こゝにともしからぬ遊びならん。經が岡の松は佛くさきをいやがり、上戸は長くらへ山に日をめぐらせ、日野ヶ嶽には反椀の中ありて、我とおもはんもののあらば、此盃まるらさう

と、舳先に立て相手待に、我は小杯のかげにかくれて、月高寺の入相に此夕ぐれをおしむばかり也。」

芭蕉を移す辭

菊は東籬にさかえ、竹は北窓の君となる。牡丹は紅白の是非ありて世塵にけがさる。荷葉は平地にたゝず、水清からざれば花さかず、いづれの年にや栖を此境に移す時芭蕉一もとを植。風土芭蕉の心にや叶ひけん。數株莖を備へ、其葉茂り重りて庭をせばめ、萓が軒端もかくるゝ計なり、人呼て草庵の名とす。舊友門人ともに愛して、芽をかき根をわかちて、所々に送る事年々になん成る。一とせみちのくの行脚思ひ立て、芭蕉庵すでに破れんとすれば、かれは籬の隣に地を替て、あたり近き人々に霜の覆ひ風のかこひなど、返すく賴み置て、はかなき筆のすさみにも書殘し、松はひとりになりぬべきにやと、遠き旅ねのむねにたゝまり、人くのわかれ芭蕉の餘波ひとかたならぬ侘しさも、終に三とせの春秋を過して、ふたゝび芭蕉に泪をそゝぐ。今年五月の半、花たちばなの匂ひもさすがに遠からざれば、人くの契も昔にかはらず。猶此あたり得立さらで、舊き庵もやゝ近う、三間の茅屋つきゞゝしう杉の柱いと清げに削なし、竹の枝折戸安らかに葭垣厚うしわたし、南に向ひ池に臨みて水樓

便なれは月を見るにも便よろし。初月の夕より雲をいとひ雨をくるしむ。名月のよそほひにとて先はせを一株を植ゆ。其葉廣うして琴をおほふにたれり。或は半吹をれて鳳鳥の尾をいたましめ、青扇破れて風を悲しむ。たま〳〵花咲けともはなやかならず、莖太けれども斧にあたらず、かの山中不伐の類木にたぐへて、其性よし。僧懷素は是に筆をはしらしめ、張横渠は新葉を見て、修學の力とせしとなり。予、其二ッをとらず只此陰に遊びて、風雨に破れやすきを愛す。

成秀か庭上の松をほめる詞

松あり、高さ九尺ばかり、下枝さし出るもの一丈餘、枝上だんをかさね、其葉森々とこまやな也。琴をあやどり、雨をよび、波を起す。筆に似、笛に似、鼓に似て、浪は籟をとく。當時牡丹を愛する人、奇出をあつめて他にほこり、菊を作れる人は小輪を咲て人にあらそふ。柿木柑類は、其實を見て、枝葉のかたちをいはず。唯松ひとり霜後に秀、四時常盤にして、しかも其けしきをわかつ。樂天曰、松よく舊氣を吐故に千歳を經と、主人目をよろこばしめ心を慰するのみにあらず、長生保養の氣

齡を知てまつに契るなるべし

元錄四年仲秋日

柴門辭　森川許六離別詞

去年の秋、かりそめに面をあはせ、ことし五月の初、深切に別ををしむ、其わかれにのぞみて、一たび草扉をたゝいて、終日閑談をなす。其器繪を好み風雅を愛す。予こゝろみにとふ事あり、繪は何の爲に好むや、風雅の爲に好むといへり、風雅は何の爲愛すや、繪の爲愛すといへり。其學ぶ事二ツにして、用をなす事一也。まことや、君子は多能を耻と云へれば品ふたつにし用一なる事感ずべきにや、繪はとつて予が師とし、風雅はおしへて予が弟子となす。されど師が繪は精神徹に入り、筆端妙をふるふ。其幽遠なる處、予が見る所にあらず。予が風雅は夏爐冬扇のごとし、衆にさかひて用る所なし。只釋阿西行の詞のみ假初にいひちらされしあだなるたはふれごともあはれなる處おなじ、後鳥羽上皇の書せ給ひしものにも、これらは歌に實有て、しかもかなしびをそふるとのたまひ侍しとかや。されば此御ことばを力として、其ほそき一筋をたどり失ふ事なかれ。猶古人の跡をもとめず、古

人のもとめたる所を求めよと、南山大師の筆の道にも見えたり。風雅も又是に同じといひて、灯をかゝげて、柴門の外におくりてわかるゝのみ。

元祿六孟夏末　　風羅坊芭蕉述

おなじく五月六日の頃、旅だゝんと申つかはしけるにおどろき、例の次郎兵衛を使として、後の旅は我も木曾路を經て、眞一文字に五老井と志す。彦城の諸子にはやく對面せん事を常々ねがふ、かならず人に沙汰する事なかれと、こまやかに文して、色紙短册繪讃の類もたせ給はる。猶離別の情あさからずして、發句などいとねんごろにしたゝめ、かさねて詞書をそへて、うまのはなむけを寄られたり。並に杉風子各餞別あり。(句塞)

送許六辭

木曾路を經て、舊里にかへる人は森川氏許六といふ。古へより風雅に情ある人々は、後に笈をかけ、草鞋に足をいため、破笠に霜露をいとひて、おのれが心をせめて、物の實をしる事をよろこべり。今、仕官おほやけの爲には長劍を腰にはさみ、乘かけの後に槍をもたせ歩行若黨の黒き羽織のもすそ

は風にひろがへしたるありさま、此人の本意にはあるべからず。

椎の花の心にも似よ木曾の旅

うき人の旅にも習へ木曾の蠅

許六云兩句一句に決定すべきよし申されけれと、今滅後のかたみに二句ならべ侍ると也

送僧專吟

杖頭に草鞋をかけて、笠の内に名をあらはす。元祿六とせ彌生のはじめ、僧專吟、武江の東深川の草扉を開て、既に一歩をはじむと書ぬ、此僧常に風雅を好み、市を避て、年〱斗藪行脚の身となる。ことし又伊勢熊野に詣んとて、身は雲外の鶴にひとしく、流に觜をすゝぎ、千尋の岡に衣をふるふて野に伏雲に泊らん胸中の塵いさぎよし。予、雜の交をなす事久し。今此別にのぞみて、ともに岸上に立て、箱根山はるかに見やる。かの白雲のたわめる所こそ旅愁の嶮難さかしきちまたなるべけれ。君かならず首をめぐらして見よ、我又此岸上に立んといひて袂をわかちぬ。

鶴の毛の黒き衣や花の雲

栖去之辨

こゝかしこうかれありきて、橘町と云所に冬籠りして、睦月きさらぎになりぬ。風雅もよしや是までにして、口をとぢんとすれば、風情胸中をさそひて、物のちらめくや風雅の魔心なるべし。家を放下して、栖を去、腰にたゞ百錢をたくはへて、柱杖一鉢に命を結ぶ。なし得たる風情終に菰をかぶらんとは。

雲雀より空にやすらふ峠かな

更科姥捨月之辨

ことし姨捨の月見ん事しきりなりければ、八月十一日みのゝ國をたち、道とほく日數すくなければ、夜に出、暮に草枕す。思ふにたがはず、その夜さらしなの里にいたる。山は八幡といふ里より一里ばかり南に西南に、横をりふしてすさまじう高くもあらず。かどかどしき岩なども見えず、たゞ哀ふかき山、

すがた也。なぐさめかねしといひけんもことわりしられて、そゞろに悲しきに、何故にか老たる人を捨たらんと思ふに、いとゞ涙も落そひければ。

俤や姨ひとりなく月の友

いざよひもまり更科の郡かな

閉關の說

色は君子の惡む所にして、佛も五戒のはじめにおくといへども、流石に捨がたき情のあやにくに、哀なるかた〴〵もおほかるべし。人しれぬくらぶの山の梅の下ふしに、思ひの外の匂ひにしみて、忍ぶの岡の人目の關も守る人なくば、いかなるあやまちをか仕出てん。あまの子の浪の枕に袖しほれて、家をうり身を失ふためしも多かれど、老の身の行末をむさぼり、米錢の中に魂をくるしめて、物の情をわきまへざるには、遙にまして罪ゆるしぬべく、人生七十を稀なりとして、身の盛なる事はわづかに二十餘年也。初めの老の來れる事、一夜の夢のごとし。五十年六十年のよはひかたぶくより、あさましうくづをれて、宵寢がちに朝起したる寢覺の分別、何事をかむさぶる。おろかなる者は思ふ事多

し。煩惱增長して一藝すぐるゝものは、是非のすぐるるもの也。是をもて世のいとなみに當て、貪慾の魔界に心を怒し、溝洫におぼれて、生かす事能はずと、南華老仙の唯利害を破却し、老若をわすれて、閑にならんこそ老の樂とはいふべけれ。人來れば無用の辨あり、出ては他の家業をさまぐるもうし、尊敬が戸を閉て、杜五郎が門を鎖さんには、友なきを友とし、貧を富めりとして、五十年の頑夫、自書みづから禁戒となす。

あさがほや晝は鎖おろす門の垣

煤掃の說

明ぼのゝ空より物のはた〱と聞ゆるは、疊を叩く音なるべし。けふは師走の十三日、煤掃のことぶきなり。げにや雲井の儀式、九重の町の作法は嘉例ある事にて、只なみ〱の人の煤はく禮こそいと面白けれ。おの〱門さしこめて、奥のひとまを屛風にかこひなし、火鉢に茶釜をかけて、婦が帷子の上張爪さき見えたる足袋もいとさむく、冬の日影のはやく晝に成ゆき、庭の隅調度どもとりちらしたる中に、持佛のうしろむきたるこそ目には立なれ。家童の椽の破れ簀の子の下を覗き廻るは、何を

拾ふにやとあやし。味噌と呼る大男の袋かぶり裂きたるもめづらかに、米櫃のサン打つけ、爼板しらけ、行燈張かへて、たつくり鱠淺漬のかをり花やかに、かみしもの隣するならべたるに、程なく暮て高鼾とはなりぬ。

煤掃や暮行宿の高いびき

銀河序

北海道に行脚して、越後國出雲崎といふ所に泊る。彼の佐度が島は海の面十八里滄波を隔て、東西三十五里に横をり臥たり。みねの嶮難、谷の隈〳〵迄流石に手にとる斗あざやかに見えわたさる。むべ此島はこがね多く出て、あまねく世の寶となれば目出たき島にて侍るを、大罪朝敵の類ひ遠流せらるゝによりて、只おそろしき名の聞へあるも本意なき事に思ひて、窓押開きて、暫時の旅愁をいたはらんとする程、日既に海に沈て、月ほのくらく、銀河半天にかゝりて、星きら〳〵と冴えたるに、沖のかたより浪の音しば〳〵運びて、魂けづるがごとく、腸ちぎれて、そゞろにかなしびきたれば草の枕も定まらず、墨の袂何故ともなくてしぼるばかりになん侍る。

荒海や佐渡に横たふあまの川

阿羅野序

尾陽蓬左橿木堂主人荷兮子、集を編て、名をあら野と云。何故にこの名ある事をしらず。予はるかに思ひやるに、ひとゝせ此郷に旅寝せしをり〳〵の書捨あつめて、冬の日といふ。其日影相續て、春の日又世にかゞやかす。げにや衣更着やよひのけしき、柳櫻の錦を爭ひ、蝶鳥のおのがさま〴〵なる風情につきて、いさゝか實をそこなふものもあればにや。糸遊の、いとかすかなる心のはしの有かなきかにたどりて、姫百合のなにゝもつかず、雲雀の大空にはなれて、無景の極りもなき道芝のしるべせんと、此野の原の野守とはなれるべし。

元祿二年彌生　　芭蕉桃青

三十番句合序

小六ついたる竹の杖、ふし〳〵多き小歌にすがり、あるははやりこと葉のひとくせあるを種として、

いひ捨られし事どもをあつめ、右と左にわかちてつれふしにうたはしめ、其かたはらにみづからかみしかき筆のしんきはらしに、清濁高下をしるして、三十番の發句合せを思ひ、太刀折紙式作法も有べけれど、我まゝ氣まゝに書ちらしたれば、世に披露せんとにはあらず。名を貝おほひといふめるを合せて勝負を見るものなれば也。又神樂の發句を巻軸に置ぬるは、歌にやはらぐ神心といへば、予がこゝろざす處の誠をてらし見給ふらん事をあふぎて、當所あまみつおほん神のみやしろのたふけくさとむぬ。

寛文十二年正月二十五日伊賀上野松尾氏宗房釣月軒にてみづから序す

句合跋

二柳軒不卜のぬしは、身を塵境に隨ひまじりて、心ざしは雲ゐる山の岩根をたどり、あるはよし野の花に笈を負ひ、湖水の月に琵琶をうかべて、風雅の奴となる事としあり。是より先に、集をあらはす事ふたゝびに及といへども、春秋遠く雲ゆき雨ほどこして、東籬の菊も名をさま〴〵に、唐綢の牡丹も花しべを異にす。梅の佗櫻の興も、折にふれ時にたがへば、句も又人を驚かしむ。猶其しげき林に

入て、花の香のきよきにつき、色こき木の葉を拾ひて、左右にわかちて積て、四節となす。判士よたりに乞ひて、我も其一にしたがふ。まことや樂にえらるゝものゝ餡をぬすむに似たりといはん。されども青鷺の目をぬひ、鸚鵡の口を戸ざゝんことあたはず。貞享卯のとし、筆を江上の潤にそゝぎて、終に芭蕉庵雪夜のとほし火に對す。

伊勢紀行の跋

根なし草の、花もなく實もみのらず、たゞ賤しき口にいひのゝしれるたはぶれごとの世なるを、其角ひとゝせ都の空に旅寢せしころ、向井氏去來のぬしむつまじきちぎりありて、酒のみ茶にかたり猶々甘き、辛き、しぶき、淡き心の水の淺きより深きを傳へて、終に一掬して百川の味ひをしれるなるべし。今年の秋、いもうとをゐて伊勢に詣づ。白川の秋風よりかの濱荻の聲を聞て、とまりくのあはれなることゞもかたはし書あらはして、我草の戸の案下におくる。一たび吟じて感を起し、ふたゝび誦して感をわする、三度よみてその無事なることを覺ゆ。此人やこの道　至れり盡せり。」

西東あはれさひとつ秋の風

虚栗集跋

栗とよぶ一書、其味四ツあり

李杜が心酒を嘗て、寒山が法粥を啜る。これに仍て其句を見るに、はるかにしてきくに遠し。侘と風雅のその生にあらねば、西行の山家を尋て、人の拾はぬ蝕栗也。戀の情つくし得たり。むかしは西施か振袖の顔、黄金鑄ル小紫ニ上陽の閨の中には衣桁に蔦のかゝるまで也。

下の品には眉こもり親そひの娘、娵姑のたけき爭ひをあつかふ。寺の兒歌舞の若衆の情をも捨ず、白氏が歌を假字にやつして、初心をすくふたよりならんとす。其語震動虚實をわかたず、寶の鼎に句を練て、龍の泉に文字を冶に、是必他のたからにあらず、汝が寶にして後のぬす人を待。

天和癸亥仲夏日　　芭蕉洞盜人　桃青

蓑虫跋

草の戸さしこめて、物わびしき折しも、たゞく〳〵みの虫の一句をいふ。我友素翁、はなはだあはれがりて、詩を題し、文をつらぬ。其詩や錦をぬひものにし、其文に玉をまろばすがごとし、つら〳〵見れば離騷のたくみあるに似たり。また黄奇蘇新あり、はじめに虞舜曾參の孝をいへるは、人にをしへをとれとや。其無能を感る事ふたゝび南華の心を見よとや。終に玉むしのたはぶれば色をいさめんとならし。翁にあらずば誰か此虫の心をしらん。靜に見れば物みな自得すといへり。此人によりて此句をしる。むかしより筆をもてあそぶ人、おほくは花にふけりて、實をそこなひ、實をこのみて、風流をわする。此文やはた其花を愛すべし、實なをくらひつべし。爰に何某朝湖と云あり。此事を傳聞て、これを畫く、まことに丹青淡々しく情こまやかなり。心をとゞむれば虫うごくがごとく、黄葉落るかとうたがふ。耳をたれて是をきけば、其むし聲をなして、秋の風そよ〳〵とさぶし。猶閑窓に閑をえて、兩士の幸にあづかること、みのむしのめいほくあるに似たり。」

閑居箴

あら物ぐさの翁や、日頃は人の問來るもうるさく、人にもまみへじ人をもまねかじと、あまたゝび心

にちかふなれど、月の夜雪のあしたのみ友のしたはるゝもわりなしや。物をもいはず獨酒のみて心にとひ心にかたる。庵の戸押あけて、雪をながめ又は盃をとりて、筆をそめ筆をすつ。あら物くるほしの翁や。

酒のめばいとど寢られぬ夜の雪

自得箴

もらふてくらひこふてくらひ、肌寒わづかにのがれて、

めでたき人の數にもいらん年の暮

座右銘

人の短をいふ事なかれ、己が長をとく事なかれ。

銘に云

ものいへば唇寒し秋の風

机銘

閑なる時は壁をかけて苔蔦吹噓の氣を養ふ。しづかなる時は書を紐といて、聖意賢才の精神をさぐり靜なる時は筆を取りて、義素の方寸に入たくみなすおしまつき一物三用をたすく、高さ八寸、面二尺兩脚にあめつちのふたつの封を彫にして、潜龍牝馬の貞に習ふ、是をあげて一用とせんや又二用とせんや。

應蘭子求　元祿仲冬　　芭　蕉　書

瓢の銘

一瓢重黛山　自咲稱箕山

莫慍首陽餓　這中飯顆山

顏公のかきほに生るかたみにもあらず、惠子がつたふ種にしもあらで、我にひとつのひさご有。是をたくみにつけて、花入る器にせんとすれば、大にしてのりにあたらず。さゝえにつくりて、酒をもらんとすれば、かたち見る所なし、ある人曰草庵のいみしき糧入つへきものなりとまことに蓬の心あるかな。やがて用ひて、隱士素翁に乞て、これが名をえさしむ。其ことばは右に記す。其句皆山を以て

おくらるゝが故に、四山とよぶ中にも、飯顆山は老杜が住る地にして、李白がたはぶれの句あり。素翁李白にかはりて、我貧をきよくせんとす、かつむなしき時はちりの器となれ、得る時は一壼も千金をいだきて、黛山もかろしとせんことしかり。

物ひとつ瓢はかろきわが世かな

澁笠銘

草の扉にひとりわびて、秋風さびしき折く竹取のたくみに習ひ、妙観がかたなをかりて、自ら竹をわり竹をけづりて、笠つくりの翁となのる。心しづかならざれば日にふるに物うく、工みつたなければ夜をつくしてならず、あしたに紙を重ね、ゆふべにほして、又重ねく澁といふ物をもて色をさはしますく堅からん事を思ふ。二十日過る程にこそやゝいできにけれ、其かたちうらの方にまきへ、外ざまに吹返りなど荷葉の半ひらくるに似て、なかくをかしき姿也。さらばすみかねいみしかゝんよりゆがみながらに愛しつべし。西行のふじ見笠か、東坡居士か雪見笠か、宮城野の露に供つれねは、呉天の雪に杖をや曳ん。霰にさそひ、時雨にかたふけ、そゞろにめでゝ殊に興ず。興のうちにして俄に

感ずる事あり。ふたゝび宗祇の時雨ならでも、假のやどりに袂をうるほして、みづから笠の裏に書つけ侍る。

世にふるはさらに宗祇のやどり哉

嵐蘭誄

金革を褥にして、あへてたゆまざるは士の志也。文質偏ならざるをもて、君子のいさほしとす。松倉嵐蘭は、義を骨にして實を腸にし、老莊を魂にかけて風雅を肺肝の間にあそばしむ。予とちなむ事十とせあまり、九とせにや、此三とせばかり官を辭して、岩洞に先賢の跡をしたふといへども、老母を荷ひ稚子をほだしとして、いまだ世波にたゞよふ。されども榮辱の間に居らず、日々風雲に座して、今年仲秋中の三日、由井金澤の波の枕に月をそふとて、鎌倉に杖を曳。其かへるさより心地なやましうして、終に息絶えぬ。おなじき二十七日の夜の事にや。七十歳の母に先だち、七歳の雅子に思ひを殘す。いまだをしむべき齡の五十年にだにたらず、公の爲には腹おし切ても悔まじきうつはの、はかなき秋風に吹しほれたる草の袂、いかに露けくも口をしくもあるべき。今はの時の心さへしられて悲

しきに老母のうらみはらからのなげき、したしきかぎりは聞傳へて、偏に親族の別れにひとし。過つる睦月ばかりに、稚子が手をとりて、予が草庵に來り、かれに號を得さすべきよしを乞。王戎五歳の眼ざしうるはしと、戎の一字を摘て嵐戎と名づく。其よろこべる色、今目のあたりをさらず。いける時むつましからぬをだに、なくてぞ人はしのばるゝならひ、まして父のごとく、子のごとく、手の如く、足のごとく、年頃いひなれむつびたる俤の、愁の袂にむすほれて、枕もうきぬべきばかり也。筆をとりておもひをのべんとすれば才つたなく、いはんとすれば胸ふたがつて、たゞおしまつきにかゝりて夕の雲にむかふのみ。

秋風に折てかなしき桑の杖

東順傳

老人東順は榎氏にして、其祖父江州堅田の農士竹氏と稱す。榎氏といふものは、晋子が母方によるものならし。ことし七十歳、ふたとせの秋の月をやめる枕の上に詠めて、花鳥の情、露を悲しめる思ひかぎりの床のほとりまで神亂れず、終に更科の句を形見として、大乘妙典の臺に隱る。若かりし時、

醫を學びて恒の產とし、本多何某の公より俸錢を得て、釜魚甑塵の愁すくなし。されども世路をいとひて、名聞の衣を破り、杖を折て、業を捨、既に六十年のはじめ也。市店を山居にかへて樂む處筆をはなさず、机をさらぬ事十とせ餘り、其筆のすさひ車にこほるゝがごとし。湖上に生れて、東野に終りをとる。是かならず大隱朝市の人なるべし。

入月の跡は机の四隅かな

西行上人像讃

すてはてゝ身はなきものと思へども
　雪のふる日はさぶくこそあれ
　花のふる日はうかれこそすれ

卒都婆小町賛

あなたふとく、簑も尊し、笠も尊とし。いづれの人かかたりつたへ、いかなる人か寫しとゞめて、

千歳のまぼつし今爰に現す。其かたちある時はたましひも又爰にあらん。簑も拿し、笠もたふとし

たふとさや雪ふらぬ日もみのと笠

雲竹自畫像

洛の桑門、雲竹目の像にやあらん、あなたの方に顏ふりむけたる法師を畵て、これに讃せよと申されければ、君は六十年あまり予は既に五十年にちかし。ともに夢中にして、夢の形をあらはす。是にくはふるに寢言を以てす。

こちらむけ我もさびしき秋の暮

杵折賛

此杵の折と名付るものは、上ツかたにてめでさせ玉ひ、目出たき扶桑の奇物となれり。汝いづれの山より生出てゝ何國の里の賤が碪のかたみ成ぞや。昔は横槌たり。今は花入と呼て、貴人頭上の具に名を改といへり、人またかくのごとし高きにゐて驕るべからず、ひくきに在てうらむべからず、只世の

中は横槌なるべし。

此槌のむかし椿か梅の木か

石臼頌

市中に有て俗塵によごれぬ物は、げに其はじめをよくするよりも、其終をとぐる事はがたし。商山竹林の隱士も猶出てつかへ、寛平花山の上皐も終りたしかならず。たまく是を見るに、只石臼のひとつのみ。一聖國師は是をもて肉身を養ひ法身をしる。民家には又麥刈初る比よりも。籾こきおとす冬に至る迄、片時も餘所にする事なし。其高き事を論ずれば、役優婆塞の庵の中にかくれて、彼たぐひある道引忠きり上に立べし。上と下とふたつなるは、力たらざる者の爲にもつはらなれば也。不斷土間にあつて、筵より外を見ぬは、謙に居る事の調べにあらずや。かりにも黃姉の手にとられざる事のありがたき事をふかくさぐりしるべし。目なだらかなる時は、かますを擔ふ老翁の出來りて、こつくとする音すみて後は、季札か劍を塚にかくることをまつべし。名を盜む盜人はあれど、石臼を盜む盜人はなし。又人の心をみださゞるの至りならずや。月さしのぼる夕顔の陰に、ひとりはおどろ

の髪をまくね、ひとりは佛のまねをする天窓なりにてくるしき事を覺へず。挽まはすちからに其飢をたすくるは、文王の始につかへ玉へるに事たがはず。やゝいまやうのむつかしき歌の節にもかまはず、辭も唱歌も古代のまゝにして、枝もさかゆる葉もしげると、しわぶきがちにわなゝかれたるぞをかしきや。

贈風絃子

風絃は琴にあらず、瑟にあらず、彈に爪を用ひず、柱をたてず、天籟の禮を能く調べて、合商角徴羽の音におちず。

與或人文

大和國長尾の里といふ所は、さすがに都遠きにあらず、山里にして山里にあらず。心あるさまにて、老たる母のおはしけるを、其家のかたへにしつらへ、庭前に木草のをかしげなるを栽置て、岩尾めづらかにするなし、手つから枝をため、石を撫ては蓬萊の島ともなりぬ。いく藥とりてんよと、老母に

つかへ、なぐさめなどせし實ありけり。家まづしくして、孝をあらはすとこそ聞くなれ。まづしからずして孝を盡す、古人もかたきことになんいひける。

冬しらぬ宿や籾する音あられ

賭酒堂

湖水の磯を這出る田螺一疋、芦間の蟹のはさみをおそれよ、牛にも馬にも踏るゝ事なかれ。

難波津や田螺の蓋も冬籠

弔初秋七日雨星

元祿六、文月七日の夜、風雲天にみち、白浪銀河の岸をひたして、烏鵲も橋杭をながし、一葉梶をふきをるけしき、二星も屋形をうしなふべし。今宵猶たゞに過さんも殘り多し。一燈かゝげ添へる折から遍照小町が歌を吟ずる人あり、是によつて、此二首を探て、雨星の心をなぐさめんとす。

小町が歌

高水に星も旅寢や岩の上　芭蕉

遍照が歌

七夕にかさねはうとし絹合羽　杉風

醉登二階一

酒瀑布冷麥落九天　其角

雪紬左勝六月鯛　芭蕉

重陽三句菊

風菊盞笠冠止　嵐朝

有蘭草菊宜止　芭蕉

俳門有芳菊　嵐雪

はやこなたへといふ露のむぐらの宿はうれたくとも

袖をかたしきて御とまりあれや旅人

たび人と我名よばれんはつしぐれ

◇

義を守る事唐がらしに習へ　翁

色を思ふ事温飩のごとくせよ　去來

鄙歌自得

思ふことふたつのけたる其跡は
　花のみやこもゐなかなりけり

題知らず

あみ雑魚を升にはかりて買ふ人は
　賣る人よりもあはれなりけり

◇

はるけき旅の空、おもひやるにも、いさゝかも心にさはらんものむつかしければ、日頃住ける庵を相したる人に譲りて出ぬ。此人なん、妻を具し、むすめ孫など持る人なりければ、

草の戸も住替る代ぞ雛の家

◇

貞享五年きさらぎの末、伊勢に詣づ。我御白洲の土を踏こと既に五たびに及び侍りぬ。ひとつ〳〵としのくはゝれるにしたがひて、かけまくもかしこきおほん光りも思ひまされる心地して、かの西行の跡をしたい増賀のまことを悲しびて、内外の御前にぬかづきながら、袂をしぼるばかりになん侍る、

何の木の花はしらず匂ひかな

はだかにはまだ衣更衣の嵐かな

◇

毘沙門堂の花盛、四天王の榮花もこれにはいかでまさるべき。うへなる黑谷下河原、むかし遍照僧正のうき世をいとひし花頂山、わしのみやまの花の色、枯にし鶴の林まで思ひしられてあはれ也。

觀音の甍見やりつはなの雲

◇

みちのくの、名所〳〵心に思ひとめて、先關屋の跡なつかしきまゝに、ふる道にかゝり、今の白川もこえぬ。頓て岩瀬郡に至て、乍單齋等窮子の芳扉を叩く。かの陽關の出て故人に逢なるべし。

風流のはじめや奥の田植うた

◇

しのぶの郡しのぶの里とかや、文字摺の名殘とて、方二間ばかりなる石有。此石は昔女の思ひの石と

成て、其面に文字有とかや。山藍すりみだるゝ故に、戀によせて多くよめり。今は谷間に埋れて、石の面は下ざまに成たれば、させる風情も見えず侍れども、さすがに昔覺えてなつかしけれ

さなへとる手元やむかししのぶ摺

文字摺石

しのぶ文字ずりの石は、みちのくふくしまの驛にありて、往來の人の麥草を取て、此石をこゝろみけるを、里人共心うく思ひて、此谷にまろばし落しぬ。石の面はしたさまにふしたれば、今はさるわざする事もなく、風雅の昔にかはれるをなげきて。

早苗とる手もとや昔しのぶ草

◇

みちのく一見の桑門同行二人、なすの篠原をたづねて、猶殺生石を見んと、急ぎ侍る程にあめ降出ければ先此所にて止まり候

毘沙門堂の花盛、四天王の榮花もこれにはいかでまさるべき。うへなる黒谷下河原、むかし遍照僧正のうき世をいとひし花頂山、わしのみやまの花の色、枯にし鶴の林まで思ひしられてあはれ也。

◇

観音の甍見やりつはなの雲

◇

みちのくの、名所〳〵心に思ひとめて、先關屋の跡なつかしきまゝに、ふる道にかゝり、今の白川もこえぬ。頓て岩瀬郡に至て、乍單齋等窮子の芳扉を叩く。かの陽關の出て故人に逢なるべし。

風流のはじめや奥の田植うた

◇

しのぶの郡しのぶの里とかや、文字摺の名殘とて、方二間ばかりなる石有。此石は昔女の思ひの石と

成て、其面に文字有とかや。山藍すりみだるゝ故に、戀によせて多くよめり。今は谷間に埋れて、石の面は下ざまに成たれば、させる風情も見えず侍れども、さすがに昔覺えしなつかしけれ

さなへとる手元やむかししのぶ摺

文字摺石

しのぶ文字ずりの石は、みちのくふくしまの驛にありて、往來の人の麥草を取て、此石をこゝろみけるを、里人共心うく思ひて、此谷にまろばし落しぬ。石の面はしたさまにふしたれば、今はさるわざする事もなく、風雅の昔にかはれるをなげきて。

早苗とる手もとや昔しのぶ草

◇

みちのく一見の桑門同行二人、なすの篠原をたづねて、猶殺生石を見んと、急ぎ侍る程にあめ降出ければ先此所にて止まり候

落くるやたかくの宿のほとゝぎす　風羅坊
木の間をのぞく短夜のゆめ　曾良
元祿二年孟夏

中將實方の塚

中將實方の塚は、みちのく名取郡笠島と云所にて、道より一里ばかり侍るといへど、雨しきりにふりて日もくれかゝれば

（猿蓑集には又斯あり、編者）奥州名取郡に入て、中將實方の塚はいづくにやと尋ね侍れば、道より一里半ばかり左の方笠島といふ所にありとをしふ。降つゞきたる五月雨いとわりなく打過るに。

笠島はいづこ五月のぬかり道

越後國能生宿白山權現社汐路之名鐘

むかしより能生社にふしぎる名鐘有、これを汐路の鐘といへり。いつの代より出來たる事をしらず。

鐘の銘ありしかど幾代の汐風に吹くされて見えざりしと、常陸坊の追銘とかや。此鐘、汐の滿來らんとて、人さはらずして響くこと一里四面、さる故に此の浦は海士の兒までも自然と汐の滿干を知り侍りしに、明應の頃燒亡せり。されどその殘銅をもつて、今の鐘、能登國中居浦鑄物師某鑄返しけるとぞ猶鐘につきたる古歌などありといへども、誰あつてこれを知る人なし。

曙や霧にうづまく鐘の聲

◇

まことに須磨明石の其さかひは、はいわたるほどゝいへりける源氏のありさまもおもひやるにぞ、今はまぼろしの中に夢をかさねて、人の世の榮華もはかなしや。

蝸牛角ふりわけよ須磨明石

櫂七に示す

舊里を去て、しばらく田野に身をさすらふ人あり。家僕何がし、水木の爲に身を苦しめ心をいたましし

めて、其獠奴阿段が功をあらそひ、陶侃が故奴をしたふ。誠や道は其人をとるべからず。物は其かたちにあらず、下位に在ても上智の人ありといへり。猶石心鐵肝たゆむことなかれ、あるじも其善をわするべからず。

先祝へ梅をこゝろの冬籠

◇

笠は長途の雨にほころび、紙衣はとまり〳〵のあらしにもめたり。侘つくしたるわび人我さへあはれなにおほへける。昔、狂歌の才士此國にたどりし事を不圖思ひ出て申侍る。

狂句　凩の身は竹齊に似たるかな

◇

ある茶店の傍にやすらひしに、我を見しり侍るにや、内へ請じて、家女の料紙持出て曰、我は此家の遊女なりしを、今のあるじい、妻となし侍る也。先のあるじも鶴といふ遊女を妻とす。その頃、難波

の宗因此所にわたり玉ふを見て、句を願ひ請ひたると例をかしき事を言出て、頻に望侍ればいなみがたくて、かの難波の老人の句に、葛の葉のおつるがうらみ夜の霜と云句を前書にして、てふといひける女にあたふ。

蘭の香や蝶の翅にたきものす

◇

さやの船廻りしに、有明の月入果て、美濃路近江路の山々雪降懸りて、いとゞをかしさにおそろしく髭生たるものゝふの下部などいふものゝ、やゝもすれば船人をねめいかるぞ、興うしなう心地せらる桑名より處〳〵馬に乘て、杖つき坂引のぼるとて荷鞍うちかへりて馬より落ぬ。便なき獨旅さへあるを、まさなの乘手やと馬子にしかられながら

歩行ならば杖つき坂を落馬かな

といひけれども季の言葉なし、雜の句といはんもあしからじ。

代々の賢き人々も、古郷はわすれがたきものにおぼえ侍るよし。我今はゝじめの老も四とせ過て、何事につけても昔のなつかしきまゝに、はらからのあまたよはひかたぶきて侍るも見捨がたくて、初冬の空のうちしぐるゝ頃より雪を重ね、霜を經て、師走の末伊陽の山中に至る。猶父母のいまそかりせばと、慈愛のむかしも悲しく、おもふ事のみあまた有て、

舊里や臍の緒に泣としの暮

◇

甲州産屋ヶ崎にて

崑崙は遠く、蓬萊方丈は仙の地なり。まのあたり士峰地を抜て、蒼天をさゝへ、日月の爲に雲門をひらくかと、むかふ所皆表にして、美景千變す。詩人も句をつくさず、才士文人も言を斷、畵工も筆を捨てはしる。若藐姑射の神人有て、其詩を能せんや、其繪をよくせんか。」

雲霧に暫時百景をつくしけり

◇

ある人の草の戸を尋侍りけるに、よそに出侍るよしにて、年老たるをのこ獨留守を守り居けるに、垣穂の梅の盛なりけるを、是なんあるじといひければ、かのをのこ隣の梅にてさふろふと申に、いよいよ興うしないて、歸り侍るとて、

留守に來て梅さへよその垣根かな

◇

本間主馬が宅に、骸骨どもの笛鼓をかまへて能する所を畫て、舞臺の壁に掛たり。まことに生前の戯などは此遊びにことならんや、かの髑髏を枕として、終に夢うつゝをわかたざるも、只この生前を示さゞるもの也。

稲妻や顔の所がすゝきの穂

白髪吟

便も文月の玉まつる頃、武陵より古里に歸るに、二十とせの月日も夢なれや。小堂の萱草も霜がれて今は其俤だになかりしが、何事も昔に立かはりて、はらからの髭しろく眉しはみて、つれなき命ありとのみいひ出る言葉もなきに、このかみの守り袋をほどきて、母の白髪をがめよ浦島が子の玉手箱に汝が眉もやゝ老たりと、年月のおこたりはなかたみに泣つゝ

一家みな杖にしら髪の墓参

◇

甲戌の夏、大津に侍りしを、兄の許より消息せられければ、舊里に歸りて、盆會をいとなむとて、

家はみな杖に白髪の墓参り

◇

伊賀山家にウニといふ物有、土の底より堀出て薪とす。石にもあらず、木にもならず、黒色にしてあしき香有。そのかみ高梨野也これを考て曰、本草に石炭といふ物あり、いかに申傳ひて、此國にのみ

燒ならはしけん、いとめづらし。

香に匂へうにほる岡の梅の花

須磨の浦

卯月の中頃、須磨の浦一見す。うしろの山は、青葉にうるはしく、月はいまだおぼろにて、春の名殘もあはれながら、只此浦のまことは秋をむねとする事にや、心にものたらぬ氣色あれば、

月はあれど留守のやうなり須磨の夏

保美の里

此里をほびといふ事は、院の御門のほめさめ玉ふ地なるによりて、ほうびといふよし里人のかたり侍るを、いづれのふみに書とゞめたるとしらず侍れども、いともかしこく覺へ侍るまゝに。

梅つばき早咲ほめん保美の里

いらこざき程近ければ見に行侍りて、

◇

駿河の國に入て、

　駿　河　路　や　花　橘　も　茶　の　に　ほ　ひ

五月の雨風しきりにおちて、大井川は水出侍りければ、島田にとゞめられて、如舟如竹などいふ人のもとにありて。

　ちさはまだ青葉ながらになすびかな

　さみだれの雲吹おとせ大井川

　やはらかにたけよことしの手作麥　　如舟

　田植とともに旅の朝起　　はせを

元祿七。五月、雨に降こめられて、あるじのもてなしに心うごきて、聊筆をとる事になん。」

◇

曾良何某は、此あたり近くに居をしめて、あさなゆふなにとひつとはる。我くひものいとなむ時は、一柴折くすぶるたすけとなり、茶を煮る夜は來りて軒をたゝく。性隱閑をこのむ人にて交り金をたつ。ある夜、雪をとはれて、

君火をたけよき物見せん雪丸ゲ

◇

きしの山吹とよみけん、よしのゝ川上こそ皆やま吹なれ。しかも一重に咲こぼれて、あはれに見え侍るぞ、をさ〳〵櫻にもおとるまじきや。

ほろ〳〵と山吹ちるか瀧の音

◇

翌は檜木とかや、谷の老木のいへる事あり。きのふは夢と過て、明日はいまだ來らず。たゞ生前一樽のたのしびの外に、翌は／＼と言くらして、終に賢者の譏をうく。」

さびしさや花のあたりのあすならふ

◇

河野松波宅にて、古き長瓢に瓜の花を生て、下に無弦の琵琶を置て、花生より落る雫を搔面にうけたり。一句を望ける時、

瓜の花雫いかなるわすれ草

◇

四條の河原すゞみとて、夕月夜のころ有明過る頃まで、川中に床をならべて、夜すがら酒のみ物くひ遊ぶ、女は帯のむすびめいかめしく、男は羽織ながら着なして、法師老人共にまじはり、桶屋かぢやの弟子まで、いとま得顔にのゝしる。さすがにみやこのけしきなるべし。」

川風や薄がき着たる夕すゞみ

◇

柴の戸ときけばいやしき名なれども、世にこのもしき物にぞありける。此の歌は東山に住ける僧を尋て、西行上人のよませ給ふよし、山家集に載られたり。いかなる住居にやと、まづその坊のなつかしければ。

柴の戸の月やそのまゝ阿彌陀坊

◇

それ天地は風雅なり、万象もまた風雅なり。此風雅は佛祖の肝膽なり。造花に随て四時を友とす、見る所花にあらずといふ事なく、おもふ所月にあらずといふ事なし。心、月にあらざれば禽獣に等しくかたち、花にあらざれば夷狄に類す、夷狄を出、禽獣をはなれて造化に歸れよ。

古池や蛙飛込水の音

◇

たまく\はせを翁の添削を乞に、謝禮を厚くしてこれを贈侍るに、翁ひらき見て風儀不叶とおしかへされしを、いと心うき事にして、なほ公案にたへず。かさねて、

雪にしれ翁さびけん芭蕉洞

爰に水仙の薫更也

天命と掃除の咳のおとづれて

歌仙一軸を送りしに、いか成機嫌の折ふしにや

爰に水仙のいと若きありと挨拶の添削ありて、奥書に（編者言。以上は人麿千年忌櫻雲集之跋に出づ）

いよの國、松山の嵐、はせをの洞の枯葉を吹て、其聲歌仙を吟ず。噫、寥々刁々たる風の音玉を鳴らし金鐵ひゞく、或はつよく、或はやはらかに吹て、且人をしてなかしめ人の心をつく、萬竅怒號響替て句毎の意味各別也。唯是天籟自然の作者はせをば破れて風飄々。

江上　芭蕉散人

當地ある人附句あり、此句江戸中聞人無御座候。予に聽判望來候へ共、予も此附方意味難辨依之御内意賴進候。貴丈御聞定の旨趣ひそかに御しらせ可被下候。東武にひろめて愚の手柄に仕度候。

其附句

蒜の籬に鳶をながめて

といへる前句に

鳶の居る華の賤屋とよめり皃

二月上弦　はせを

木因様

其返書

華牒拜見、或人の附句貴丈御聞定無之依之愚評の儀被仰越、予猶考に落不申候故乍残念及返進候。隨而下官去頃在京の節古筆一枚相求申候。此切レ京中ニ定る人無御座候。依之貴丈え御内意賴進候。伺

の御字の御撰集筆者等、貴丈御見定之旨趣ひそかに御しらせ可被下候。花洛にひろめて愚の手柄に仕度候。」

其古筆

桒薗集巻七 春俳諧歌

蒜のまがきに鳶の居るを詠め侍りて

鳶の居る花の賤屋の朝もよひ

木をわる斧の音ぞ聞ふる

二月下弦　　木因

芭蕉様

稱美の詞　　翁

杭瀬川の翁こそ予が思ふ所にたがはず鳶の句の評感言寄候。江戸衆聞人なしと申候は聊いつはり彼翁の心を諫ん爲に候。爰元にも珍しとのみ云人三分、同物に同物付たる古人類なきと云捨たる人二分、

書翰篇

道をないがしろにしていひたき事いはるゝなと嘲る野輩もたま〳〵有之、予が志を了察の士も一兩人は有之候を、千里を隔て自慢書ちらしたるは還て愚盲の至に御坐候へども、日來彼翁此道知たる人と定置候得ば聊了簡引見んため書付遣候處愚案一毫の違無御座候寔に不淺候。」

自讃之詞

古往達人、花に櫻を付るに同意去を本意とせり。増て鳶に鳶を附て一物別意を附分け、常時未來の作者に此句を似させず、古往今來未來一句の格いづれの時か秋風來て、芭蕉の露もろく破れんとの一句、一生是のみ存ばかりに候と書くうちに、鼻高くをごめき肩のあたり羽たゝきするやうに覺候。」

◇

御芳翰舟便慥に相達、小紙一束被懸御意遠方忝奉存候。御發句共御書附同感候。愈御無事の旨珍重此事に存候。愚庵無別條罷在候。三ッ物例年の通可被成候由珍重存候。相替事無御座候間早々

正月廿日

春もやゝけしきとゝのふ月と梅

比日申候　　　　はせを

木因様

飲酒一枚起請

もろこし我朝にもろ〳〵の上戸達の沙汰し申さるゝさかもりにもあらず、又かちんをくひ茶をのみてのめる酒にもあらず、只往生極樂のためには南無阿彌陀佛と申てうたがひなく往生するぞと思ひとりて一杯のむより外別の子細は候はず。但三獻四種の肴など申ことの候は酒宴も決定してめづらしき酒肴もとめたると思ふうちにこもり候也。此外に奧ふかき大盃は二尊の御あはれみにはづれ本性を失ひ候はんを愛せん人はたとへ一代の法を學ばずとも、一文不智愚鈍の身になして下戸にも常にふるまはせて、只一向に酒をのむべし。

右飲酒一枚起請は尊朝親王御作のよし承候。尤さる人の許に御眞筆にてかけ物にして床にかゝり有候。あまり〳〵面白き御作ゆゑちよと寫し來候。貴丈常々大酒をせられ候故此御文句を寫して大酒は御無用に存候。仍而一句

朝顔に我は飯喰ふ男かな

いかゞくはしき事は頓て御目にかゝり万々可申述候。以上

十七日　　　　はせを

其角丈

◇

草枕、月をかさねて、露命恙もなく、今ほど帰庵に趣き、尾陽熱田に足を休る間、ある人我に告て、圓覺寺大巓和尚ことし睦月のはじめ、月まだほのぐらきほど梅のにほひに和して遷化し玉ふよしこまやかにきこえ侍る。旅といひ無常といひかなしさいふかぎりなく折節のたよりにまかせ、先一輪投机右のみ。

梅戀て卯花拜む泪かな

四月五日　　　　はせを

其角雅生

◇

明星やさくらさだめぬ山かつらと云し句、山中の美景にけをされ古き歌ともの信を感ぜし叙、明星の山かつらに明残るけしき此句のうらやましく覺候也。」

はせを

其角様

◇

いね〳〵と人にいはれても猶喰あらす旅のやどり、どこやら寒き居心を侘て、」

住つかぬ旅の心や置火燵

又埋火の消やらず臘月末京都を退出て、乙州が新宅に春を待て、」

人に家を買せて我は年忘

三日口を閉て題正月四日

笠平が分別のごとくことしは休にいたし候て歳旦思ひよらず候へば如此御座候。」

正月五日　　はせを

曲水様

◇

此處よりも愚墨進閣の處に先よりも預御音問忝御對顔の心地にて拜見仕候。愈御堅固に被成御坐候旨千萬目出度存候。竹助殿御さたいづれの御狀にも不被仰下候。御成人わるさ日々つのり可申と存候。御歳旦三ツ物の事は先書に具に申上候。愚句年々口にまかせ心にうかぶ斗に申捨候へ共是を歳旦の名殘にもやと存候て精を出し候所御耳に留り候へば甲斐ある心地せられて悦にたへず候。

一　幻住庵上書被仰付候由半珍重存候。うき世の沙汰少々遠きは此山の事と折々の寢覺難忘候。露命にかゝり候はゞ二たび薄雲の曙をと被存候。

一　風雅の道筋大かた世上三等に相見え候。點取に晝夜を盡し、勝負を爭ひ、道を見ずして走り廻

るものあり。彼等は風雅のうろたへものに似候得とも點者の妻子をはごくみ、店主の腹ふくらし候へばひが事せんには増りたるべし。又其身富貴にして目に立慰は世上を憚り人事いはんよりはと、日夜に二巻三巻點取、勝たるものもほこらず、負たるものもしひて怒らず、いざ又一巻などゝ又とりかゝり、線香五分の間に工夫をめぐらし、終に即點など興ずる事共偏に少年のよみがるたにひとし。されども料理を調へ、酒を飽迄にして貧なるものをたすけ、點者を肥しむる事是又道の建立の一筋なるべきか。又志をつとめ、情をなぐさめ、あながちに他の是非をとらず。これより實の道に入べき器なりなど、はるかに定家の骨を探り、西行の筋をたどり、樂天が腸を洗ひ、杜子が方寸に入べきやからわづかに都鄙かぞへて十の指をふさず。君も則此十の指たるべし、能々御つゝしみ御修行專一に存候。

一　路通事は大阪にて還俗致たるとの事推量致候。其志三年以前より見えたる事に候へば驚にたらず候とても西行能因がまねは成まじく候へば平常の人にて候。常の人が常の事をなす何の不審か可有御坐や。拙者において不通仕間敷候俗に成候て成共風雅のたすけに成り候半ばむかしの乞食より増り可申候。」

はせを

曲　水　様

壬申歳旦

人も見ぬ春や鏡のうらの梅

癸酉歳旦

年〳〵や猿に着せたる猿の面

◇

洒堂より書狀こし此度返翰共に遣し申候。いまだ御見舞にも不參候由沙汰のかぎりと申遣し候。

一　正秀がほとゝぎすの句驚入申候夏中物むつかしさに何方へも文通不仕候處此をのこ何事をさしはさみ候や書狀もくれ不申候。此方いたはりて書狀不越候哉其器量にも應じておもひ斗申候

一竹介殿御成人おそめ女御無事承度候

霜月一日　　はせを

曲　水　様

◇

比はむつきの末、御所の中を通る折ふし春雨のそぼふり、いとゞ心もゆたかにて、御殿〳〵の紅梅さかりなりければ、

紅梅や見ぬ戀作る玉簾

如此にすさび申候。さて〳〵極樂とは御所の中也。音樂の音のみ聞有がたく通りまゐらせ候。此等の句は俳連へも御傳可被下候取込早々以上

三日　　　　はせを

嵐雪丈

◇

いかにしてか便も無御坐、若は渡海の船や打われけん、病變やふりわきけんなど方寸を砕のみに候。されども名古屋の文に御無事の旨推量に見え申候拙者も霜月末南都祭禮見物して膳所へ出、越年、歳旦

薦を着て誰人います花の春

冬

初時雨猿も小蓑をほしげ也

山中に子共と遊ぶ

初雪や兎の皮の髭作れ

南都

雪悲しいつ大佛の瓦ふき

京にて鉢扣聞て

長嘯の墓もめぐるか鉢扣

歳暮

何に此師走の市に行鳥

急便早々に候。正二月之門伊賀へ御越待存候。宗七も御噂申斗に候。」

正月十七日　　はせを

万菊丸様

◇

昨日は御見廻申候て御痛之事共直々に御物語承先安堵致候。

一　此書狀加州金澤へ不叶用事申遣候。何卒被入御念上包貴様御名を御書被成候て御懇意の方へ御賴遣被返事參候樣に奉賴候。御家中の風俗居狀不居之由兼て承候間、貴樣上包に被成候て成程慥に奉賴候。少々急候間能樣に被仰遣可被下候且又鶯之句致候。發句も延引可致と存候得共興風所望に逢候て如此申候。

鶯や餅に糞する椽の先

日頃工夫之處にて御座候

猶々四五日中に又々委可申進候。先大阪へ出候を御しらせのため早々申殘候。

二月七日　　はせを

◇

夏より七月迄之御狀尤遲遲御座候へ共段々無相違相達し候久々伊賀に逗留故便も不致候。無御心元被存候。彌御無事に御勤御家内相替事無御座候哉承度存候おしめ祝言當月中ニテ可有御座と推量申候。定て御取込可被成候。定て首尾能相調可申と御左右待入候。

一　拙者先は無事に長の夏を暮し漸秋立候て頃日夜寒の比に移り候いかにも秋冬之間無恙暮し可申樣に覺候間少も御氣遣被成間敷候。追付參宮心懸られ候故先大坂へむけ出可申、去ル八日伊賀を立候て重陽の日南都を立、則其暮大阪え至候て酒堂方に旅宿、假に足をとゞめ候。名月は伊賀にて見申候。一發句は重て可懸御目候

菊の香やならには古き佛達

菊の香やならは幾代の男ぶり

びいと啼尻聲悲し夜の鹿

いまだ句體難定候。他見被成間敷候。追付爰元逗留の句共可懸御目候。早々御狀御こし可被成候。其元兩替町か駿河町酒店にて稻寺や十兵衞と申もの、爰元伊丹屋長兵衞店にて候間早々御左右承度候。子珊秋之集被催候哉左候はゞ爰元之俳諧一巻下し可申候上方筋別座敷炭俵にて色めきわたり候。兩集共手柄を見せ候少は桃隣にも師恩貴きすべをわきまへ候へと御申可被成候桃隣俳諧俄に替上てと專沙汰にて候、急便早々

九月十日　　はせを

杉風樣

◇

昨日は渡紙澤山御惠忝存候。然所昨夜惟然一宿例のむだ書剩筆の先棒になし困入申候。今四五枚申請度候此人に御こし可被下候。

杉風丈　　はせを

裾山や虹吐あとの夕つゝじ

◇

枕屏風むだ書いたし則御使へ相渡申候。襦半せんたく糊少々と御申付可被下候

杉風様　　　　　　　　　　　　　はせを

御ふくろ様

口上に書おとしけり土大根

◇

追て申入候其許より出來參候はん袋あまりそこね申候。今一ツあたらしくいたし度候大サ下地之通に賴入候。則古袋飛脚へ登せ申候。いづれにもよろしく賴入候。御内樣御せわに候へ共賴入候。依て一句

物ほしや袋のうちの月と花

いかゞ思し候や。當座間に合候間此句雜にて御座候。くはしき事は追々可申入候に

廿三日　　　　　　　　　　　　　はせを

杉風丈

◇

追て申まゐらせ候二三日以前任口に逢て一句

我衣にふし見の桃の雫せよ

此句申出候。其邊一兩輩へ御參會の刻御心得可被下候。呉々も本書頼入候。數々隨分はやく御調へ御下し可給候。取込早々以上

十一日　はせを

如水丈

◇

幸便啓上いかゞ被成候哉と御懐敷のみに候。御老母樣御内御子達御息才御入被成候哉承度奉存候。拙者舊冬甚寒殊外痛候へ共頃日は又々常之通に居申候間定て當年中には懸御目御事可有御座候。何とぞ

〳〵御堅固成様に被成今一度再會御待可被下候。拙者も随分保養致候て懸御目度存候加右衛門殿無恙御勤被成候哉。北鯤子御兄弟無事に候哉、承度奉存候。定て世事御くるしみ可被成と是又心をいたましめ候。御心得可被下候。

一　膳所の御親類中へも被仰遣候由御知人に御成可被成候よし被入御念候へ共去秋の比より膳所へもしか〳〵不参、大津京邊に遊び居候處いまだ不得御意、尤爲指用事も無御坐候故其通に致候。若御袋様などへの咄にも成可申候はゞ重て御目にかゝり下り可申候。以上

二月十三日　　芭　蕉

嵐　蘭　雅　丈

正秀、珍碩、探志へ御案内たのみ存候。今暮より御出候様に奉待候御内方様御子達風にても御引不被成候哉。」

◇

昨夜堅田より歸帆候愈御無爲に御連中相替事無御坐候哉。拙者散々風引候て蜑の苫屋に旅寝を佗て風

流さま〳〵の事共に御座候。」

病雁の夜寒に落て旅寝哉

蜑家は小海老にまじるいとゞ哉

と申候。京短尺やへ御状被遣て可被下候。明日上京致候間拙者見合能候はゞもとめ候て人々わけ可申候。千那尚白方にも太分入申候也。」

九月廿六日　　木曾塚より

芭蕉

茶や與次兵衛様

人々御中

◇

追て申入候。此度三度飛脚に申遣候事は京の勝手能存知候故指圖せられ候。からす丸通にていづれにても御誂御下可給候文庫再革にて覆共に頼入候。覆は竹屋町細工御誂頼入候料は書付御下し可給候。又

又飛脚に上せ可申候。扨俳諧もはやり申候。何を申してもけはしき所故しみ〴〵とは出來不申候。此程は愛宕の下へ參候二三會も興行有之江戸衆も上手になられよろこび申候。

はまぐりにけふは賣かつ若菜哉

右之句を元にして百韻いたし其節は其角なども參り候ておもしろくなぐさみ申候。貴丈事噂申出し候。猶追々可申入候。以上

廿二日　　はせを

秋風丈

おもふことふたつのけたる其あとは
花のみやこもゐなかなりけり

以上　　はせを

◇

今日賀茂迄人遣候故乍序申入候。其後は御無音如何御暮し候哉。此許不替居申候。扨は内々御咄被成

候北國の客來も于今見え不申候。是は學文之方に留被居候哉と存候。猶又貴樣方へ入來候はゞ可然賴入候。且又御約束之一句書入進申候。

山吹のほろ〳〵散か瀧の音

是はよし野にて致候句にて御座候。さして面白も無之候へども申進候。委は重々可申入候。以上

三月五日　　はせを

山子丈

◇

貴墨辱拜見、御無事之由珍重奉存候。其元滯留之内得閑談候て珍希申候。

一　愚其元にての句

辛崎の松は花より朧にて

と御覺可被下候。

山路來て何やらゆかしすみれ草

其後五三句も有之候得共重て可申候。

一 此秋此萩のあらそひ尤此道是非をあらそうも道のひとつにて御座候得共あながちに句論を好事悪意好しからず候間兼て能程に御爭ひ御尤候。

一 其角へ御狀重て返狀可仕候。嵐雪他國へ罷候間不及御報候。何やらかやらいまだ取込舊友久々咄共指つもり手透無御座候。貴報賴存候。

一 澁谷與茂作殿御堅固に相見え候。御手跡見覺候。以上

五月十二日

芭蕉桃青

千那貴僧

◇

名月も態御隙ニ被成御越可被成由、下りはまたいつとも難定候間名月過にもなる事可有御坐候。越人も如此發句致候

稗の穗の馬にがしたるけしき哉

愚句
ゐのしゝもともに吹るゝ野分かな

いかゞにや候。よきと申にては無御坐候。先懸御目に候加生越人挨拶

男ぶり水呑顔や秋の月

八月四日　　　　はせを

千那様

◇

名取川松島鹽かま見侍るに、繪師加右衛門といふもの、やさしきをかしき男にて、紺の染付の緒付たる草鞋二足はなむけにす。

あやめ草足にむすばん草鞋の緒

其後は久しく便も無之如何御暮候哉。愚老此間奥より歸り申候。所々に逗留候て一句ヅツいたし候。併大暑の時分故長途こまり入候。貴様など共道中せばおもしろき事にてあるべくと存候。京へ用事も

有之に付登り申度存候得共于今草臥やみ不申候。一日〳〵と延引に成候。今日は雲竹老より人參り候故次手ながら申入候。何事も近く懸御目可申承候。以上

十一日　　　　　　はせを

其谷　丈

◇

御芳翰辱染々拜見致候。御老母樣御内室御むす子御無事の由めでたく奉存候。拙者持病暖氣にしたがひ少ヅッ快氣候間可被下御安心候。

一　乙洲江戸立候に付跡の事御情に可被入旨乙州方より申越鐵のたてをつきならべ候。拙者も安堵よろこび難盡候。

一　歌仙扨〳〵感吟仕申候。かほどまで獨はたらき大切の風雅驚入申候。則付墨致候。乍去爰元にても人々取付候て此返事之内も同名の茅屋ほこりの中へ大勢入込候に御報も批判もしみ〳〵ならず候。疎なる所は御免被成可被下候。」

一　同名方へ御手に被懸候清茶一袋さかな一種被遣毎々忝御厚志難盡候。茶拙者賞翫いたし候。

一　粟津草庵之事先は御親切の至忝存候。兎角拙者浮雲無住の境界大望故如此漂泊いたし候間其心に叶ひ候樣に御取捺奉頼候。必是につながれ心をうつし過ざるやうの事ならばいかやう共御差圖可然候しばらく足のとゞまる所は蜘蛛のあみの風の間にと存候へば足駄の藏も藏ならず候。流石の御人々申もくどくど候得共打まかせ候。

一　風雅此頃盛に思召候よし尤さこそと被存候。通俗の人さへもて遊び候ものを隨分御精御出し可被成候。及老肩右之段御傳可被下候。一傳仕度候。何角取重候間先々早筆申殘候。以上。

二月十九日　　芭蕉

正秀雅丈

蘭更著述之蕉翁消息集には右〇の個所に前書畧して左の文あり。

ふるさとのこのかみが園中に三草の種をもりて、

春雨や二葉にもゆる茄子種

此種とおもひこなさじとうがらし

芋種や花の盛りを賣ありく

口に出るまゝ申つゞけ候。御秀作御ゆかしく存候。」

三月廿三日　　　　　　　　　　はせを

嵐雪すゝ

右の如くありて一風雅云々より下の文なし。編者按ずるに右の文中に乙州が江戸へ出る事、又粟津の草庵のことなどあるは正秀への消息なる事疑なし。正秀は膳所の人なればなり。嵐雪は淡州の產なれども江戸住居の人也。是は二通の消息を書寫混じて一通としたるものなるべし。」

◇

夜前はとつかりと米貳斗定家が力の程を見せんとて石を五ツに打わられ候。炭薪さまざま被懸御意不淺隨分打寄賞翫可致候。脇珍重第三御廻し可被成候。」

一　此柿少堅田より庭前もぎたて到來候間おくめ殿へ進られ可被下候

壬八月十日　　　　　　　　芭蕉

正秀様

◇

「(前文略) 何とやらかとやら、行先〳〵の日のつもりちかひ、秋も名殘のやう〳〵紙子をもらふ時節になりて、紙子はいまだもらはず。只時雨のみ催し(以下文略)」

菊に出て奈良と難波は宵月夜

又酒堂が予が枕もとに鼾をかきしを

床に來て鼾に入るやきり〴〵す

又十三日住吉の市に詣て一合升ひとつかひ申候てかく申捨候。」

升かふて分別かはる月見かな

九月廿五日　　　　　　　　はせを

正秀様

◇

去來方へ人遣候に付乍序申入候。彌御堅固珍重不過之候。御手本の風儀に隨分認見申候へ共下地が無器用もの故うつり兼申候。御直し可被下候。然ば時鳥のほ句之事被仰候。仍て

ほとゝぎす正月は梅の花さけり

あまりよろしくも無御坐候へ共御尋にまかせ申入候。又々よろしき句も出候はゞ追て可申入候。取込麁書御免可被下候。

九日　　はせを

北雲竹様

◇

寶壽院と申僧今日上京に付申上候。彌御別條無之哉承度候。扨は先比御賴申上候額字出來候はゞ此付

へ御渡被下度候。委細は御咄可被申上候。扨々御世話に奉存候。さて又内々御頼申上候千字文來月中に御出來被下候樣内々御心懸奉賴候。先樣より便の度每せがみ遣候。此中口すさび申一句

時鳥鳴音やふるき硯箱

いかゞ思召候哉をかしく被存候。近く參候て可得御意候。以上

十一日　はせを

北向雲竹樣

◇

「(翁より去來への消息)」

爰元度々會御坐候得共いまだかるみに移りかね、じふ〱の俳諧散々の句のみ出候て迷惑いたし候。此中脇いたし候間懸御目候。

折〱や雨戸にさはる荻の聲　雪芝

放す處にをらぬ松虫　芭蕉

◇

月をわび身を侘つたなきをわびてわぶとこたへんとすれど問ふ人もなし。猶わび〳〵して

わびてすめ月侘齋かなら茶歌

九月十九日　　　　はせを

去來様

◇

一　石清水瀧本坊法印の許へある在家よりなた豆一籠おくりければ其返事に

辨慶が七ッ道具のなた豆は日本一のがうのもの哉

さて〳〵おもしろき狂歌中々及がたき事に思ひ侍る。しかも我も一句をせんとて狂歌の心をもちて、

辨慶は夏もかみこの羽織哉

これ精一ぱいにて候。むかしの人の口心には叶ひがたく候。かしく

はせを

◇

一　近日芳野行脚存立候間金子二歩御かし可給候。おしつけ貰ひ溜返濟可申候。されど我等事に候へば得なす間敷も候。以上

はせを

去來様

◇

今日宇治へ參候。貫丈にも御出被成まじく候哉。此元仙水にも參候筈約束申候。大阪よりうちへ直ぐニ杉風杯も被參候様に申來候。貫丈に御出候へば件の方勝手よく御存故一入に存候。愚老は此中上村三入老所にて一句申候。

ほたる見や船頭醉ふておほつかな

右之句にて御座候。野坡丈へは貴丈より御申越可被下候。此中は手しびれ候故筆跡も麁末に認候披御免候。以上

卯月廿一日　　　　　　はせを

去來丈

◇

前日は寛々閑談不淺存候。然ば其角も一兩日中には東武へ歸國申候。左候はゞ今夕餞別之一會いたし度候條丈草など被仰合暮前より御來駕待入候。

長月十一日　　　　　　はせを

落柿舍主人

尙々今朝の吟御目にかけ申候。

しら露もこぼさぬ萩のうねり哉

古庵や寢さす起さす萩の花　　　其角

◇

池魚の炎承り我も甲斐の山ざとにひきうつりさま〲苦勞いたし候へば御難儀之程察し申候。されどもやけにけりの御秀作かゝるときに望み大丈夫感心去來丈草も御作驚き申斗に御座候。名歌を命にかへたる古人も候へばかゝる名句に御替被成候へばさのみをしかるまじと存候。知音たれ〲此度の難にまぬがれずや連中たしかなる事不承候間短紙も不遣候。よく御傳達可被下候。以上

四日廿四日　　はせを

北枝丈

◇

此君會より白米五斗發句一句

一に俵ふまへて越せよとしの坂

かくめぐみたまふに只四壁なるかりのすまゐには過たるとしだまながら寢ざめのこゝろよくて

元日や疊の上に米俵　北枝

翁文の中

さて／＼感心不斜、神代のこともおもはるゝといひける句の下にたゝんことかたく候。神代の句は守武神主身分相應に情の奇なるところ御座候。米俵は其元相應に姿の妙なるところ有之候。別て歳旦歳暮不相應なるは名句にても感慨なきものに候。今年天下第一の歳旦可成と京大津の作者も致稱美候。

不備

正月廿四日　はせを

北枝様

誰人か菰着ていますゝ花の春

何人かともいかゞ御評待入申候

菰を着てたれ人いますとも

◇

「（前文略） 附合十七體別紙に記進候。初心には見せ申されまじく候。術のかなはぬ内に此味をつけんといたし却て一句もとゝなはず附意もしれぬ事に成ものに候。又むつかしきもの也。かゝる味はとてもかなふまじと退く人もあるものにて術味ひ候後に扱ひ候へば一巻のはこび甚むづかしきところにて人のつけなづみたるを或は響或は情などにて起して付て變化おもしろく成申候。さもなき人はうちこし三句を恐れてつまる所はいつも〳〵逃句のみいたし候は初心に見え候。功者おこして二三句も附たる上にむりに付るゝ炎天に砂道をたどるごとくなるものに候。能々御考御被成候はゞ鬼に鐵棒にて可有之。門人のうちにも五七人ならでさたいたし不申候。名高くても附合の術さほどになき人却て迷ひ可申と存じ候故に候かくし申にては無御座候十七體を得たる上千變萬化の術を得る事に候。只つくとつかぬといふこと斗知て附合は千變萬化と口にていふ人御坐候。をかしく候。十七體の法も知らずして何とて千變萬化の働が出來可申哉。百韻千句に及びても附心一二體を出不申候。しりたるものは笑ひ候。小器ははやくみつる輩多くのちには人々あけて通し相手にならず只四五人同心の連中にて互に他をそしり高慢になり陰にては俳諧氣違ひなどゝ名をつけられ候もあさましく候。御連中よろづ御しめし可被成候。

はせを

六月二十七日

北枝様

結ぶよりまづ歯にひゞく清水哉

◇

(前文略) 一 松岡茶店にての句、物書て扇引さく別哉と直し申候。脇てには留にて候。てには留は脇にては草にて神紙追善祝儀本式はいかい貴人の挨拶すべて我より上たる人のほ句にはせぬ事に候。我も只今にては其元の師に候間挨拶の脇てには留はよろしからず候外より彼是申もの御座候ては兩人ともにふつゝかには見え申候。山中間答にも三ツ物之事御尋なく我も心付不申候。此度委三ツ物傳別紙にて申入候。是にて第三文字留草の事も能わかり申候。山中問答へ御書加へ可被成候。去來丈草凡兆正秀なども門答見たがり申候。脇付替り候はゞ第三四句め付て可進候。御望の兩吟初可申候。春は西國望の御座候間冬中調へ申度候。されども伊賀へ用事も御座候間伊賀を先に可致も難斗候。ちと親類内用にて捨がたき事に御座候。伊賀便次第に心得可申候。西國へは何とぞ同行に致度候間其御心得頼

入候。左樣に候へば兩吟急ぎ申事もなく候。二十六七年以前太宰府へ參詣いたし候。外連中貳人我と三人にて歩行候へども知音もなく候て見物所斗尋歸候。宗房時分の事に候得ば所々發句留候へどもをかしからず。とゝのはぬ事而已にて一句も咄事なく候間此段は吟じ直し度存念に候。其許同行においては十人にまさりちからを得候事に候間決定の御返事待入候。又々問答可致候。萬子牧童秋の坊句空小春などの英雄へもよく〳〵御達したのみ存候不具

十月十三日　はせを

北枝樣

◇

今日長次郎殿京へ被參候に付ちよと斗申入候。其後は御遠々敷存候。彌無故障御入候哉と押斗存候。愚身も無事に暮申候。扨は内々御賴置候物共最早此節出來可申候哉と存候。急々御下し賴入存候。先方にも見たがり被申候。何分はやく被遣可被下候。祭も段々近寄候故せくも尤に候。在邊之事故度々言傳に申參候。扨又此間綱代民部の息に逢て

梅の木に猶やどり木や梅の花

此句挨拶に致候故貴樣迄申入候。扨客來多取込早々以上

二十一日　　桃青

左柳丈

返〻よろしき樣御沙汰可被下候。以上

◇

此間は預御狀候處折節勢田へ參居候に不能卽答非本意存候。彌御堅固御勤仕之旨珍重存候。然ば御門主樣御尋之由にては句之事被仰置候。さのみ替りたる句にても無御座候得共御意にまかせ申上候。

水鼻に誠見せけり御取越

如此御座候。今日幸之便御座候ゆゑ此中之御報旁如此候。猶委き事は御下りの時分ゆる〻と可申承候。愚庵へも時ならず客來候て麁書以及御報候。恐惶謹言

極三日　　はせを

明石主水様

◇

昨日は素堂杉風へ御出會之由庵にても其角と御噂申候。且ほ句仰にまかせ懸御目候。くれ〴〵御息女様御書寫心不少候。早々

菊鶏頭きりつくしけり御影講　はせを

市之丞様

◇

保生佐太夫三吟に

老の名の有ともしらで四十から

少將尼の歌の餘情にて候

素堂菊園に遊びて

菊の香や庭にきれたる沓の底

野坡と云もの四吟に

金屏の松の古さよ冬籠

猶廣く他見被成間敷候。追付俳諧など可懸御目候。乍去當冬は相手になるべきもの無御座候得ば俳諧も成申間敷候。廣き江戸に相手のなきも氣之毒に存候。當方無恙五句付點取脾の臓を揉ム體に候。此脾の臓もみ破りたらん後初て俳諧はやり可申候。いつ方へも久々絶書音、膳所へ連状一通、此状のみに大垣大阪へもいまだ初夏より返簡不致候。落字文章之前後はゆづり候て御披見可被下候。當年めきと草臥増り候。上方邊縮色紙いまだ調不申候。重て可申遣候。將亦此度石摺大色紙四枚被懸御意忝折節屏風入用にて別て喜び申候。五老井の小豆も日やけにあひ可申候。煎茶可被下之由遲くもくるしからず候能使宜少々可被懸御意候。頃日あへ茶にも給飽申候。以上

十月九日　　　　はせを

許六雅丈

◇

此中は御待被下候處近在へ參りて御目にかゝらず殘念不少候。扨は貴樣にも近々田舍へ御下向之由段々寒氣に赴候て御苦身千萬に存候。隨分御達者に頓て〳〵御上京待まゐらせ候。然ば發句之事御申置候。彼方へ御見やげに成候樣よろしき句も無之候へ共御申置ゆゑ此句申進候。」

馬方はしらじ時雨の大井川

如此御座いかゞ候哉。猶跡より追々可申承候かしこ

十月廿二日　　はせを

伯水丈

◇

何某新八去年の春身まかりけるを父梅丸子のもとへ申遣し侍る

梅が香に昔の一字あはれなり　　武陵芭蕉

二歳の夢のごとくにして猶彷彿立さらぬ歎のほど思ひやる斗に候。

二月十三日

梅丸老人

◇

乍御報以手紙申入候。彌御別條無御座候哉承度存候。此元不替居申候。然ば先日は思召寄候て珍敷一袋送被下折節濃州より容來候間すぐにもてなし別て賞味不淺忝存候。御物語にも御禮御申入可給候。且又度々の御無心に候得共檜木笠一かいいつも之通成を御調御下し可給候。殊之外やぶれ候間あまりあまり見苦く候間はやく御越可被下候。近々に宮の方へ參候に付急にほしく存候。近頃御世話に候へ共頼入候。此一包其角へ御屆可被下候。用事申遣候間片時も早く頼入候。何事も貴面候。已上

九月十二日　　はせを

本屋喜右衛門様

◇

時鳥聲横たふや水の上

一聲の江に横ふやほとゝぎす

水光接天白露江に横たふの字眼なるべし、ふたつの作何れにやと推稿難定所に水間氏沾徳と云もの訪ひ來れるに、かれ物定のはかせとなれと兩句評を乞。沾徳云、横江の句文に對して考之時は句量尤いみじかるべければとも江の字拔て水の上とくつろげたる句のにほひよろしき方に思ひつくべきの條申出候。とかくする內に山口素堂原安適など詩歌のすきもの共入來て水の上の聲よろしきに定りて事やみぬ。させる事なき句ながら白露横江といふ奇文を味合候。御覽可被下候。

はせを

荊口丈

◇

前略

一　桃隣如何被相勤候哉。暑氣之節短夜と云會も心のまゝに成申間敷候。杉風子珊心にたがはざる樣に實を御つとめ候へと御申可被成候。京都俳諧師五句付の事に付閉門俳諧沙汰ひつしりと蛭に鹽かけたる樣に候。然に段々拙者口から申上せ候も氣の毒故不具候ケ樣之所只實を不勤故と合點を致しむざとしたる出會等心得可有旨桃隣へ御物語可被成候。

一　此方京大阪貧乏子共かけあつまり日々宿を喰つぶし大笑致くらし申候。

中略

一　壽貞不仕合ものまさ、おふう同じく不仕合とかく難申盡候。好齋老へ別紙可申上候得共急便候間此書狀一所に御覽被下候樣に賴存候。萬事御肝煎御精御出しの段先書にも申來忝誠にふしぎの緣に候此御人賴置候もケ樣に可有端と被存候。何事も々々夢まぼろしの世界一言理くつは無之候。ともかくも能樣に御はからひ可被成候。理兵衞もうろたへ可申候間とくと氣をしづめさせ取亂不申樣に御しめし可被成候。以上

六　月　八　日　　　　　　　　　　　　桃　青

猪　兵　衛　様

一本ニハ〇印ヨリ下ノ文ナク左ノ通アリ兩通相混ジタルモノナラン乎

一　市之進殿御無事候哉然可御意得賴入存候。

一　理兵衛細工無之時分せめて煩不申樣に氣を可被付候。

右之通壽貞にも御申聞可被下候。おふう夏かけて無事候哉。具に樣子御申越可被成候。」

一　宗波老庄兵衛殿へも御心得可被成候。定て好齋老不絕御見舞可被下と存事候。追て書狀可得御意候。以上

六　月　三　日　　　　桃　　青

猪　兵　衛　様

◇

當月十六日加茂へ參、平兵衛に一宿、御袋樣源兵衛殿あねごなどへ逢申、御袋御無事に御入候、されども四年以前よりはよほど年も御寄耳も遠く御成候。あねごとふたり貴樣事のみくとくかへす〴〵逢申

度由被申難儀致候。則平兵衛殿書狀相居候。委は跡より可申進候
十六日好齋老となら茶にて御出會の由御なつかしく候。好齋老へも此度狀數多く候間延引重て可申達候。御心得被成下可。深川の樣子具に重て御申越可被下候。

一　二郎兵衛道中達者にて拙者苦勞にもなり不申能つとめ申候。

壬五月廿一日　　はせを

猪兵衛樣

支考へ返書元錄　七壬五月翁ハ嵯峨ニアリ　支考ハ下京ニアリ

されと與風此間存知出たる去來武府脚半をわすれ候脚半の事にて季をさため可申也

二種被懸芳情旅店之一德珍重不淺賞味申候。今日去來きせるの掃除去來一世の初たる持きせるの掃除閏五月と季を定め候折節に貴價音信是又閏五月の季を定候間尙後左樣御定可被成候晚方御入來所仰に候。

廿三日　　はせを

支考文

覺

一　もち米　一升

一　黒豆　一升

一　あられ　見合

右今夕會の夜食に成申候間御いらせ傳吉にもたせ御こし可被下候。茶は一森三井寺より澤山もらひ申候。貴様にも早々御出まち入候。」

十八日　　はせを

喜八様

◇

山頭月桂雲門餅

屋後松煎超州茶

佛法は障子のひきてみねの松　火打ふくろに鶯のこゑ

此心をもて俳諧の變化をしるべしと許六が去人の示し候由。また惟然がたばこ呑まぬ傾城と菓子くはぬ俳諧師はすきなものとはしがきして

ちり塚や鶯あさる聲のひま

あまりをかしく書とめ懸御目申候

十六日　桃青

浪化様

口上

此頃は俳諧殊之外不出來に候得共御望にまかせ寫し進上いたし候。尤其角が無分別なる所中々及ぶべからずとみなく〱驚申事に候。

廿二日　はせを

仁兵衛様

暮遲き四谷過けり紙草履

◇

初がつを御振舞被下候由かゝる隱居の似合しからず候得共おもと殿御志追付參上

桃　青

太右衛門樣

又越む佐夜の中山はつ松魚

◇

二白　俳諧御執心之由先は珍重物しりにならんより心の俳諧肝要に御座候。句者は澤山御座候得共心法を守る人はまれ〳〵なるものにて候。

一　季よせの御不審御尤に候。愚老は此事にうとく候儘考跡より可申入候。増山井御用可然候。

十　七　日

はせを

晩山様

子規なくや黑戶の濱ひさし

◇

曲水子の書狀御もたせ被下辱候。是は去來が指圖と相聞へ申候間只そのまゝにて可置候。支考申處一理御座候條愚老も同心仕候。委は後刻（本書ニハ是ヨリ無ク後文モ宛名モ見當ラズ）

◇

傘下駄御もたせ被下御世話辱存候。蚊幬鼠に喰れ申候。おまきに御縫せ可被下候。燒跡蚤蚊多く殊之外朝寢仕候。

七日　　　はせを

三石様

◇

新麥一升等三本油のやうな酒五升といふは富貴の沙汰なり、蕎麥一重小遣錢二百文忝ぞんじまゐらせ候。（本書ニハ宛名見當ラズ）

水油なくて寢る夜や窓の月

◇

口上

此間御咄申置候通勤學院古瓦硯之銘足下其角愚老三人と一軸に認ほしき由一兩日中に御書可被下候且又京都御靈神社小栗栖大炊頭七十之賀是は御詩作賴來候。兼て御存のごとく醍醐内大臣樣御門弟にて和歌も出來申候委は期拜顏候。

廿四日　芭蕉

素堂先生

◇

一　御俳諧よくぞおもひ切て長々敷物を點被仰越候。乍去餘り感心見るも面白く判詞不覺手の舞足の踏事をしらず候ヶ程上達存もよらず、凡天下の俳諧にて御座候間隨分御敬候て御はげみ可被成候。秋登り候はゞ一板行とすゝみ候處に根深き句ども見え申候て天晴御作愚老僻耳投筆斗に御座候。句評の事點は相違有物にて御座候。其段常の事ながら其元にて俤ある事爰元にては新敷其地にて珍しき句此地にては類作有樣の事も御座候物に候へば句評は心にたがふ事も可有御座候。和歌の三神前後の點數かぞへ見不申候。いづれの勝負しらず候。此所において指南一言も無御座候。只自是行先大切に御座候間態々御心をめぐらし御工案御尤存候。句作に作をこしらへ句毎に景をのみ好み候はゞ頓て古く成べく候。めづらし過候はば飽心出可申。こしやくに成候はゞ後句石で手をつめたるやうになるべし。俳諧地をよく御つゞけ被成處々風景句作ほのか成やうにあれかしと此後の事を被存るゝのみに御座候。此外申事無御座候へど不具頓首

三月十四日　　　　　　　　　　　　芭蕉庵桃青

東藤子雅丈

相葉子雅丈

◇

何處持參之芳翰落手、御無事之旨珍重存候。類火難に御のがれ候よし是又御仕合難申盡候。殘生いまだ漂泊やまず湖水のほとりに夏をいとひ候。猶うら風に身をまかすべきやと秋立頃を待かけ候。且雨御句珍重中にもせりうりの十錢生涯かろき程我が世間に似たれば感慨不少候。口質他に趙ていよいよ風情可被懸御心愚句

京にても京なつかしやほとゝぎす

暑氣に痛候て及早筆候

季夏廿日　　　　　　はせを

小春雅丈

逍遙遊

道に逍遙の二字ある事は心に天遊ありて世をおもしろからむといふ事也。天はこれを得て月清く地は

是を得て花咲り。鳶と魚とはひらめきて遊ぶもの也。野馬は風にうかれて遊ぶものを草くふ牛の飽までしづかなる、虻はその尾にあそばんとすれば、うしのぬしはとまらせてうたん事を思ふ。はたとうたれてかなしからんは遊ぶ時の心にかへよ。そのぬしの牛にはじかれてふたつなき鼻のかけたるためしもあらんに、すべて遊ぶ事は先にしてくるしむことはのち也。誰か遊んでくるしまさらん。くるしまずして遊ぶ人は世にありて何人ぞや。世に實あり虛あり。實にあそぶ人は虛にくるしむ。たれか實なく虛にすゝむ人はある時のあるにそいとゞくるしむべき。虛に實有、實に虛あらば虛實は虛にして自在なるべし。むかし莊周が夢に胡蝶と遊びしも、觀音の花によめ入せられしも、もとより虛をもて虛をとかねばまして實をもて實をとかず。かゝる聖人の虛をさしていまの人もいふてあそばざらむや。此故に春になりては川狩に遊ぶ茸狩の時は浪人をあそばしめ、鷹狩の時には大名を遊ばしむ。寔よく天の遊ぶものにして貴賤貧福は人のくるしみなり。

前　略

一　逍遙遊先書は反古に可被成候。書直し進候。我もこれに遊ぶものに候へばふかくくるしみも候はず候ゆゑおもしろき事なく候。御やくそくの茶はいかゞに候や待申候。以上

三月廿日　　　　はせを

惟然文

◇

御手翰辱拜見、夜前は得閑談珍重不少候。明日御立可被成之旨後刻貴面御相談可仕候。追付御入來是にて御ねころび可被成候。像讃の義發句珍しからず難儀仕候。ケ樣の事にてもかき付可申や。」

秋の色ぬかみそ壺もなかりけり

しづかさやゑかゝる壁のきり〴〵す

御用捨なく可被下仰候。同じくは御免外に白紙に思ふ事書進上申度候。以上

即時　　　　芭蕉末

句空社兄参る

◇

乙州上津の節御細翰忝存候。其元大雪の由一尺斗は此方へ申請度候。愈御無事に御勤被成候哉。拙者持病〳〵とのみ顔しがめたる斗に御座候。歳旦等いかなる風流にて御座候哉。此方年〳〵のこと故當春は非番にいたしたれせつく者も無御座候。是迄色々の骨折さへくやしき事に覺え候。貴樣集之事不埒候樣に御思ひ候半と氣之毒に被存候以結句空借まで申達候間御内談可被成候。何とぞ暮春の初は上京と存候。頃日寒氣故持病散々神以氣分重く御座候て早々如此御座候。牧童へ可然御心得なされ可被下候。以上(宛名なけれど北枝への消息なるべし)

正月三日　　芭蕉

追て書

其許にて書申候物は御燒不被成候よし米櫃はやけ可申候と存候。此度一二枚は書遣申候。急々書候て例之通見ぐるしく候。以上

◇

一(前後略) 然ば御約束之水鷄笛送給忝珍重存候。此さとひ人々聞馴ず女子ども〻集り我れな藝者の樣

に申をかしく候。行脚さき國ところにより一向音をしらぬ人御座候間吹てきかせ可申と悅申候。鷹笛も木曾よりもらひ申候。ほとゝぎす笛も御ざ候はゞほしきものに候。水雞笛つくる人はつくるべくと存候。乍御面倒是も御きゝ可被下候。出來候はゞ御賴可被下賴入申候。何にても相應望みのもの細工人へ謝禮いたすべく候。殺生の道具ながら水雞笛しか笛も只ふくはをかしく、はつかりの聲、水雞のたゝくなど歌にも發句にもつくる人のさし竿にてとりあみにかけなどいたし候は口と心と相違にて名句吐候ともうそつきといふものに候へばまことの風人からみればあはれなる事にてたとへころさずとても雲に飛地にはしり候鳥をちさき籠に入れたのしみとなすは牢番も同じ事にて候を心つかず籠をならべこれは二兩の駒鳥也。これは五兩の鶯なりといひて摺餌に小袖の肌おしぬぎ高祿の人にもあさましきさまする人武林連中には有ものに候。かの開籠放白鶴の詩意など教訓可被成候。伊賀の家山の人々にも御坐候間土芳にも此事度々申遣候。

うぐひすや餅に糞する椽の先

二月十六日　　　　芭蕉庵

一笑様

又武士は殺生するものなりといふ人御坐候得共魚鳥をとり候か腕かためにもなり申間敷候。只こゝろのいやしき故に候。それ〴〵の獵師御坐候間これより買もとめ料理候事はつゝみにあるまじく候。」

◇

隱士秋之坊閑居御訪珍敷得芳意大慶仕候。先以御細翰忝候。御無事に候旨珍重不過之候。去年頃日はさかりと其元に罷在候。一とせの變化夢のごとくにて一入御なつかしく被存候。大火の跡いまだ萬々御心も靜なるまじく候。されども頃日は乙州參候て又々會なども少々御坐候由愈御はげみ可被成候。世間ともに古び候より少々愚案も工夫有之候て心を盡し申候。其段粗乙州も心得申候間御はなし可被成候。拙者義山庵秋至り候ては雲霧に痛候て病氣にさはり候故近日出庵いたし名月過にはいづかたへなりとも風にまかせ可申と存候。乍去去年遠路につかれ候て下血など度々はしり迷惑致候て遠境羇旅不叶候間東の方ちかくへそろ〳〵とたどり可申とも存候。無常迅速の妙も御坐候はゞ又々重て得御意候事も可有御座候。隨分御無事に御勤可被成候。諸善諸惡皆生涯の事のみ何事も〳〵御樂可被成。少にてもむづかしく候て早々及貴報候。」

七月十七日　　　　　　　　　　　　　　　　　はせを

牧童様

◇

一愚句御覽被成候由させる事も無御座候へども出申候は無事の有所をしらせん爲に板木に写し候。是一ッは京の門人去來などいふものにそゝなかされて申出候。五百年來のむかし西行の選集抄に多く〳〵乞食をあげられ候に愚眼故能人見付ざる悲しさに二度西上人と思ひかへしたる迄に御座候。來の者ど(前後文長けれども畧之編者)もはこもかふりを引付の巻故に何事にやと申由あさましく候。

卯月十日　　　　　　　　　　　　はせを

此筋丈

千川丈

たれ人か菰着ています花の春

◇

七月頃いづ方やらの便りに御狀到來愈御無事に御入被成候哉。卓袋が赤味噌のとろゝ汁もなつかしく相成候。京屋ぬき味專くはるゝ時節に相成候、於客人殿息災に御座候哉。御噂賴候。

一　車坂屋上の方に草庵御結被成候に付號付可申よし則存寄候間書付申候。東之方藪際に古家

東　麓　庵

新庵定て西の方に附可申候と是

西　麓　庵

でかしたる樣に覺え申候。土芳に御物ずき御究させ可被下候。御氣に不入候はゞ又改可申候。」

俳諧いかが被成候哉。土芳無油斷被勤候樣に御傳可被成候。」

聲枯て猿の歯白し峰の月　　其角
（只今愚庵に居候）

鷄や榾燃夜の火のあかり　　珍碩

鹽鯛の歯ぐきも寒し魚の店　　愚句

取紛候て早筆、卓袋參候はば御かたし可被下候。さても人にまぎらされ心隙無御坐候。

極月三日　　　　　　はせを

意專樣

遺狀

一　伊兵衛に申候。當年は壽貞事に竹色々御骨折面談に御禮と存候處無是非事に候。殘り候二人のもの共十方を失ひうろたへ可申好齋老など御相談被成可然了簡可有候。」

一　好齋老よろづ御懇切生前死後難忘候。

一　榮順尼彈可坊情ふかきく御人也面上に御禮不申殘念之事に存候。」

一　貴樣病氣御養生隨分御勉可有候。

一　桃隣へ申候。再會不叶可被力落候。彌杉風子珊八草子よろづ御投懸兎も角も一日暮しと可存候。

元祿七年十月

支考此度前働驚深切實を被盡候。此段賴存候。庵の佛は則出家の事に候。可遣候。」

はせを印

◇

一　杉風へ申入候。永々御厚志死後迄難忘存候。不慮なる所にて相果御暇乞も不申無是非事に候。彌風雅御勉老後御樂に可被成候。

一　渦子へ申入候。永々御厚情生前死後難忘存候。御内室樣貴樣にも不相替御念之段忝存候。不慮なる所にて相果御暇乞も不申無是非事に候。彌風雅御すゝみ老後早く御樂に可被成候。

一　嵐雪を始として門人方不殘御暇乞申候。俳諧は老後の樂と申事彌御忘有間敷候。其角は此方に參居申され候。

元祿七年十月　　はせを印

◇

御先に立候段殘念に可被思召候。如何樣とも又右衛門便に被成御年寄御心靜に御臨終可被成候。こゝ

に至申上事無御座候。市之丞次左衛門殿意専老をはじめ不残御心得奉賴候。中にも十左衛門殿半左殿右の通に候。はゝ様およし力落し可申候。」

十月十日　　桃青

松尾半左衛門様

新蔵は誠に骨折被忝候。」

遺物一

一　三月日記　　伊賀ニ有

一　發句書本　　同所

一　埋木　　半殘方に有

一　新式書入

是は杉風へ可被遣候。落字等有之本寫にて可被考候。支考も可被寫候。」

一　文章反古等

右は杉風方に有之文章之草稿は支考可被爲點檢候。

一 羽洲岸本氏之發句炭俵集に紛入候。公羽と翁との違にて可有之候。杉風より御斷り頼入候。」

一 猿蓑の内座頭引直し

一 古今の序傳百人一首の秘聞抄是は支考へ可被遣候。」

元祿七年十月　はせを印

（以下の消息は一葉集にのみ出て他に見えざるもの也編者言）

◇

追て申入まゐらせ候。其許に逗留中に淸草御歸りに御約束申候。短册此度遣し申度存候へつれども二三度ばかり認め申候處さんぐ〳〵ふ出來見苦しく候故其元へ御出若御尋候はゞ此段申達可被下候。何方へもたんざく御めし被下候樣申事に候。我等手跡にては及がたく候。發句は書入進申候。

わすれ草菜飯に摘ん年のくれ

如此に御座候。態々御申可被下候。又重て宜しく出來候はゞ其節進じ申候。以上

廿二日　はせを

追て申進候。日外御御尋被成候松しま行脚の春發句之事失念風斗存出し候故乍延こ申進候。

◇

草の家と住替る世はひなの家

ゆく春や鳥啼魚の目は涙

此發句にて御ざ候。偖て延引之段如在之儀に存候。御免可被下候。猶委は頓て可参候て万々可申入候。以上

卯月廿二日　はせを

風流　丈

◇

栁かふて分別替る月見かな

右之句申入候。處々に參候へどもさして是と申ほどの句も出來不申候。またも此句かと存候故申まゐらせ候。これより直にはりま路に參りて來月末に歸り申候。其許連中へもよろしき樣に御心得可給候。旅宿故あらく申入候。かしこ

十八日　はせを

如行丈

◇

只今田舍より僧達二三人參候。俄に出し可申候貯無之候。さぶく候故にうめんいたし可申候。そうめんは澤山有之候。酒二升御こし賴入候。さかなはつぶ納豆茶碗に入貴樣御出にて世話賴入申候。其次手に引合せ可申候。はやく御出まち入候。

二日　はせな

かふじや茂作樣

◇

尾の露川方より宮重もらひ申候。今夕御出にて御料理なされべく候。此旨丈草へも御つたへ可被下候。

六日　　　　　　　　　　はせを

三十里尾張大根のはなしかな

又

落葉してぬかみそ桶もなかりけり

味噌は御持參可被成候。（宛名無し編者言）

◇

自尾州廿二日に御歸りの由被越仰候。先はそく才にてめで度候。道の記御認御遣し一覽候。いづれも出來申候。信濃路にて二三句は別てよろしく候。

雪ちるや穗屋のすゝきの刈殘し

此句類なく人々愚老句より貴樣の句上になり候と申候。委は面談とあなかしこ

廿日　　はせを

信分丈

◇

度々預貴墨候へ共持病あまり氣むづかしく不能御報候。昨夜よりも出候名月散々草臥發句もしか〲案じ不申候。明りもえ出不申候。木曾塚にてふせりながら人々に對面いたし候。各發句有之候。」

月見する坐に美しき顔もなし

なき同前の仕合にて候。當河原涼の句其元にて出かゝり候を終に物にならず打捨候を又取出し候。御覧可被成候。

川風やうす柿着たる夕すゞみ

職人のてしこ感心仕候。落書もことの外御出かし被成候。少し氣むづかしく候故早々申上候。」

十八日　　はせを

加生様

去來子より御左右無御座候。御病見いかゞやと無心許被存候。

◇

笹岡五郎右どの御上京に付ちよと申入候。愈御家内御かはりも有まじくと押はかり申候。だん〳〵碁に罷成候て愚老などしのぎかね申候貴樣には精分つよくさほどにもあるまじくとうらやましく存候。

何ぞ宜句出候哉。うけ給り度候。然者盤齋背向像に一句

團もてあふがん人のうしろつき

此句致し遣し寺町の秋田屋方へ表具を頼みに人遣しくれ候。貴樣にも秋田屋事御近付に候間今日之内に御出候て御尋可被下候。とかく樣子はやく見申度候。さて又貴樣方いつぞやの十二枚のまくりの繪其まゝにて御指置候哉。もし御勝手に入不申候はゞ所望の人有之候間御下し可被成候。せたの人ほしがり申候。兩用共樣子御申越可被下候。取込早々

十三日　桃青

初休丈

◇

尙々御老母樣可有御堅固奉存候。とやかく申内曲水丈春を打越嘸御悅可被成候。幻住庵再興之時節も過候間誠にまぼろしの日數頓て入庵之節に成可申候。

貴翰忝拜見、並半紙一束被懸賢慮に每々御厚情不淺難筆締盡奉存候。御目まひ度々ニ及申候由氣之毒奉存候。陽性上る時候故と存候間　生主要用に存候。御公用被仰付之由珍重ながら御持病の御爲如何と無心元存候。庖丁か午御手ニ可被入候。南經齋物過半ニ至候由連衆より申來候。大儀之處はかりを御やり被成候て御手柄被存候。隨分淸眼微細に御開可被成候。且拙者持病も折々氣指候へ共大痛も不仕舊友風情之番せつき申候間よほどやかましく御座候間來月出京可致候心掛申候へどもいろ〳〵のがれぬ事ども仕出かし夏秋までも可留たくみいたし候。隨分拔出京邊貴境にて卯月末頃まではは足を可留存候後之事を思案致まじきよし酒落か棒を送候へば吹風に可任候。返翰數多及早筆候。頓着

二月廿二日　　芭蕉

奴誰雅伯

◇

尙々今日は御入來可被成と相待候處近頃〳〵御殘多被存候。かへす〴〵此度萬事御惠慮忝難盡候。爲御見舞三郎右衛門殿被遣誠辱被存候。今日はもし御出被成かと御亭主ともに相待居候處御殘多儀に御座候。先以此度は緩々滯留さま〴〵御懇情御馳走御禮難申盡候。はいかい急に風俗改候樣にと心せかれ御耳にさはるべき事のみ御免被成可被下候。され共風俗そろ〳〵改り候はゞ猶露命しばらくの形見とも思召可被下候。なごやよりも日々便り被致候間明日荷兮まで參り可申候半と存候。持病氣ざし候故又咳氣いたし藥給申候。なごやにても養生可成事に御座候間明日頃なごやへと存候。

一　先日笠寺まで御連中御送被成御厚志之こと可然御禮こたひ奉賴候。如意寺樣猶又よろしくたのみ奉存候。追付發句山中より以書狀具申上可候。

一　二三日此かた兩吟いたし太かた出かし候。出來候はゞ被懸御目樣に早々　以上

霜月廿四日　　　　　　芭　蕉

寂照居士

◇

三月十九日伊賀上野を出て三十四日、道のほど百三十里、此内舟十三里、駕籠四十里、歩行路七十里、雨にあふ事十四日、瀧の數七ツ、龍門、西河、蜻蛉、蟬、布留、布引、箕面、古塚十三、兼好塚、歌塚、乙女塚、淸盛石塔、忠度塚、敦盛塚、人麿塚、通盛塚、松風村雨塚、越中前司盛俊塚、河原太郎兄弟塚、良將楠塚、能因法師塚、

峠六ツ、琴引、臍峠、くらがり峠、當摩岩ヤ峠（小佛峠、樫尾峠）

坂七ツ、粧坂、西河上ちいか坂、うはか坂、宇野坂、かぶろ坂、不動坂、生田小野坂。

山峰六ツ、國見山、安禪嶽、高野山、てつかいヶ峰、勝尾寺山、金龍寺山、此外橋の數川の數名もしらぬ山〳〵は書もらし候。」

卯月廿五日　　万菊

桃靑

惣七様

◇

處々御一覽御歸宿被成候哉。もはや頃日はと推察申候。かみ樣よりも念頃忝存候。道中の風流虱み侘さて〳〵御物語承度候。宗五も折節上京留守にて手筈ちかひ候半と存候。先々大儀御願珍重〳〵御手柄に御座候。拙者相替候事無御座候。頃日は嵯峨去來下やしきに居申候。養閑竹の子を給申候。大井川の舟遊び俗容にはあゆを振舞嵐山朝暮之詠めにて御座候。富士いかゞ候哉。

桃　青

五月十日

窓守樣

花屋日記

芭蕉終焉記

芭蕉談花屋實記序

今はひとむかし、此の花舍某か後廳は、芭蕉翁終焉の地なり。時移りぬれば、木は立ちのびて空を支ふ、星移りぬれば、石は沈みて人知らずなりゆきぬ。元亨釋書に曰く、人去境留境者也と。誠なるかな、此の言。湊川の史錄に、楠正成が戰死を聞きて、齒を喰しばり、涙を墮さゞる輩は、世に月花を知らぬ人なり。花屋の後廳芭蕉翁の終焉の實記を見て、涕すゝり、泪を拭はざる輩は、世に月花を知らぬ人なり。かゝる舊跡ありて、此の舊記の明かに傳りあること、げに風雅の冥合といはん。是れ偏に去來先生の篤實にして翁生涯の事實を書記し置かれしゆゑなりとぞ。かく舊き事は慕はしうこそはべれ、浪速潟みじかき蘆の草枕、松島、蚶潟、須磨、明石、身は風雲の行衞を定めず、漂泊二十年の曉の夢、こゝにて終りたまひし面影の、立去らでのみ、千歲の後といへども朽ちざらまし。今風花雪月に遊びて、翁を慕ふともがらは、此の不可思議なる三世値遇の因と緣とを感仰すべし。

文化七秋八月五日

東肥乞文曉識

肥後八代　僧　文曉　著
浪　邊　花屋庵奇到　校

九月二十一日。泥足が案內にて、淸水淨瀨の茶屋に勝遊したまふ。茶店の主が需めに、短冊など書きてうち興じたまふ。泥足心に願ふことあるによりて、發句を乞ひければ

所　思

此の道や行く人なしに秋の暮　　翁

峽の畠の木にかゝる葛　　泥足

歌仙一折有略

連衆十人なり、短日ゆゑ歌仙一折にて止む。

今度は忍びて兩國へと思ひ立ち給ひしかど、何となくものわびしく、世の果敢なきこと思ひつゞけ

たまひけるにや、此の句につきて、ひそかに惟然に物語したまひけり。」

旅懐

此の秋は何で年寄る雲に鳥

●幽玄極まりなし。奇にして神なると言はん。人間世の作にあらず。其の夜より思念深く、自失せし人の如し。「雲に鳥」の五文字、古今未曾有なり。」

惟然記

二十六日。園女亭なり。山海の珍味をもて饗應す。婦人ながら禮を正し敬屈の法を守る。貞潔閑雅の婦人なり。實は伊勢松阪の人とぞ。風雅は何某に學びたりといふことを知らず。岡西惟中が備前より浪華に上りし時、惟中が妻となる。其の時より風雅の名ますく高し。惟中の死後、江戸に下りて、其角が門人となる。

白菊の目にたてゝ見る塵もなし　翁

紅葉に水を流す朝月　園女

遠衆九人、歌仙あり、別記。」

二十九日。芝柏亭に一集すべき約諾なりしが、數日うちつゞきて重食したまひしゆゑか、勞りありて出席なし。發句おくらる。

秋深き隣は何をする人ぞ　翁

一

此の夜より翁腹痛の氣味にて泄瀉四五行なり。尋常の瀉ならんと思ひて、藥店の胃苓湯を服したまひけれど驗なく、晦日、朔日、二日と押し移りしが、次第に度數重りて、終にかゝる愁とはなりにけり。

惟然、支考、內議して、いかなる良醫なりとも招き候はんと申しければ、師曰く、われ本元虛弱なり。心得ぬ醫に見せはべりて、藥方いかゞあらん。わが性は木節ならで知る者なし、願はくば木節を急に呼びて見せはべらん。去來も一同に呼び寄せ談ずべき事どももあるなれば、早く消息を遂るべしとなり。それより兩人消息を認め、京大津へぞ遣はしける。

然るに之道が亭は狹くして、外に間所きなく、多人數入り込みて保養介抱もなるまじくとて、そここゝと立ち廻はり、われ知る人ありて御堂前南久太郎町花屋仁左工門といふ者の裏座敷を借り受けゝり。間所も數ありて、亭主が物數奇に奇麗なり。諸事勝手よろし。その夜すぐに御介抱まをして、花屋に移りたまひけり。此の時十月三日なり。」

次郎兵衛記

四日。車庸、畦止、諷竹、舍羅、何中、等は師の病氣を知らず、之道亭に至りたりしに、勞りたきふことを、之道より聞きはべりて、花屋にまゐる。

病氣ふ（原本缺字）につき、問尋の人たりとも、猥りに座敷に通るまじく、と張紙を出す。」

且つ仁左衛門に斷り置くと云ふ。」

次郎兵衛記

控帳　座敷入用品請取覺書
　　　座敷附之道具品々覺

次郎兵衛

戊十月四日

一、机　一脚
一、硯　一面　墨一挺、水入、小刀
一、煙草盆　二口　火入、灰吹、きせる
一、帯　二本
一、夜具　五流　壹具絹、四具木綿
一、枕　五ツ
一、膳　十人前　椀猪口、皿添
一、竈　三口
一、釜鍋　一口三口
一、火箸　三
一、茶瓶掛　二口
一、火鉢　二口　火箸添、眞鍮

一、茶碗　十

一、茶碗鉢　三口

一、薄刄庖丁　三本

一、藥罐　一口

一、藥溜　二ツ

一、研木　一本

一、摺鉢　一口

一、炭斗　一ツ

一、水嚢　一ツ

一、油德利　一ツ

一、盥　二口

一、手水盥　二口

一、行燈　二張

一、懸行燈　二張

一、提灯　二張　大小

右

同四日

一、白米　一斗

同

一、味噌　三升　赤白

同

一、醬油　一升

同

一、薪　十束

同

一、炭　一俵

同

一、油　一升

同

一、紙　一束

同

一、雜紙　一束

同

一、鹽　一升

右

一ヶ月
一、座敷料　三歩二朱　相渡

右　仁左衛門より受取書置

飛脚便に申し遣はし候。老師、一昨々夜より、少し悪寒氣御座候ところ、起居穏かならず候。之道不勝手に候ゆゑ、御不自由と存じ、取りはからひ候ひて、御堂前南久太郎町花屋仁左衛門裏座敷、奇麗閑靜に候の條、借り受け、之道請判にて、先づ寓居と定め候ところ、今朝は別して御氣分心もとなき御容態に候。醫者呼び申す筈に候へども、早く木節に御容態お見せなされ度との御事、仰せられ候條則ち木節に別紙遣はし候。此の狀着次第、貴雅にも早々御下り相待ち候。木節御同伴候樣に存候。隨分御急ぎ下さるべく候。不一

十月二日　　惟然

文考

去來樣

尚々別紙急々木節に御屆け頼み存候。以上

今朝の狀、相違し候やこ存候。老師御事、昨夜より泄痢の氣味にて、俄に一變、夜中二十餘度の通氣、これは頃夜園女亭にての菌の御過食ゆゑこ相考へ候。一夜のうちに掌をかへすが如く、今朝より尙また通痢度數三十餘度、われらはじめ、之道手を握り候までに候。此の狀着次第、木節同伴にて急に御下り相待ち候。南久太郎町花屋仁左衞門こ御尋ね、早々御入りなさるべく候。急々以上。

十月二日夜、子の時

惟然

去來樣

尙々、大津の衆、その他、何方へも、たより／＼御申し遣はしなさるべく候。木節は急にまゐられ候やう、御頼み申候。伊賀への常飛脚はこれなく、幸ひ羅漢寺の弟子伊勢へ越え候に、今朝狀頼み遣はし候までに候。若しその方角より幸便も候はゞ、仰せ遣はされ下さるべく候。

三日。二十七行、但し晝夜なり。天氣曇る。

夜半過、去來來る。二日朝の狀、三日の朝屆く。その座よりすぐに打立ち、伏見に出でしは巳の時なりし。それより船にうち乘り、八軒屋に著きしは亥の時なりしと。

すぐに御病床にまゐりたりしに、師もうれしさ胸に迫り、暫時はものものたまはざりしが、諸國に因みし人々は、われを親の如く思ひたまふに、われ老ぼれて、やさしき事もなければ、子の如く思ふこころなく、殊更汝は骨肉を分けし思ひあれば、三日見ざれば千日の思ひせり。然るに今度かゝる遠境にて、難治

の患に罹り、再會あるまじく思ひ居たりしに、相見ることのうれしさよ、とて袂をしぼりたまへば、去來もしばしば嗚咽せしが、暫くしていふ、僕世に暇なければ、させる實意も盡さゞるに、かゝる御懇意の御言を蒙ること、生をへだつとも忘却つかまつらずと、數行の泪にむせぶ、なにさま賣藥の効驗こゝろもとなしとて、去來また消息をしたゝめて、飛脚便に木節に遣はす。

支　考　記

同じき三日、夜子の時、追ッつゞいて木節來る。二日出の兩人の消息、その夜著せしゆゑ、大津を丑の時に立ち、一番船に乘りしかど、短日ゆゑ遲著。諸子に會釋もそこ／＼にして、すぐに御容態をうかゞひ、御脈を診す。主方逆逸湯を調合す。

支　考　記

四日。朝、木節申さるゝにより、朝鮮人参半両、道修町伏見屋より取る。同じく包香十五袋取る。」
天氣よし。
之道方より世話にて洗濯老女を傭ひ、師の御衣裳、その他連衆の衣裳を濯ぐ。」
園女より御菓子にに水仙を送る。」
支考、惟然、介抱。
次郎兵衛、とても手屆きかね、之道取計らひとて、舎羅、呑舟といふ者來る。按摩など承る。」
今日三十度餘に及ぶ。度毎に裏急後重あり。」

次郎兵衛記

五日。朝、丈草、乙洲、正秀、來る。」
天氣曇る。寒冷甚し。
時候の故にや、師時々惡寒の氣あり。
朝、次郎兵衛天満に詣る、晝過ぎ歸る。」

夜着蒲團また〳〵五流、米一斗、醬油二升、鹽一升、味噌三升、薪二十束、炭二十貫目、雜紙三束なり。

今日師食したまはず。湯素麪二箸なり。」

夜中までに五十度に及ぶ。」

次郎兵衛記

六日。天氣陰晴極らず。」

朝の食、煮麪三箸。

前夜終宵寢入りたまはず。暫く睡眠したまふ御目覺より、去來を近く召して、先の頃、野明が方に殘し置きはべりし、大井川に吟行せし句、

大堰川波に塵なし夏の月　翁

此の句、あまり景色過ぎたれど、大井川の夏氣色、言ひかなへたりと思ひゐたりしが淸瀧にて、」

淸瀧や波に散りこむ青松葉　翁

と作りし、事柄は變りたれど同巢なりと、人の言はんも如何なれば、大井川の句は捨てはべらんと汝に申したり。然るに頃日園女に招かれて、

白菊の目にたて丶見る塵もなし　　翁

と吟じたり。これ亦同案に似て、句の道筋同じ、それゆゑ前の二句を一向に捨てはべりて、白菊の句を殘し置きはべらんと思ふなり。汝が意如何。

去來涙を浮べ、名匠のかく名を惜しみ、道を重んじたまふ、ありがたさよ。わづか句一章に、さまで千苦萬苦したまふ。御病惱の中の御骨折、風雅の眞情こそ尊けれ。眼ある者、何者か、此の句を同案同巢と見るべき。おそれながら、此の句を同案同巢など丶申す者は無眼人と申す者なり。其の故は、此の句々、景情別に備はりて、句意を見る時は、三句共に別なり。かるがゆゑに、われは句の意を眼に覩て、句の姿を見ず。靑苔日厚自無塵。これは是れ隱者の高議をほめたる語。今は園女がいまだ若くして陌上桑の調あるを讃めたまひる吟なり。意も妙なり、語も妙なり。世人此の句を見る者、園女が淸節を知らん。波に塵なしの語は左太仲が、必非二絲與一レ竹、山水有二淸音一といへる絕唱も思はれ、園が二夫に見えざる貞潔と、大井淸瀧の絕景と、二句の間相違つて、感じてもあまりと申せしかば、師も機嫌よくおはしけ

り。

七日。朝より不相應の暖氣なり。曇りて雨なし。

藥方逆逸湯に加減。

また入麪を好みたまふ。

園女より見舞こして菓子など贈り來る。次郎兵衛取計らひて之道に贈る

鬼貫來る。去來應對して還へす。

終日藥を召さず。

終日曇る。夜になりて霽る。

夜になりて、人音も靜かなりければ、灯の下に人々伽してゐたりければ、乙州、正秀等去來に申しけるは、今度師若し泉下の客となら せたまはゞ、此の後の風雅いかになりゆきはべらん。去來默してゐたりしが、われもそのこと心にかゝりしゆゑ、二日の消息届きしゆゑ、かく急ぎまゐりたり。人々

もさ思ひたまふや。さあらば今夜閑靜なり。唯今の醫におはしまさば、御恢復おぼつかなし。滅後の俳諧を問ひ奉らんとて靜に枕上にうかゞひよりて、機嫌をはらひ問ひ申しけり。

翁、次郎兵衛に扶け起され、息つきたまひて、のたまはく、俳諧の變化極まりなし。然れども眞行草の三つを離れず。その三つよりして千變萬化す。われいまだその轡を廻ぐらさず。汝等此の以後とても地を離るゝことなかれ。地とは、心は杜子美が老を思ひ、寂は西上人の道心を慕ひ、調は業平が高儀を寫し、いつまでも、われら世にありと思ひ、ゆめ〳〵他に化せらるゝことなかれ。言ひたきことあれども、息（原本缺字）口かなはずと、喘ぎたまひければ、乔舟御口を潤ほす。また藥をまゐらせて靜まりたまふ。各筆をとりて之を書く。」

惟　然　記

八日。天氣快晴。

御不食なり。

京の（原本缺字）士來る。信德より消息もて御病體を問ふ。」

同じく近江の角上より使來る。」

人々勝手の間にて、今度の御所勞、平復を祈り奉らんとて、住吉大明神に連中より人を立つべしと、去來申し送られければ、おの〳〵然るべしと、之道、次郎兵衛は鬮當りにて、社務林采女方に祝詞を賴み、厚く神納の品々送らる。

各詠　奉納

おちつきやから手水して神集め　木節
初雪にやがて手ひかむ佐太の宮　正秀
峠越す鴨のさなりや諸きほひ　丈艸
おこさるゝ聲もうれしき湯姿かな　支考
水仙や使につれて床はなれ　呑舟
据あげて勇みつきたり鷹の顏　伽香
足かろに竹のはやしやみそさゞい　惟然
神の留守賴みぢからや松の風　之道

日にまして見ます顔なり霜の菊　　乙州

木がらしの空見なほすや鶴の聲　　去來

大勢の集合なりければ、よろこび興じて、師を慰め申しけり。

木節去來に申しけるは、今朝御脈をうかゞひ見申すに、次第に氣力も衰へたまふと見えて、脈體わろし。最初に食滯より起りし泄瀉なれども、根元脾腎の虛にて、大虛の痢疾なり、故に逆遙湯主方なり。なほまた加減して、心を盡すといへども、藥力屆かず。願はくは治法を他醫に求めんと思ふ。去來師に申す。師曰く、木節が申條尤なれども、如何なる仙方ありて、虎口龍鱗を醫すとも、天業奈何かせん。われかく悟道しはべれば、わが呼吸の通はん間は、いつまでも木節が神方を服せん。他に求むる心なしと、のたまひける。風流道德人みな間然することなし。

支考。乙州等、去來に何か囁きければ、去來心得て、病床の機嫌をはからひて、申していふ。去來より鴻名の宗師、多く大期に辭世あり。さばかりの名匠の、辭世はなかりしやと、世にいふ者もある

べし。あはれ一句を殘したまはゞ諸門人の望み足りぬべし。師のいふ。きのふの發句は今日の辭世。けふの發句はあすの辭世。われ生涯いひすてし句々、一句として辭世ならざるはなし。若しわが辭世は如何にと問ふ人あらば、此の年頃いひすて置きし句、いづれなりとも、辭世なりと申したまはれかし。諸法從本來常示寂滅相。これは是れ釋尊の辭世にして、一代の佛教此の二句より外はなし、古池や蛙とびこむ水の音。此の句にわが一風を興せしより初めて辭世なり。其の幾百千の句を吐くに、此の意ならざるはなし。こゝを以て、句々辭世ならざるはなしと申しはべるなりと、次郎兵衛が傍より口を潤ほすに隨ひ、息の限り語りたまふ。此の語實に玄々微妙。翁の凡人ならざるを知るべし。」

支考記

夜に入りて、嵯峨の野明、爲有より柿を贈り來る。消息添ふ

今日まで、伊賀より音信なし。去來、乙州、申し談じ、態と飛脚を差立つべきよし師に申しければ、師のいふ、われ隱遁の身として、虛弱なる身の數百里の飛杖思ひ立ち、親族よりとゞめけれど、心のまゝにせしは、わが過ちなり。今大病と申し送りなば、一類中の騷ぎ、殊に主公の聞召もおそれあり、

たとひ今度大切に及ぶとも、沙汰あるまじと、のたまひけり。師の慮の深きことおの〳〵感心す。

度數六十度に及ぶ。

惟　然　記

九日。諸子の取はからひとして、古き衣裳、また夜具などの垢つきたる、不淨あるを脱ぎかはし、よき衣に召させ更へまゐらす。

師曰く。われ邊地波濤のほとりに、草を敷寢、塊を枕として、終りをとるべき身の、かゝる美しき褥の上に、しかも未來までの友どち、にぎ〳〵しく付そひ鬼錄に上ぼらんこと、受生の本望なり。

丈草去來と召し、昨夜目のあはざるまゝ、ふと案じ入りて、呑舟に書かせたり、おの〳〵詠じたまへ、

旅に病で夢は枯野をかけめぐる

枯野をめぐる夢心、ともしはべる、いづれなるべき。

これは辭世にあらず。辭世にあらざるにもあらず。病中の吟なり。

併しかゝる生死の一大事を前に置きながら、いかに生涯好みし一風流とはいひながら、これも妄執の一つともいふべけん。今は本意なし。

去來いふ。さにあらず。日々朝雲暮雨の間も置かず、山水野鳥の聲も捨てたまはず、心身風雅ならざるなく、かゝる河魚の患につかれたまひながら、今はのかぎりに、その風神の名章を唱へたまふこと、諸門葉の悅び、他門の聞え、末代の龜鑑なりと、涕すゝり、泪を流す。眼ある者之を見ば魂を飛ばさん。耳あるものこれを聞かば、毛髮之が爲めに動かん。列座の面々、感慨悲想して、慟絕して聲なし。是し師翁一代の遺敎經なり。

此の日より殊更に衰へたまへり。度數知れず。」

去　來　記

十日。初時雨せり。

師、夜の明方より度數知れず、ひとしほ惱みたまへり。

折節に譫言ありて、取締なきこと多し。

木節此の日苟藥湯を盛る。

諸子うち寄り、食事をすゝめまゐらせけれど、すゝみたまはず。梨實を望みたまふ。木節かたく制しけれど、頻りに望みたまふゆゑ、止む事を得ずすゝめければ、一片味ひて止みたまふ。木節いふ。脾胃受くるところなし。死期近きにありといふ。」

申の下刻に至りて人心地つきたまふ。」

今日は一人も食したる者なし。」

惟　然　記

十一日。朝またく時雨す。「

思ひがけなく、東武の其角來る。これは東武のたれかれ同伴にて、參宮の序、和州紀州をうちめぐり泉州より浪花にうち入りしが、はからずも師の勞りおはすと聞きつけ、そこゝと尋ねまはり、漸くに馳けつけたり。

すぐに病床にまゐりて、皮骨連立したまひたる體を見まゐらせて、且つ愁ひ、且つ悦ぶ、師も見やりたるまでにて、たゞ涙ぐみたまふ。其角も言葉なく、さしうつふきゐたりしを、丈草、去來、

支考、その外の衆、次の間に招き、御病症の始終をものがたる。此の夜、夜すがら伽して、思ひよりし事ども、ものがたりゐたりしに、亥の時ごろより、師、夢のさめたる如く、粥を望みたまふ。人々うれしさ限りなく、次郎兵衛とりはからひて、疾く炊きあげて、すゝめまゐらす。中嵩椀にて快く召されけり。朔日より以來の食事なり。」

土鍋に殘りたるを、去來椀にうつし入れて、押しいたゞき、

病中のあまりすゝりて冬ごもり　去來

去來曰く。趣向を他に求めず、ありあふ事を口にずさびて、師を慰めまゐらせん。深く案じ入らずと、頓に句つくりたまへ。

惟然は前夜正秀と二人にて、一つの蒲團を引ばりて被りしに、かなたへ引き、こなたへ引いて、よもすがら寢入らざりければ、はてはしらじと夜明けゝるにぞ、そのことを互に笑ひあひて、

引ぱりて蒲團に寒きわらひかな　惟然

思ひよる夜伽もしたし冬ごもり　正秀

一座之を聞いて、いづれもどつと笑ひければ、師も笑ひたまへり。人々うれしさ限りなく、十日已來

の興にぞありける。

初時雨なりければ、空とく晴れて、日影さし入りたるに、蠅の多く日向に群がりゐたるに、人々黐もて蠅をさしとるに、上手下手あるを見たまひて、しばらく興に入りたまひけれど、大病中のことなれば、忽ちあきたまひ、ぢきに寢所に入りたまふ。

支考は、死の發句を滅後に一集せん心願あれど、此の頃の病苦に惱みたまふに、見合せゐたりしに今日機嫌よきに乘じて、申し出ではべらんと、去來に申したりければ、去來はかねて師の心中を知りたりしゆゑ、大に怒り、こざかしきことを申さるゝものかな、師は平生名聞らしきこと好み給はず、今日やう〱快き體を見うけはべりて、諸人うれしと思ふ中に、御氣に逆ふことを聞かせ申しては、御心を勞せしめ申すこと奇怪なり。此の後、御病床近く寄りたまふな、早くその座を立ちたまへと、聲あらゝかに、次の間に逐ひ立てけり。

支考も、はからず、もの言ひ出して、諸子の聞く前、面目を失ひしが、ゆく〱悄然にうちむかひ、われに句あり、そこ書きたまへと云ひて、

しかられて次の間に立つ寒さかな　　支考

さすが支考なりければ、師もほの聞きたまひて、おかしがりたまひけり。」

鬮とりて菜飯たかする夜伽かな　　木節

皆子なりみの虫寒く鳴盡す　　乙州

うづくまる藥のもとの寒さかな　　丈草

吹井より鶴をまねかん初時雨　　其角

「一々惟然吟聲しければ、師、丈草が句を今一度と望みたまひて、丈草出來されたり、いつ聞いてもさびしをり整ひたり、面白し面白しと、しは嗄れし聲もて讃めたまひにけり。」

いつにかはりし機嫌のうるはしきを悦びけるに、木節ひとり愁を抱ける體に見えければ、其角その故を問ふ。木節言ふ。病に除中の症といへるあり。大病中絶食なるに、遽かに食のすゝむことあるは悪症なり。死期遠きにあらずといへり。

さは知らず、おの〳〵さゞめき居たるに、夜半頃より、また寒熱往來ありて、夜明ごろより、顔色

土の如く見えたまひ、暫くは悶亂し、人も見知りたまはざりしが、ややありて、また實正になりたまひ、左右に舍羅、呑舟、ゝしろよりは次郎兵衞抱きまゐらせて、介抱し、ほどなく夜明くれば十二日なり。

かねては閉ぢ籠りたまひしが、隔ての障子も襖も取りはなさせ、其角、去來、丈草を是へとて向に見たまひ、穢れを憚れば咫尺したまふなと斷り、行水を望みたまふ。木節切に制し申けれど、しきりに望みたまふゆゑ、止むことを得す、湯をひかせまゐせけり。」

座を靜かに改め、木節が醫術をつくされし事など、つとくに謝したまひ、さて三人の衆を近く召され、乙州、正秀、を左右にし、支考、惟然に筆を執らせ、亡き後の事、こまぐくと遺言したまふ。病苦少しも見えたまはず。人々奇異の思ひをなしけり。伊賀の遺書は手づから認めたまひ、外に京、江戶、美濃、尾張、漏れざるやうに遺言し終りたまふに、始終は門人中にて筆記す。

次第に聲ほそり、痰喘にて(原本缺字)たまひければ、次郎兵衞素湯にて口を潤ほしまゐらせけり。

やゝありて去來に向ひたまひ、先頃寶永阿闍梨より路通がことを仰せあり。その後汝が丈草乙州等

に贈りし消息、露霜とは聞き捨てず。しかし少し忌み憚ることありて雲井の余所にはなしはべりぬ。彼が數年の薪水の勞、ゆめ〳〵忘れおかず。わがなき後には、凡そに見捨てたまはず、風流交りたまへ此の事頼みおきはべる。諸國にも傳へたまはれかしと、言ひ終りたまひて、餘言なし。

合掌正しく、觀音經と聞えて、かすかに聞へ、息の通ひも遠くなり、申の刻過ぎて、埋火のあたゝまりのさむるが如く、次郎兵衛が抱きまゐらせたるに倚りかゝりて、寢入りたまひぬと思ふほどに正念にして終に屬纊につきたまひけり。時に元祿七甲戌十月十二日申の中刻、御年五十一歳なり。

即刻不淨を淸め、白木の長櫃に納めまゐらせ、その夜直ちに川船にて伏見まで御供し奉る、その人々には、其角、去來、丈草、正秀、木節、惟然、支考、之道、呑舟、次郎兵衛、以下十一人。花屋仁左衞門が京へ荷物を送る體にて、長櫃の前後左右を取りまき、念佛誦經、おもひ〳〵に供養し奉る。

八幡を過ぐる頃、夜もしらじらと明けはなれけるに、僧李由の下りたまへる舟に行き逢ひければ、いざとて乘移り、相共に果敢なき物語して、程なく京橋に着く。

それより狼谷通りにかゝり、急ぎにいそぐほどに、十三日巳の時過ぎには、大津の乙州が宅に入れ奉りけり。

乙州は伏見より先立て急て歸り、座敷を掃除し淸め、沐浴の用意す。御沐浴は之道、呑舟、次郎兵衞なり。御髮の延びさせたまへば、月代には丈草法師まゐられけり。御法衣淨衣などは、智月と乙州が妻縫ひ奉る。淨衣白衣にて召させまゐらすべき筈なるを、翁は如何なる事にや、かねて茶色の衣裳こそよけれと、すべて茶色を召されければ、智月尼のはからひとして、淨衣も茶色の服にこそせられけれ。さて送葬は十四日と定まり、かれこれ日沒になりにけり。」

大阪花屋より支考、惟然が二日に仕出しの狀、羅漢寺の僧伊勢に急用ありてまゐる由を、花屋より知らせければ、是れ幸と賴み遣はしけるに、此の僧奈良に着きたる日より、痢疾にて步行かなはず、一止むことを得ず奈良に滯まる。それゆゑ、十一日朝、伊賀の上野に行く人あるを聞きつけゝれば、右の狀を仕出しけり。此の狀十二日の暮頃に上野に屆きけり。」

土芳卓袋披き見るより大に驚き、取る物も取りあへず、松尾氏にまゐりたれば、これも同時に書狀着せりといふ。

それより兩人は、したゝめそこ〳〵にして、子の刻過ぎより、かねて案内知りたる近道にかゝり、

大和の帯解まで、たゞ急ぎに急ぎけれど、月入りての事なれば、暗さは暗し、小道のことゆゑ、提灯も消えぬれば、その夜の明けがた帯解に着く。相知れる方に少時休らひて、したゝめなどし、これよりくらがり峠を越ゆれば、大阪までは八九里には過ぎず。さらばとて、足にまかせて、くらがり峠を越え、俊徳街道をたゞ急ぎに急ぎ、平野口より御城の南を馳け抜け、すぐに久太郎町花屋に驅けつけたるは十三日の暮頃なり。

何かなしに、翁の御病氣いかにと問ひければ、仁左衛門しかぐと答ふ。兩人ともに、殘念申すばかりなく、さらば葬送になりともも逢ひ奉らんとて、また引きかへし、八軒屋にかけゆく。さいはひ出舟ありければ、そのまゝ飛び乘り、伏見京橋に着きしは夜明なり。すぐに飛下り狼谷にかゝり、義仲寺に着きしは、いまだ入棺したまはざる前なりければ、諸子にことはりて、死顏のうるはしきを拜しまゐらせ、悲歎限りなく、一夜を病床に咫尺せさることをかきくどきけれど、先づ因縁の深きことを身にあまり、ありがたくうれしく、燒香につらなりけり。

十二日の暮に伏見を出船したる臥高、昌房、探芝、牝玄、曲翠等は、その夜いづこにて行きちがひたるやらん、夜明けて大阪に着き、すぐに花屋に馳せたるに、諸子御骸を守り奉りて上りたまひぬと聞くより、すぐにまた十三日の晝船に大阪より引きかへし、その夜酉の刻に伏見に着く。夜半頃に大津に歸る。

義仲寺眞愚上人住職なれば導師なり。三井寺常住院より弟子三人まゐられ、讀經念佛あり。

御入棺は、その夜酉の刻なり。諸門人通夜して伊賀の一左右を待つ。夜に入りても左右なし。

去來、其角、乙州等評議して、葬式いよ〳〵十四日の酉の上刻と相極む。

晝のうちより集まれる人は雲霞の如く、幔に控へたる人數、凡そ三百人あまり、知る知らぬ近鄕より集まる老若男女まで、惜しみ悲しむ。

時しも小春の半ばにて、靜かに天氣晴れわたり、月清朗として、湖水の面に輝きわたり、名にし案

津の松に吹きおこるは、無常の嵐かと思はれて、月はおもしろきもの、露はあはれなるものといへれど、折にふれては、何か哀れなるものならざらん。矢橋の漣の寄する響きも、愁人のためには、胸に迫り、泪を添ふ。」

支考記

引導香語

雪月魂魄。風花精神。等閑一句。驚動人天。嗚呼。奇哉芭蕉。妙哉芭蕉。萬里白雲。一輪明月。五十一年。一字不說。」

各捻香

丈草　其角　去來　李由　曲翠　正秀　木節　乙州　臥高　惟然　昌房　探芝　泥足　之道　芝柏

牝玄　尙白　土芳　卓袋　許六　丹野　風國　野童　游力　野明　角上　胡故　蘇葉　靈椿　素羣

回鳬　萬里　誐々　這萃　荒雀　楚江　木枝　抃吹　魚光　支考

右の外近江國中は申すに及ばず、京、大阪、美濃、尾張、伊勢、その外國々より京などに上ぼりたる諸國の人々、三世値遇の緣を悅び、われも〳〵と香手向け奉る。その數何百人といふ事をしらず。境内狹ければ、表より入りたる人は裏へ拔け出るやうにしつらへ置き、田の刈跡に道を附けゝれば、燒香の人々は、すべて裏へ拔けゝるにぞ、さして騷がしきこともなく、埋葬終りけるは子の時過ぎになりにける。

翁かねて遺命の通り、木曾殿の右の方に埋葬し奉りけり。

十五日。去來、其角はじめ、膳所、大津の人々、朝とく詣して、先づとて、土かきあげて卵塔をかたどり、さいはひ塚のうしろに、年古りたる柳あるを其のまゝにし、御名の形見とて、かれ〳〵の芭蕉をひとも、又かねて好みたまひたる茶の木の、今を盛りなる花と倶に移し植て、竹もて垣結ひ廻はし、香花を手向け奉りけり。

日の本廣しといへども、生前に、その名豐葦原の浪に響き、その德芙蓉の絕頂に竝ぶ。人丸、赤人

の昔はいざしらず、末代の今にしては、實にわが翁一人といふべし。

翁反古上畢

十六日。乙州亭に集會して、義仲寺の住持、その外僧徒に禮物、御遺物等の沙汰に及ぶ。

昨夜まで大に御苦勞なされ候。さて今日は、先師御遺言の通り、御遺物それ〴〵配分仕りたくその外寺納等の儀申し談じたく、且つまた伊賀より一向に返書もこれなく、至て不審に存候、わざと人差立て申したきにつき、拙夫一人の名目、少しく憚り存じ候ゆゑ、御連名に加入申したく、これらの儀、御談合に及びたく、また明後日一七日に候條、諸國連中退散これなきうち、御靈前に於て、御追悼俳諧百韻興行仕りたく、ついては、御終焉の記一章、貴雅御書きなされたく、右條々申し談ずべき間、唯今より御出座下さるべく候、萬端は面上申し上め候。以上。

十月十六日　　去來

其角英雅

御書翰拜讀、御念の御事ども忝く候。此の間の御辛勞、筆頭に盡くし難し。さてとよ、今日は、諸君御集會、先師御遺言の御遺物配分、且つ寺納その他の勘定なさるべき旨、又伊賀への御通文につき、拙者立合申候やう、仰せ聞けられ候趣、畏り候。早速馳せ參じ申すべく候へども今日は、宿主曲翠子はじめ、臥高、正秀、泥足、同心仕り、先師御舊跡の幻住庵に罷越し、椎の冬木も見、御筆蹟の一字一石塔も拜し申したく、前諸仕りおき、卽ち唯今出立仕るにて候。御不（原本缺字）ながら御宥免下さるべく候。御遺物その外寺納等のことは、乙主人、諸風子に御談じなさるべく候。伊賀への御紙面、拙者御連名なさるべき旨、隨分御同意仕候。

一、御終焉記の儀仰せ聞けられ、いかゞ仕るべきや。併し貴命の事に候ゆゑ、取りかゝり見申すべく候。御病氣最初よりの御樣體、貴兄はじめ、惟然、支考が覺書は勿論、御夜伽の發句等、御書附御見せなさるべく候。且つ次郎兵衛日記、共に御見せなさるべく候。出立、早々以上

十月十六日　　　　　　　　　　　　其角

去來英雅

十七日。乙州亭。」

一、眞愚上人　金一兩

一、御齋米料　同一兩

一、御供養料　同一兩

一、御茶湯料　同百疋

一、御弟子觀門子　同百疋

一、三井寺常住院御弟子二人　同二百疋

家來衆三人　銀三兩

御遺物

一、出山佛　一體　御長一寸一分

一、鐵如意　一本

佛頂禪師より附與、長さ押延べて凡そ一尺九寸位、頭蔦の葉形、金箔、木曾寺にあり。」

丈草に附與。

一、觀音經　小本一部

一、紙綴袈裟

佛頂禪師より附與。

一、被風

一、銅鉢　一口

一、木硯

樫の木にて旅硯なり。

一、古今集序註　一部

一、百人一首　一部

一、新式　一部

一、奥之細道　一部

一、御笠　一蓋

一、菅　蓑　　　　　　一　枚
一、御　杖　　　　　　一　本
右紙縷裂裟より以下七品は、かねて惟然に御附與の御約諾の由に候ゆゑ、直ちに惟然に附與。
一、御頭陀　　　　　　一
中に杜子美詩集、山家集、外に後猿蓑と題ありて歌仙三巻有、發句四五吟ほど、外は御書き捨ての反故など入る。別に紙に包みたる布裂五寸に六寸ばかり、上包に狭の細布とあり、」進上清風と。又外に和歌の古短尺二枚、松島蚶潟の繪二枚。
右のうち、紙に包みたる、五寸に六寸の布切並びに松島蚶潟の畫、若し御支江御座なく候はゞ、御形見に下拙に仰せつけられ下さるべく候やう希ひ奉り候。生涯寳物に仕りたく候。
去　來
十八日。義仲寺に於て、追善の俳諧百韻巻尾す。烏羽の文臺、松風の硯寫しの木硯。連衆四十三人。

わざ〳〵一人差立て候。益御平安御座なさるべく恭しく賀し奉り候。皆共無異罷在候、御安意下さるべく候。然れば、尊師大阪に於て御大病の處、支考、惟然より申進じ候へども、御返答御座なく、遠路故紙面遲着と察し候。とかく仕候うち、拙者共も罷下り、御保養を加へ候へども、御養生相叶はせられず、去る十二日終に御遷化被遊候、旅中の儀に御座候ゆゑ、その夜早速近江木曾寺に尊骸を遷し奉り、十四日まで御報待ち奉り候へども、御返答承らず候間、諸國門人中一等評議にて、即ち十四日の夜、木曾寺に於て埋葬仕候。委曲は追々土芳卓袋歸國の上にて御承知下さるべく候。

一、別封の一書は師翁御遷化の日御認め被遊候御遺書にて御座候。上書までにて御封緘はその時よりこれなく候條、さやう思召され御落手下さるべく候。

一、御遺物の品々は、諸國連衆義仲寺に於て集會の上、書記の通り相違なく候條、今度御來臨も御座候はゞ、御見屆の上、御取計ひに任せ申す筈に候へども、御左右御座なく候ゆゑ、止むを得ず取計ひ置き、目錄御覧に入れ申候。御親類方にも憚りながら此の旨仰せ達せられ下さるべく候。土芳卓袋歸國口述の上、御返事なされ下さるべく候。一七日御追善供養相了ひ申候ゆゑ、諸士一同引取り申候筈に候條、願はくは御返書承り申度候。書餘雨雅士に御聞き下さるべく候。以上

十月十九日　　　　　　　　　　去来

其角

松尾半左衛門様

別啓。昨日の俳諧百韻貴覧に入れ候。

一、御遺物目録の外に、左の通り相残り居候品、御綿入着一御袷同前御肌付同前御帯二節右は花尾仁左衛門より、一昨日次郎兵衛方に送りまゐり候。外に御衣裳の類數多これあり候は、大阪出立取急ぎ候ゆゑ、殘らず花屋に預け置き申候。

一、御飛脚只今參着いたされ候。尊翰拜見仕候。御返事仕候筈に候へども、用相認(原本缺字)申候ゆゑ、貴答仕らず候。

一、壽貞子次郎兵衛、御國出立の砌より御供仕り居り候。御病中始終御葬埋の節まで、拔群の骨折仕られ候。逐一兩雅より口述に及ぶべく候。御病中間の始末、御病態、惟然、支考、次郎兵衛、拙者まで、筆記貴覧に入れ候。已上。

巨細の御書翰、忝く拜誦。御揃ひ益御安泰御暮しなされ候の由遙賀奉り候。然れば今度芭蕉事、大阪に於て遷化致し、病中より木曾寺埋葬に至り候まで、淺からず御苦勞なされ候由、御文面と申し、土芳卓袋よりも微細に承知いたし候。惣御連中、別して兩雅丈の御厚情の程、御禮申し盡しがたく候。芭蕉事一所不住の境涯に候條、斯くあるべしとは、かねて思ひまうけ居り候へども、今更殘念御推察下さるべく候。併し病中始終御介抱の事、たとひ親族の面々附添ひ居り候とも、斯くまで手は屆き申さず、亡弟身に取りて、他方の聞え、親族中の美目、身に餘り忝く存じ奉り候。

一、大阪より兩度の御手簡の中、二日の御狀のみ漸く十二日の暮れ方に屆き候。外の御狀は未だ相屆き申さず候。芭蕉病氣大切なる儀と御知らせ候ゆゑ、早速使者差出し候。最早日限過ぎ候へども、未だ病氣にてこそあるとばかり存候。使の者歸り候は、十六日の朝まかり歸り候て、その時、遷化の事も、遺骸まで近江の方に御送りなされ候儀も承知いたし候。卓袋土芳近江方まのゐられ候儀も今度承り候故、追取り返し一人差立て候。今度は拙者馳せ參じ申す筈に候へども、亡弟こゝもと發足の後にて、拙者瘧疾わづらひ、しかも初瘧と申し、老人の事に候ゆゑ、長々相痛み、漸く九月

下旬快氣いたし候。瘧後今以て服薬いたし、出勤も仕らず、氣力も未だ得申さず候。その儀を能くせず、諸風子の御聞前、恥ぢ入り申すことに候。

一、芭蕉遺狀たしかに落手いたし候。誠に一類中打寄り開封、何れも一字一涙、愁傷御思察下さるべく候。

一、亡者遺物の儀につき、仰せ越されの趣、御入念の御事に候。併し亡弟入道以來は、俗縁の表向きこれなく候。僧分の器財のことに候條。遺言の品は格別、その外は、何品に依らず、直ぐに義仲寺に寺納どもにてこれあるべきか、夫（原本缺字）猶また御連中思召にまかせ候間、御存寄次第宜しく御取計ひ下さるべく候。

一壽貞子次郎兵衛事、今度親切の骨折、始終の事感じ入り候。存寄も有之候。勿論譜代の者に候ゆゑ、その許諸事相了ひ申し候はゞ、一日なりとも早く罷歸り候やう、慮外ながら仰せ入れられ下さるべく候。

一、相殘り居り候とありて、古衣裳四品、送り下され、たしかに落手候。外に古衣裳の類、花屋に預け置かれ候由、右の品は必ず御頓着下さるまじく、そのまゝに被召置下さるべく候。

余情拜顔に申し殘し候。以上

十月二十三日　　　　　　松尾半左衞門

命清判

晋其角樣

向井去來樣

御連中樣

追啓。御飛脚道違ひにて踏み迷ひ申され、殊に痛所これある由に候間、中一日手前に留め申候。念の爲め申遣し置き候。以上。

別啓申し遣し候。芭蕉死去の事、拙者主公、同役共を以て申し遣し候ところ、主公甚だ殘念に存せらる、趣、それにつき辭世どもはこれなきやの事、訊ねられ候ゆゑ、土芳卓袋口述の通り申し達し候へば、貴丈方の紙面、直きに披見いたさるべくとの事、その旨にまかせ申し候ところ、重ねて尋ねに、命終までに發句はこれなきや、若しこれあり候はゞ、直書見たくと申す事に候。若し貴文方

外々、御所持の方も候はゞ暫く拜借申したく候。此の段お頼み申候。
一、自筆の山家集これあり候はゞ、書き入れなどはこれなきや。
右條々宜敷御頼み申候そのため重ねて是の如くに御座候。謹言。

十月二十三日　　　　　　松尾半左衛門

其角様

去來様

奥書の頭陀の内の品の中、五寸に六寸の切の事、並に松島蚶潟の袷の事、御望みの由、その外何品に依らず、隨分御勝手次第になさるべく候。少しも苦しからず候。以上。

使札を以て芳意を得候。向寒の節に候へども、益御安泰、御寺務なさるべく、恭しく賀し候。拙者別條なく罷在候。然れば芭蕉居士遷化いたされ候砌、葬式の節は、段々御苦勞なし下され、忝く存じ奉り候。早速罷越し、御禮詞等申述べ候筈に御座候へども、存じながら疎略に打過ぎ、本意に背き候。此段御宥恕なされ下さるべく候。隨て左の通(原本缺字)納仕候間、宜しく御回向なされ下さるべ

く候。拙者も長々の病後、今以て引入をり申し候ゆゑ、出勤仕り候へば、早速墓參仕るべく候。その節拜顔の上萬々申し上ぐべく候。先は右の御禮詞まで、斯くの如くに御座候。以上。」

十二月二日　　松尾半左衛門

義仲寺樣

覺

一　御布施　　金二百疋

一　同御佛米御齋米料　　同二百疋

一　同御茶湯料　　同百疋

一　御布施　　同百疋

右　　松尾氏一類中

飛札を以て御意を得申候。益御淸雅賀し奉り候。こゝもと無意に居り申候。然れば、師翁遷化の事承り、途方に暮れ候。いかに成行き申すべきや。たゞ闇夜と相成、たゞ愁涙までに候。とりあへず

一句案じ候。靈前に御敬手下さるべく候。以上

十月二十三日　　　　　　　　　　　には

去來雅丈

告げて來て死顔ゆかし冬の山　　　露沾

此の外、諸國の弔儀數百箇所、繁雜ゆゑに之を除く。

頃日土芳卓袋歸郷の砌申遣し候筈のところ取紛れ失念仕候ゆゑ、今日一人差立て申候。先づ以て、長々の御所勞、未だ御快く御座なき段、憚りながら隨分御自愛專一に存じ奉り候。此の間南雅丈より御聞きなされ候通り、亡師一七日、御靈前に於て御追善の百韻、首尾よく興行に相成、いづれも滿足仕り候。然ればその席に御傳來の烏羽の文台立て申候。右此の文台の事は、御聞及びも候はん、季吟考人より亡師に御讓りの風雅傳來の雅物に御座候。根元玄旨法印より紹巴に御傳へになり、貞德、貞室、季吟、亡師と傳はり候。斯の如きの重器に候へば、亡師一代尋常の俳席には御用ひも御座なく、深川の重器と承り候までに候。然るに先年猿蓑集選成就仕り、吟聲の砌、深川より御取寄

せに相成、そのまゝに義仲寺に召置かれ候。亡師も御門人の中に御傳へなさるべき御心にも御座のるべく候へども、亡師は一體此の俳諧の事、さやうなる俗事に御頓着なされ候御氣性にては御座なく、全體隱遁禪中風雲の行狀に候へば、傳不傳のところにては御座なく候。併し此の後はその場にては濟み申さず。今度此のまゝに打捨て置き候はゞ、一道は立ち申さず、永く芭蕉門埋れ候かとも存じ候。幸ひ此の節其角まゐり居られ候ゆゑ、江戸に於て、其角嵐雪と申しては、亡師左右の御手と思召され、無二の御愛弟にて御座候。それゆゑ御靈前にて、右文台讓りの事、申し問ひ候へば、其角頻りに辭退にて、一昨日罷歸り申候。許六は病身、木節は老衰、美濃尾張は遠方にて手屆き申さず、外には若輩の者ばかり、それゆゑ一先づ右文台を義仲寺眞愚上人に預け置き、一二年も過ぎ候はゞ、若年の者ども、追々出精の上、拔群の者も出來申すべく、上人に申問ひ候へば、洛傍の廢寺、風火災、又は賊難の恐れ、貧坤獨居ゆゑ、心底にまかせず、と申し候斷りにて御座候。只今にては預け置くべき所も御座なく候。道心の御人體に候へば、とかく申し入るべき筋もこれなく、此の上は、右の雅物に候條、少比貴方に御預り置き下さるべく候。來春になり候はゞ、拙者參以、御熟談も仕るべく候、則ち右の品此の者に持たせ遣し候。諸事御賢察下さるべく候。恐惶齋言。

十月二十七日　　　　向井去來

松尾半左衛門様

貴翰捧讀。先づ以て、此の間は前後の御取計ひ、重疊御勞煩はし下され、忝く存じ奉り候。然れば、烏羽の文台の事、仰せ聞けられの趣、逐一承知仕候。貴命の如く、右文台の事は、日外亡弟よりも承り、至て大切なる雅器に御座候由、右の器物引譲りの事、御心配の段、御尤千萬の事に存じ奉り候。然るに其角好き時節にまゐり合はせ居られ、辭退の儀、手前も不承知に存候。芭蕉門人に其角嵐雪と申すことは、日本に俳諧好み候者、誰れ存ぜざる者はこれなく候。然れば門人中に何人か達背の御人もこれあるべくとも覺え申さず。右に就きては、拙者より御頼みも申すべく候へども、歸鄕になり候と申す事に候へば、その儀も能はず候。且つまた眞愚上人御返答の儀は、御尤の事に存じ奉り候。將たまた拙者方に暫く御預けなさるべき旨、併し我等ことは肉身の事に候へども、俗士の事に候へば、風流中の品物、暫くも預り候境涯にこれなく候。何分にも、これは雅器の事に候へば、貴樣方に手前よりお預け申したく候。仰せの通り、明春にもなり候はゞ、拙者罷越し、拜面の

上、ともかくも仕るべく、是非々々譲り方御座なき節は、季吟未だ御存生の事に候へば、元の通り返上納仕るべく、とても先づそれまでは、貴雅の方に御預り置き下さるべく候。偏に頼み奉り候。さ候はゞ、芭蕉魂魄も滿足たるべく候。卓袋土芳より始末は承り申候。恐惶謹言。」

十月二十九日　　松尾半左衛門

命清判

向井去來様

鳥羽文台　一脚　黒塗

長さ一尺九寸、幅一尺二寸、高さ四寸、板厚み三分、筆反一尺一寸。

右は師嗣相承の印、季吟翁より先師に御相承なされ候重器に候。今度拙者に御預けなさるべき旨につき、たしかに預り置き申候。後證如件。」

元祿七年甲戌十一月四日　　向井去來

松尾半左衛門殿

但三ヶ所疵二ヶ所は小指先程、一ヶ所は小さき摺、四方の角損じあり、

芭蕉俳諧史　完

昭和六年九月廿日印刷
昭和六年九月廿五日發行

不許複製

芭蕉俳諧史奥付
定價金壹圓五十錢

校訂者　勝峰晋風
　　　　吉木燦郎

發行者　湯淺脩一
東京市日本橋區藥研堀町四八

印刷者　塚田十五郎
東京市神田區今川小路一ノ四

發行所　浩文社
東京市日本橋區
兩國藥研堀町
電話浪花　四四八六二番
　　　　　四三九三二番

昭和五年一月五日印刷・昭和五年一月十五日二十七版發行

